サタンの反乱 艱難期への序章

第 5 部　裁き、回復、置き換え
(オンラインでもご覧いただけます。www.ichthys.com)
ロバート・D・ルギンビル博士

「サタンの反乱　艱難期への序章」シリーズの目録です。

第 1 部：サタンの反乱と堕落
第 2 部：創世記のギャップ（空白期）
第 3 部：人間の目的、創造と堕落
第 4 部：サタンの世界システム。過去・現在・未来
第 5 部：裁き、回復、置き換え

第 5 部の内容

イントロ： 聖別と神の計画
I. 裁き、回復、置き換えＩ：立場上の勝利（子孫繁栄と約束）
　　1. 裁きＩ：サタンと宇宙の裁き
　　2. 回復Ｉ：地球の(回復)
　　3. 置き換えＩ：アダムと、サタンに取って代わる最後のアダム
　　4. サタンの反応：アダムとエバの誘惑と堕落
II. 人間の歴史における神の計画
　　1. 人間の歴史における唯一の中心的人物
　　2. 人間の歴史の二つの段階： 旧約と新約におけるイエス・キリスト
　　3. 巡礼の時代--人類の歴史における三つの荒野
　　4. 人類の歴史の四つの時代
　　5. 人類の歴史における五つのディスペンセーションの区分
　　6. 人類の歴史における六つの歴代期
　　7. 人間の歴史の七日
　　8.「七日間」解釈の根拠
　　9. 人間の歴史の七日間の具体的な年表
III. サタンの対抗戦略
　　1. 人類本来の性質の純粋性に対する洪水期前のサタンの攻撃（ネピリム族）
　　2. 人間の持つ自由に対するサタンの洪水期後の攻撃(バベルの塔)
　　3. メシヤの血統に対するサタンの攻撃（反ユダヤ主義）
　　4. キリストの体に対するサタンの攻撃（教会の迫害）

5. サタンの究極の攻撃(大艱難期)
6. サタンの最後の戦い(ゴグ・マゴグの反乱)

IV. 来たるべき事柄: 裁き、回復、置き換えの第二、第三段階
1. 第一段階: 憲法。永遠の勝利のための基礎を築く(「拡大」の段階)。
2. 第二段階:終了(完了 completion)
3. 第三段階:完成(Consummation

V. 神様のサタンに対する処分についての歴史的概観
1. 神のサタンに対する最初の処分
2. 神様のサタンに対する暫定的な処分
3. 神様のサタンに対する最終的な処分

VI. 神様の Q.E.D

VII. 艱難期の背景

はじめに: 聖別と神の計画:

前回のレッスンでは、悪魔の組織、戦術的な計画とやり口、そして人類を奴隷にさせるための統合システムについて説明しました。 ここでは、神の視点に立ち、神がいかに人類の歴史のプロセスを完全にコントロールしておられるかを見ていきます。 このシリーズの最終回では、人類に対する神の御計画が、歴史の最終的な結末に向かって確実に成就していき、その過程で悪魔の抵抗を断固として押しのけ、悪魔と彼のもたらした全ての悪が宇宙から最終的に根絶されるまで、あらゆる局面で悪魔を打ち負かすという、時系列的かつ戦略的な概要に焦点を移します。 神の真理の多くの側面がそうであるように、裁き、回復、置き換えのプロセスは、神のご計画全体を代表する三つの行動であり、それ自体が三つの異なる部分に分割されています。 これらは、クリスチャンの聖化(ペテロ・シリーズ#13 参照)、すなわち、救われていない人間の堕落によって失われたものが、より完成された形で永遠の神との交わりにおいて回復される過程と対応しています。

- 初期聖化:キリストにおいて、イエスを信じる信仰によって神の家族に入り、交わりが回復されます(ただし、来たるべき祝福の完全な現実は将来においてなされます)。創世記 1 章 3 節で神が宇宙に光を回復されたように、新しい信者は世の真の光であるイエス・キリストを信じることによって暗闇から光に移され(ヨハネ 8 章 12 節; コリント 1 章 13 節; ヨハネ 1 章 5 節, 1 章 9 節参照)、「主にある光」(エペソ 5 章 8 節)の立場となります。

- 経験的または進歩的聖化:キリストに従うことによって、私たちはこの世で霊的に成長し、変えられ、自分の中の罪や周りの世界の悪にもかかわらず、回復された人のように

生きるという目標があります(それによって神の力を発揮し、神の栄光を表すことができます)。神様は、この暗い世界の証人として、宇宙の光を維持しておられるように(詩篇 19 篇 1-6 節, 74 篇 16 節, 136 篇 7-9 節;イザヤ 40 章 26 節;エレミヤ 31 章 35 節;ローマ 1 章 20 節)、信者である私たちは、人生の歩みにおいて、神様の光を生き方に反映し続けることが求められています(第二コリント 3 章 18 節; エペソ 5 章 8 節)。

- 究極の聖化:キリストと共に、私たちは復活によって文字通り変えられ、回復のプロセスが完了します(第一ヨハネ 3 章 2 節)。ちょうど神が終末に、限りある回復された太陽の光を御子と御自身の栄光に置き換えられるように(黙示録 21:23)、私たち信者は最終的に神の国で永遠に天の星のように輝きます(ダニエル 12:3; 1 コリント 15:41-43; 黙示録 2:28 参照)。

神の全てのものに当てはまる歴史の全体的な計画は、こうした信者の個人的な聖化の計画と対応する形で構築されています。 裁き、回復、置き換えの第一段階は、アダムという人の中で、神の調和のとれた普遍的な秩序を地位的に回復するための舞台となります(ただし、実際に実現するのはまだ先のことです)。 第 2 段階(人間の歴史)では、あらゆる時代の信者の中で経験的な回復が行われ、イエス・キリストの至福千年で頂点に達します(そこでは、罪が存在し続けているにもかかわらず、恵みと真実と善が支配します)。 第 3 段階では、現在の物質的な宇宙は破壊され、サタンとその従者たちが最終的に処刑され、完全に復活した人間と、その他の完全な(天使の)被造物が、父と子と共に、しみや傷のない完全な世界で永遠に生きるようになります。

I. 裁き、回復、交代 I： 地位上の勝利（子孫と約束）

1. 裁き I ：サタンと宇宙の裁き

人類の歴史が始まる知られざるはるか昔、悪魔は神への反逆を考え出し、指揮しました。その主題がこのシリーズで取り上げられています。 サタンは、その傲慢のゆえに、思いが堕落し、神は(ご自身の性格と完全性のゆえに)悪魔に責任を追及することができないと信じ込み、他の者達をもそそのかしました(本シリーズの第 1 部参照)。 このクーデターの試みは、サタンとその支持者たちが驚いたことに、最初の圧倒的な裁きを受け、宇宙の中心であり、サタンの反乱の中心である地球は破壊され、宇宙全体のブラックアウトが起こったのです(本シリーズ第2部参照)。 悪魔は、他の天使たちとともに、神が次に何をされるのかを思い慄(おのの)いていました。 しかし、神はサタンとその追随者たちを即座に完全消滅はされず、すべての被造物が全く驚かされるようなこと、つまり破壊されたものを再創造されたのです。

2. 回復-I ：地球の回復

神の方法は本当に不可知で、驚くべきものです(ローマ 11 章 33 節)。 そのすべての方法において、神は「ご自分を隠される」神であり(イザヤ 45 章 15 節; 申命記 29 章 29 節; 箴言 25 章 2 節参照)、世間が想定したり予想するようにではなく、その無限で測りがたい知恵をもって行動されるのです(ヨブ記 5 章 9 節, 11 章 7 節; 詩篇 139 篇 6 節; 伝道の書 8 章 17 節; イザヤ 40 章 28 節; マタイ 11 章 25 節; エペソ 3 章 8 節)。 祝福される時も裁かれる時も、神は聞く人の耳が「鳴る」ような方法で物事を行われる事が常のようです(1 サムエル 3 章 11-14 節、列王紀下 21 章 12 節、エレミヤ 19 章 3 節)。 私たちの神は、予想外の裁きだけでなく、壮大な驚きと祝福の神秘の神であり、その最たるものがイエス・キリストであり、今では彼を信じるすべての人の中に存在しています(コロサイ 1 章 27 節、エペソ 3 章 4-6 節、コロサイ 2 章 2-3 節も参照)。 宇宙の回復の六日間は、まさにそのような予期しない祝福された出来事でした。 神は、(悪魔とその従者たちが望んだように)サタンの反乱を見過ごされるようなことはせず、また(天使たちが恐れたように)神の被造物を完全に消滅させたりもされませんでした。 それらのことの代わりに、いつものように、以前にはなされたことのなかったような想定外のことをされたのです(イザヤ 43 章 19 節、エレミヤ 31 章 22 節参照)。 天と地を再び創造し、人が住めるようにし、「光あれ」という最も重要な命令によって宇宙に光を取り戻あれたのです(本シリーズの第 2 部を参照)。 そして、最も驚くべきことに、神は新しいタイプの被造物を創造されました。この被造物は、天使たちと同じように道徳的に責任を持つものですが、力と知識の点では天使たちよりも低く、神の特徴と栄光を示すことを目的とし、それを軽視していた者たちに取って代わるものでした(本シリーズの第 3 部を参照)。

3. 置き換えＩ：サタンに代わるアダムと最後のアダム

天使は人知を超えた寿命と知識を持っているので、その反乱でサタン側につくか、神側につくか、個々の天使の決断は後になっても取り返しのつくものではありませんでした。(本シリーズ第 2 部参照)。 しかし、神はアダムという人間に最後のオリーブの枝を差し出しました(本シリーズ第 3 部参照)。 地球の破壊と全世界の暗闇という最終的な裁きが迫っているという明白な脅威と、天地の回復という慈悲の約束とが相まって、その後のアダムの創造は、神に反抗していたすべての者達にとって、悔い改める最後のチャンスであり、結局は本当に置き換えられることになるという明確な合図でした;(ヨブ記 4 章 18 節, 15 章 15 節,25 章 5 節,34 章 24 節)。 実際、アダムとエバに「子孫を増やして地を満たすように」という命令が出されていたので、堕落した天使たちは、比較

的短期間のうちに(特に天使の基準では)自分たちが置き換えられることになる代わりの者達が、回復した地球に増え広がることを推測し、考える間もなくなってしまいます。しかし、サタンは考え直すどころか、人間を堕落させることさえできれば、それらの脅威を恐れる必要はないと判断し、神の置き換え計画を妨害するために、即座に全力で取り組みました。 しかし結局、サタンがもたらすことになったのは、最後のアダム(第一コリント15章45節)の到来の約束と最終的な実現のための扉を開くことになったのでした。

4. サタンの反応：アダムとエバの誘惑と堕落

悪魔によるエバの誘惑(その結果としてのアダムの堕落:本第 3 回参照)は、サタンの騙しの手口とその最も強力な武器である「嘘」の構造を示す教科書的な出来事でした(本シリーズ第 4 部参照)。悪魔は、人間の最初の両親を罪に導き、彼らが堕落すること(そして彼らの子孫がすべて堕落すること)で、人類は永遠に自分や自分の従者の代わりの置き換えになることはないと考えました。 しかし、神様は、御子イエス・キリストの約束によって、人類を回復させる方法を初めから計画されていました。 エデンの審判の際、エバは、自分の子孫(イエス・キリストと、彼にあって神を選ぶすべての人々)が悪魔の子孫(その典型である反キリストと、神に逆らうことを選ぶすべての人々を含む)に対抗し、自分の子孫(世の救い主)がその頭を砕く(すなわち、サタンと反キリストおよび彼らに従うすべての人々に対する究極の勝利を得る)と告げられました。 ＜子孫の足の＞かかとが砕かれることについての預言は、この勝利はただで得れるものではなく、私たちすべての者達のために主が十字架の上で死んで支払われる代価について述べています(＜主の犠牲の死については＞創世記 3 章 21 節の皮の衣や、一般的な動物の儀式の犠牲にも示されています)。救われた人類は、神のもとに戻ることで、失ったもの以上のものを取り戻すことができます。 約束された復活によって、選ばれた人類は、あらゆる面で天使よりも優れた存在になるだけでなく、二度と損なわれる事の無い確かな永遠の命を持つようになるのです。 しかし、創世記 3 章の呪いから生まれた最大の祝福は、イエス・キリストの約束と(現在おける)主の実在です。 人間が自分の罪によって自らにもたらしてしまった死の判決に対して、神は御子の死は、死から永遠の命をもたらしてくれたのです。私たちは、今はおぼろげにしか理解することができないこの犠牲、つまり私たちが神に対して犯した罪にもかかわらず、神にとって最も大切なものを私たちのために犠牲にされたことは、神の被造物に対する愛を、どんな疑いの余地もないほどに示してくれました。 神が被造物である天使たちを見捨てず、宇宙を回復されたように(アダムの創造によって、堕落した被造物＜堕落天使ら＞に二度目のチャンスを与えることまでされました)、イエス・キリストというお方において、神は私たちを見捨てないどころか、人類のためにご自身が被造物と結婚されたのです。キリストの人となりにおいて、真の人間性は、永遠の神性と不可分かつ取消されること

がない形で結びついたので、神を選ぶ全ての被造物に対する神のお約束は、確かなものとなりました。

> 神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ 3 章 16 節)

これは神のまばゆいばかりの、言葉では言い表せないほどの栄光です。 神は、厳しい裁きの代わりに、無比の恵みをもって、イエス・キリストという方において、受け入れるすべての人に、憐れみを与えてくださいます。そういうわけで、イエス・キリストは全人類の歴史において鍵となる方です。なぜなら、イエス・キリストにこそ、人類が故意に自らの上に招いた死の宣告に対する唯一の解決策があり、イエス・キリストの中で神と人とが永遠に結ばれ、イエス・キリストの御名による永遠の命の絶対的に堅固な約束が疑う余地もなく保証されているからです。 この方によって、私たちは永遠に主と結ばれているのです:

- 神の性質を持つ者として(第二ペテロ 1 章 4 節)。
- 主と父との交わりの中で(第一ヨハネ1章 3 節)。
- 主の花嫁として(エペソ 5 章 25-32 節;黙示録記 19 章 7 節)。
- 私たちは主ご自身の中にバプテスマされました(水とは関係ありません:マタイ 28 章 19 節;ローマ 6 章 3-11 節;第一コリント 12 章 13 節;ガラテヤ3章 27 節)。
- 主の中におり、(ヨハネ 14 章 20 節;マタイ 28 章 19 節)。
- 切っても切り離せないほど、彼と結びついています(ローマ 6 章 5 節)。
- 神様がすべてにおいてすべてとなるまで(第一コリント 15 章 28 節)
- 私たちの中におられます(ヨハネ 14 章 20 節; ローマ 8 章 10 節; 第二コリント 13 章 5 節; ガラテヤ 2 章 20 節; エペソ 3 章 17 節; コロサイ 1 章 27 節)。

II. 人間の歴史における神の計画

私たちの最初の両親を罪に引き込もうとサタンが思いつくずっと前から、その後に人類史と呼ばれることになる全過程における、すべての人のための神の御計画はすでに決定されていました。すなわち、神の愛する御子の受肉と犠牲の死による＜人類の＞救いです。 実際、イエス・キリストを抜きにして、人類に対する神の御計画を語ることはできません。 なぜなら、イエスの名とその人において、人類に対する神の全意志が完全に表現されており、その名によってのみ、アダムとエバの子孫である私たちは、避けられない運命から救われるからです。 楽園が終わり、私たちが知っている歴史が始ま

った時から、すべての人の人生において、イエス・キリストが原点となってきました。そして、神が歴史を終わらせ、最後に全世界のすべての悪の痕跡を焼き尽くすまで(第二ペテロ 3 章 7-13 節)、キリストはすべての人の人生(時系列的にも霊的にも)の分岐点となります。 すべての人の人生は、二つの本質的な段階に分けられるからです。

1) 認識前:生まれてから、神を意識するまで。
2) 決断後:神に応答するか(キリストへの信仰に至る)、または神を拒絶するかという決断以降。

人の人生の山場は、その人が神の存在を意識したときに訪れます。子供の時に死んだ人(または精神的に子供のままの人)を除いて、神様はすべての人間をこの時点に導きます(ローマ 1 章 18-23 節;詩篇 19 篇 1-6 節;使徒 17 章 26-27 節参照)。 神の存在に応答することは、(十字架の前に予見され約束されていて、十字架の後に肉において約束が実現したので)神の子を信じることにつながりますが、拒否すると必然的に迫っている事態から解放される希望がなくなります [1]。だからこそ、イエス・キリストはすべての人生の真の中心であり、適切な焦点であり、すべての人生の究極の分岐点にある人物であり、絶対的に、疑いなく、救いをもたらすことのできる唯一の道なのです。

1. 人間の歴史における唯一の中心的人物

> 私たちの主キリスト・イエス[という人物]にあって実現された、時代(歴史)のためのご計画に従って…。(英文直訳:エペソ 3 章 11 節)

イエス・キリストは、人類の歴史の要(かなめ)です。 彼は、十字架の以前には覆われた謎であり、十字架の後になって啓示されたものです(エペソ 1 章 9-10 節、3 章 9-10 節、コロサイ 1 章 26-27 節)。 彼は神の子であると同時に、人の子でもあります(完全で真正な人間性を備えています:マルコ 8 章 31 節)。 イエス・キリストは、人であると同時に神でもあり、人類の歴史の転換点である十字架において、人間に代わって自らを神への生贄とする資格を持っておられる唯一の方です [2]。最高峰、あるいはすべて

---

[1] 神を意識するようになってから、(キリストへの信仰を通して)神のために決断するまでの期間はさまざまです。福音のメッセージはすぐには得られないかもしれませんし、当人が躊躇するかもしれません(時には死ぬ寸前まで)。しかし、神はご自身の完全な方法で、すべてを良い方向へと導いてくださいます。神の視点に立てば、最終的な決断が下されるまでの間がどんなに長かろうと、キリストを信じる(あるいは神を拒絶する)時点がすべての人生の分かれ道なのです。
[2] キリスト論の教理カテゴリーについては、『聖書の基礎知識』のパート 4A: キリスト論で詳しく説明しています

が最終的に引き込まれる巨大な渦のように、神の視点から見た最も完全な意味で、イエス・キリストは歴史**なのです**。というのも、人間の歴史は、十字架上での主の救いの御業なしには何の目的もないからです(これが歴史のすべての意味です)。 最初の、先史時代のエデン(このシリーズの第 1 部を参照)から、エデンの園、私たちが今いる暗い世界(主が唯一の光である:ヨハネ 1 章 4-5 節; 1 章 9 節; 3 章 19 節; 8 章 12 節; 第一ヨハネ2 章 8 節)、そして来るべき神の国まで、イエス・キリストはおられ、今も昔も、目に見える神の位格、神の顔であり(第二コリント 4 章 6 節; ヘブル 1 章 3 節)、これまで生きてきたすべての人にとっての究極の論点なのです。 そういうわけで、御子とその救いの御業を受け入れない限り、誰も父なる神に近づくことはできません。

> 父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。(ヨハネ5章 22-23 節)

> 私を信じる者は、私を信じるのではなく、私をつかわされたかたを信じるのであり、 (ヨハネ 12 章 44 節)

> わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

イエス・キリストは、父の御心に応えて、人間も天使も含めた宇宙の創造主であり、万物の存続はイエス・キリストによります [3]。したがって、人間の歴史が繰り広げられる舞台もイエス・キリストのよるのであり、世界はイエス・キリストにより、イエス・キリストのために創造されたのです。

> 万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(コロサイ 1 章 16-17 節)

2. 人間の歴史の二つの段階: イエス・キリストの予告と成就

キリストが人間の歴史の中心人物であるように、キリストの死とそれに続く復活は歴史の中心的な出来事です。 神の視点から見ると、十字架以前のすべての歴史は十字架

[3] この問題については、『聖書の基本』の第 1 部「神学: 神の研究」で詳しく取り上げています:

を前にしており、それ以降のすべての歴史は十字架を後ろにしています[4]。十字架は歴史を二つの別々の段階に分けますが、どちらも歴史の中心となる人物に言及しています。

- 第一段階　**影**（メシアとその犠牲への期待）。
- 第二段階　**実在**（イエス・キリストの現れとその犠牲）。

（復活がそのすぐ後に起こることになる）十字架は、明らかに（復活とともに）救い主の地上の人生の焦点であり、歴史の焦点でもあります。すべての人類の歴史は、この点に集約され、そこから発展していきます。 神殿の儀式やモーセの律法の影は、彼と彼の御わざの中で成就され、復活して神の右手に高められた彼の現実に道を譲るのです。 人間の人生が二つの段階に分かれていて、キリストを受け入れるか（あるいは神を拒絶するか）が根本的な転換点であるように、神は人間の歴史を秩序立てて、愛する御子が現れて十字架上の死によって救いを実現することが「＜二つの＞時代の結合」を形成するようにされました（ヘブル 9 章 26 節、以下も参照：マルコ 1 章 15 節、ローマ 5 章 6 節、ガラテヤ 4 章 4 節、エペソ 1 章 10 節、1 テモテ 2 章 6 節）。 旧約聖書の期間を通して、来るべき救い主の約束は、神によって「多くの時と方法で」明確に与えられました（ヘブル 1 章 1 節;参照：創世記 3 章 15 節、申命記 18 章 15 節、詩篇 2 章 12節、イザヤ 9 章 1-7 節、11 章 1-5 節、49 章 5-7 節、52 章 13 節ー53 章 12 節、ダニエル 7 章 13-14 節、ゼカリヤ 13 章 1 節）。さらに、メシアが人類のために行う身代わりの犠牲は、モーセの律法が与えられる前から、動物の犠牲を通して絶えず予見されていました（例：創世記 3 章 21 節、4 章 4-5 節、8 章 20-21 節）。しかし、メシアの正確な**性質**（人間でありながら神であること）と、その来臨の正確な**方法**（最初は罪を贖うためのしもべとして、次に悪を根絶するための王として、二度来臨されること）は謎に包まれていました（エペソ 1 章 9-10 節、3 章 9-11 節、コロサイ 1 章 26-27 節参照）。 聖書によると、旧約聖書の信者の多くは、現在私たちが理解しているメシアとその働きについて知ることを切に願っていました（第一ペテロ 1 章 10-12 節、ルカ 10 章 23-24 節参照）。 しかし、メシアが神の謙虚なしもべとして十字架にかかったとき、彼らがメシアに期待していた、王としての役割を果たしていなかったこともあって、メシアは自分の民から拒絶されました（マタイ 21 章 9 節、27 章 41-43 節、ヨハネ 6 章 15 節参照）。 彼らは王冠を求めていましたが、十字架でつまづいたのです(ローマ 9 章 32-33 節; 第一コリント 1 章 23 節; ルカ 7 章 23 節参照)。 主が選んだ人々でさえ、主が何をしようとしているのか、その時は完全には理解できませんでした（例えば、マルコ 9 章 31-32 節、ルカ 9 章 44-45 節）。 イエスの死と復活の後になって、イエスの十字架上での救いの業の真の実態が彼らに完全に明らかになったのです（ヨハネ 14 章 25-26 節参照）。イ

[4] 何年も前にこのことを私に最初に指摘してくれたリン・マーレー氏に感謝します。

エス様のカルバリの十字架での犠牲は、罪の赦しを求めて神を信頼していた(あるいは信頼しようとしていた)すべての人に救いをもたらしました。 その結果、私たちはもはや、時と方法がおぼろげにしか分からない救いが、将来実現することを期待するのではなく、主がどのようなお方で、ご自身の尊い血を流して私たちのために何をしてくださったのかを、より完全に理解した上で主の再臨を心待ちにするようになったのです。メシアが実際に来られ、十字架で勝ち取った勝利が達成されたことで(ヨハネ 16:33、コロサイ 2 章 15 節, 黙示録 5 章 5 節)、人類の歴史は今、第二の、そして最後の段階に入りました。 私たちはもはや、来たるべきものの影に対処するのではなく(コロサイ 2 章 16-17 節、ヘブル 8 章 5 節, 9 章 11-12 節, 9 章 23 節, 10 章 1 節)、代わりに、神である人、イエス・キリストの犠牲的な死と栄光の復活に基づく現実を通して、律法の影に取って代わった神の驚くべき恵みを直接受け取るのです(ローマ 6 章 14 節)。 今日、私たちは十字架の歴史的な現実を享受しながらも、将来の冠の現実を待ち望み、私たちの主であり師である方が栄光のうちに戻って来られて、ご自分の王国を手にすることを切に待ち望んでいるのです(第一コリント 1 章 7 節; 16 章 22 節; ピリピ 3 章 20 節; 第二テサロニケ 1 章 7 節; 第二ペテロ 3 章 12 節)。

祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。(テトス2章13節)

旧約と新約:

人類の歴史のこの二つの段階は、それぞれ旧誓約(または証言)と新誓約(または証言)という二つの契約に対応しています。 ヘブル語で「契約／証言」を意味する言葉は「ブリート beriyth (בְּרִית)」で、文字通り、条約、同盟、合意を意味します。 これらの「契約」は、対等な二者によってなされるものではなく、神が人間のために自らの意思でなされるものであるため、翻訳者は常に、旧約と新約の「ベリヨート」を、個人対個人や国家対国家の契約と区別する必要性を感じていました。しかし、「ベリヨート」の重要なポイントの一つは、神が約束したすべてのことを実現するために、神のためではなく、私たちのために御自身を縛ることを選ばれたということです。 しかし、私たちの励ましと忍耐のために、神はご自身の言葉を正式に「批准＜ひじゅん：条約に拘束されることへの同意＞」されることによって、私たちが受けるに値する、あるいは求める以上の保証を与えようとされたのです(ヘブル 6 章 16-20 節参照)。

というわけで、契約／証言／ブリートは第一に神からの**約束**であり、このような理由から、新約聖書では、ブリートという言葉が「約束」(エパンゲリア epangelia: ἐπαγγελία；特にエペソ 2 章 12 節「約束の契約」参照)という概念と密接に結びついているのです。 さて、ギリシャ語で「約束」を意味する言葉はエパンゲリアではなく ディア

テーケ diatheke (διαθήκη)であり、これがヘブル語のブリートを文字通り翻訳している言葉です。しかし、新約聖書におけるディアテーケの使用法が明らかにしているように、「契約」とは本質的には合意であり、神が自ら果たすべき義務を負った厳粛で形式化された約束または約束の集まりなのです(参照:ルカ 1 章 72 節、使徒行伝 3 章 25 節、ローマ 11 章 26-27 節、第二コリント 3 章 14 節、ガラテヤ 3 章 17 節、エペソ 2 章 12 節、ヘブル 7 章 22 節)。 したがって、契約／証言／ブリートという考えを理解する最も良い見方は、神の人類に対する究極の約束という観点から考えることです。 旧約(実際にはアダムとエバ、ノア、アブラハムなどに対する一連の約束で、使徒行伝 13 章 23 節,13 章 32-33 節, 26 章 6 節; ローマ 4 章 13 節, 9 章 4 節; ガラテヤ 3 章 16 節, 3 章 29 節, 4 章 28 節; エペソ 3 章 6 節;第二テモテ 1 章 1 節; ヘブル 4 章 1 節, 6 章 12 節,9 章 15 節, 10 章 36 節, 11 章 38-39 節;第一ヨハネ 2 章 25 節参照)は、何よりもまず、**救いの約束**(およびそれに伴うすべてのこと)であり、一方、新約は本質的にその**約束の成就**(キリストの受肉、犠牲、および復活を通して)です [5]。したがって、旧約は、影を通して新約、キリストの現実と、キリストによる救いと永遠の命に関する神のすべての約束の成就を見据えるものです(第一コリント 11 章 25 節; 第二コリント 1 章 19-20 節, 3 章 6 節; ヘブル 9 章 15 節)。

> わたしたちは、神が先祖たちに対してなされた約束を、ここに宣べ伝えているのである。神は、イエスをよみがえらせて、わたしたち子孫にこの約束を、お果しになった。(使徒行伝 13 章 32 節-33 節前半)

> わたしは言う、キリストは神の真実を明らかにするために、割礼のある者の僕となられた。それは父祖たちの受けた約束を保証すると共に、異邦人もあわれみを受けて神をあがめるようになるためである、「それゆえ、わたしは、異邦人の中であなたにさんびをささげ、また、御名をほめ歌う」と書いてあるとおりである。(ローマ人への手紙 15 章 8-9 節)

> 食事ののち、杯も同じ様にして言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である。 (ルカの福音書 22 章 20 節)

人間の視点から見ると、厳粛な契約の形でなされた神の約束の背後には、常に希望が中心的な考えとして存在しています。 神が私たちの救いを約束し、誓い、義務を負い(旧約の視点)、キリストがその血によって旧約のすべての約束を成し遂げ、完全

[5] このように、創世記 3 章 15 節に約束された子孫と、創世記 12 章 7 節にアブラハムに約束された子孫は、イエス・キリストにおいて成就します(ガラテヤ 3 章 16-29 節)。

に批准してくださったこと（新約の視点）は、筆舌に尽くしがたい励ましのニュース、良いニュースであり、いつの日か本当に主と共にあるという私たちの希望を力づけ、強めるものです。

> いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、**約束のもの**を受け継ぐ人々に[アブラハムの信仰に倣って]、ご計画の[救いとそれによる祝福の]不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。（創世記 22:16-17）それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事がら（すなわち彼の言葉と誓い）によって、前におかれている**望み**を捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この**望み**は[実に]、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ[天の]「幕の内」[最も聖なる所]にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。（ヘブル 6 章 16-20 節）

聖書の意味している「希望」は、現代英語でよく使われている言葉とは大きく異なります。 聖書の意味での希望は、私たちが願う不確かなものではなく、私たちがまだ見ることのできない確実なものです。一般のギリシャ語では、これと同じ考えが反映されていて、エルピスelpis (ἐλπίς)という言葉は、将来の事柄についての見込み、良きにしろ悪しきにしろ、確かな期待を意味します。[6] 新約聖書では、希望とは常に良いものであり、これから起こることに対する確信に満ちた期待であり、具体的には、私たちの救い、復活、イエス・キリストのもとに集まること、そしてイエス・キリストと共に栄光ある永遠についての確実で確かな知識、信念、確信を意味しています。 私たちはまだそれを見ていませんが、キリストの勝利とキリストへの私たちの信仰によって、私たちが希望することを実際に経験するのは時間の問題であることを確かに知っています。

> わたしたちは、この望み[私たちの体の復活]によって救われているのである。しかし、目に見える望みは[本当の]望みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人があろうか。もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである。（ローマ 8 章 24-25 節）

---

[6] ヘブル語で希望を意味する最も一般的な二つの単語は、語源の yachal（יח）と qavah（קוה）に由来し、それぞれ「待ち望む」と「熱心に探す」を意味し、英語の空想や願望という概念ではなく、まだ実現されていないものに対する確かな期待という考えを強調しています。

さて、信仰とは、望んでいる事がらを確信し、[信仰は]まだ見ていない事実を確認することである。(ヘブル 11 章 1 節)

旧約は、約束されたメシアの到来と、その御業による全人類の贖いを待ち望んでいました(ローマ 11 章 27 節)。イエス・キリストの出現と十字架上の御業が達成された今、神が全人類と交わされた新しい契約には、赦しだけでなく、無数の祝福が含まれており、その中でも聖霊の賜物が特に顕著です(ヨハネ 7 章 39 節、イザヤ 59 章 21 節参照)。 キリストが復活し、天に昇り、父の右に座している今、キリストを信じる私たちは、聖霊の賜物と霊的な賜物を受けています。これは旧約の観点からは実現されていない約束ですが、新約の下ではキリストが肉体を持って来られたように、現実のものとなっています(イザヤ 44 章 3 節、ヨエル 2 章 28 節と使徒行伝 2 章 14-21 節; ローマ 12 章 5-8 節; 第一コリント 12 章 1-1 節; エペソ 4 章 7-13 節を比較)。

このように、イエス・キリストは、歴史の二つの局面と、それに付随する二つの契約の鍵なのです。 イエス・キリストは唯一の預言者であり(申命記 18 章 17-19 節)、永遠の祭司であり(詩篇 110 篇 4 節)、約束された王です(イザヤ 9 章 6-7 節)。 旧約聖書のすべての約束(ローマ 15 章 8 節、使徒行伝 3 章 24-26 節参照)、旧約(第二コリント 3 章 14 節、ヘブル 7 章 22 節)、律法(ローマ 10 章 4 節、ヘブル 7 章 12 節)を成就してくださる方です。 この方は、私たちを旧約の束縛から解放し、新約の自由へと導いてくださった方です(ガラテヤ 4 章 24 節〜)。 私たちのために、以前よりも良い契約、より良い約束に基づいた契約を仲介してくださった方です(ヘブル 8 章 6 節,12 章 24 節、エペソ 2 章 12 節、ヘブル 9 章 15-16 節参照)。

ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて(新しい契約)立てられた、さらに(昔の契約よりも)まさった(新しい)契約の仲保者となられたことによる。もし初めの契約に欠けたところがなかったなら、あとのものが立てられる余地はなかったであろう。

ところが、神は彼らを(はじめの契約の下にいる者を)責めて言われた、

「主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ日が来る。それは、わたしが彼らの先祖たちの手をとって、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らがわたしの契約にとどまることをしないので、わたしも彼らをかえりみなかったからであると、主が言われる。わたしが、それらの日の後、イスラエルの家と立てようとする契約はこれである、と主が言われる。すなわち、わたしの律法

を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつけよう。こうして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう。彼らは、それぞれ、その同胞に、また、それぞれ、その兄弟に、主を知れ、と言って教えることはなくなる。なぜなら、大なる者から小なる者に至るまで、彼らはことごとく、わたしを知るようになるからである。わたしは、彼らの不義をあわれみ、もはや、彼らの罪を思い出すことはしない」[エレミヤ書 31:31-34]。

神は、「新しい（契約）」と言われたことによって、初めの契約を古いとされたのである。年を経て古びたものは、やがて消えていく。（ヘブル 8 章 6-13 節）

旧約聖書のすべての約束が、すでにあらゆる面で、細部にわたって成就しているというわけではありません（ヘブル 11 章 39-40 節）。確かに、新約の下にある今でも、私たちは主の再臨と、復活して主と一緒に集まることを待っています。 しかし、神の約束はすべて、主イエス・キリストが十字架で罪に勝利したことによって、原理上には完全に成就しています。この勝利によって、私たちは罪から贖われ、来たる永遠の祝福すべてへの道が開かれたのです。 したがって、イスラエルと私たちに対するすべての約束の実際の成就、私たちの復活、永遠の命、報酬、そして新しい天と地での神との永遠に対して私たちは、短い時間だけで隔てられているだけなのです（それが、私たちが熱心に期待して待っている現実なのです：第二ペテロ 3 章 10-13 節）。

概要： 古代中東の一般的な契約は、二者間で交わされ、正式な血の犠牲を必要とし、双方が指定された条件に従うことに批准＜承認/同意＞することで成立します。 聖書の契約は、神が人類に代わって交わしたもので、神に忠実に従うすべての人を祝福することを約束しています。 神の役割は、（復活と永遠の命に至らせる）祝福を与えることと、血の犠牲（祝福を受けるために私たちを罪から贖うために必要な御子の賜物）の提供の二つです。 私たちの役割は、主への信仰を保つことです（キリストを受け入れ、主を信頼し、信じ、主に従い続けることです： 創世記 15 章 6 節参照）。神の契約は正式な約束であり、神に従うことを心に決めた人々に確信を持った希望の強い根拠を与えてくれます。なぜなら、神は私たちが待ち望んでいる永遠の命とそれに伴う祝福を約束してくださっただけでなく、それらのことを実現するために取り消しができない形で、ご自身を拘束しおられます。したがって、これらの契約の成就の一部はまだ将来のことですが（両契約の中心である神の恵み深い救いの申し出を受け入れる人々は、アブラハムの信仰と忍耐のパターンに倣って、成就を忍耐強く待ちながら神を信頼する必要があります）、約束を受け入れて信仰を持続するすべての人にとって成就は絶

対に確実です[7]。 旧約と新約は共に血によって批准＜最終承認＞されます： 旧約は動物の血の影＜予型＞によって、新約は私たちの主イエス・キリストの十字架上の死によって（私たちのために、私たちの身代わりとしての死（出血多量で死なれたのではありません：ヨハネの福音書 19 章 30-37 節）という現実が「キリストの血」という言葉によって**象徴されています**。ヘブル 9 章 16-22 節）。 神は約束し、約束を正式なものにし、神が結んだ契約を果たすために最も厳しい代価を払います。その代価とは、神の唯一の最愛の息子の犠牲です。 私たちは、ただイエスを信頼し、イエスに忠実であり続けるならば、神の無条件で輝かしい恵みの行為の恩恵を受けます。キリストの血によって完成された救いの現実を宣言する聖餐式に与る現代の信者であろうと（マタイ 26 章 26-29 節）、または将来の救いの現実を予見した「契約の」犠牲の食事に与る過去の信者でも（出エジプト 12 章 1-12 節、創世記 31 章 51-54 節参照）、私たちのしていることは「イエスが来られる時に至るまで、主の死を告げ知らせる」（第一コリント 11 章 26 節）もので、信仰と忠誠の誓いを守り続けることです。 古い影＜予型＞の契約（エゼキエル 16 章 60 節「若き日の契約」参照）と記念的な「新しい」契約（エゼキエル 16 章 60 節「永遠の契約」参照）は、このように、私たちが神の御業により、イエス・キリストへの継続的な信仰を通して相続人、分け前として下さる救いを宣言しているのです。

> しかしキリストがすでに[天において]現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって[すなわち、ご自分の死によって]、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないであろうか。それだから、キリストは**新しい契約の仲保者**なのである。それは、彼が初めの契約のもとで犯した罪過をあがなうために死なれた結果、召された者たちが、約束された永遠の国を受け継ぐためにほかならない。（ヘブル 9 章 11-15 節）

---

[7] 旧約聖書では、アダム（贖い主の約束：創世記 3 章 15 節）からノア（主を求める自由と機会を与え続ける約束）に至るまで、数多くの契約が結ばれているのが一般的です：（創世記 8 章 20 節～9 章 17 節）、アブラハム（子孫の約束：創世記 12 章 7 節, 13 章 15 節, 17 章 19-21 節）、ダビデ（御子の約束：サムエル下 7 章 5-16 節）に至るまで、これらの「追加」契約はすべて旧約（別称モーセの律法：出エジプト 24 章 8 節参照）と同じ目的、すなわち、救い主イエス・キリストの人とわざを予表するものです。

主なるわたしは正義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手をとり、あなたを守った。わたしはあなたを民の**契約**とし、もろもろの国びとの光として与え、(イザヤ 42 章 6 節)

3. 人類の歴史における 3 つの荒野巡礼の時代

アダムとエバがエデンの園から追放されて以来、この世界は主に悪魔の支配下に置かれてきました(本シリーズ第 4 部参照)。 エデンの園以来、地上には楽園がなく、主の再臨と祝福された千年の支配(すなわち、千年王国)が始まるまでは、楽園はありません [8]。その時まで、この世界は悪しき者の膝の上に置かれているので、楽しみを満喫するような場所ではなく、神の助けによって通過しなければならない荒野の世界なのです。(1コリント7章29−31節) なぜなら、この世界はまだ神が顕在的に、また個人的に住まわれる場所ではなく、キリストを信じる私たちが神への巡礼の旅をする荒野だからです(歴代上 29 章 15 節; 詩篇 39 篇 12 節, 63 篇 1 節, 119 篇 19 節; ヘブル 11 章 37-38 節, 13 章 13-14 節; 第一ペテロ 1 章 1 節, 2 章 11 節):[9]

その力があなたにあり、その心がシオンの大路[シオンへの巡礼]にある人はさいわいです。彼らはバカ(すなわち、人生の荒野)の[干上がった]谷<「涙の谷」-新改訳Ⅳ>を通っても、そこを泉のある所とします。また前の雨は池をもって<「大いなる祝福で」-新改訳Ⅳ>そこをおおいます。彼らは力から力に進み、シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。(詩篇 84 篇 5-7 節)

それらの人はみな、信仰をいだいて[歩みながら]死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、[生きている間に]はるかにそれ[らの約束を]を望み見て喜び、そして、[事実]地上では旅人であり寄留者であることを、[全世界に]自ら言いあらわした。[信仰を]そう言いあらわすことによって、彼らが[現在通過している世界以外の]ふるさとを求めていることを示している。もし(信者たちが)その出てきた所の[土地の]ことを考えていたなら、帰る機会はあったであろう。しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、

---

[8] このシリーズの第 1 部(「七つのエデン」参照)で見たように、聖書のエデンと楽園<パラダイス>という言葉は、神との交わりにおける至福の場所と同義です。現在の楽園は第三の天として知られ、キリストが神の右の座に着いておられる神の御座の場所です(参照:ルカ 23 章 43 節; 第二コリント 12 章 4 節)。

[9] このシリーズの第 4 部、第 1 項「悪魔の領域におけるよそ者」と、ペテロ・シリーズ#3 をご覧ください。

それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。(ヘブル人への手紙 11 章 13-16 節)

人類の歴史には、三つの荒野巡礼の時代があります。 それらの時代は、そこを旅した巡礼者によって定義され、その名をとっています。

- 異邦人の時代
- ユダヤ人の時代
- 教会の時代

最初の荒野-巡礼の時代(異邦人)は、アダムとエバがエデンの園から追放されてからアブラハムの召集までの時代です。この時代の巡礼者はもっぱら異邦人です。この時代では、巡礼に個人的な焦点が当てられています(つまり、別々の人間として神に従うこと)。

第二の荒野-巡礼の時代(ユダヤ人)は、アブラハムの召命からキリストの誕生までですが、その完成は艱難期の始まりまで延期されます。 この時代の巡礼信者は主にユダヤ人です(イスラエルに関連する異邦人もいます)。この時代には、国家的巡礼に焦点が当てられています(すなわち、神によって設立され、神に捧げられた国家共同体、すなわちイスラエルの国民または共同体として神に従うこと)。

第三の荒野-巡礼の時代(教会)は、ペンテコステの日から艱難期の始まりまでです。この時代の巡礼者は、ユダヤ人(元の枝)と異邦人(イスラエルに接ぎ木された)の両方を合わせて、キリストの単一の体となっています。 この時代には、一つの体としての巡礼に焦点があります(神の家族、すなわち普遍教会であるキリストの体の親密な一員として、神に従うこと)。

多くの面で違いはありますが、三つの時代にはいくつかの重要な以下のような共通点があります…

- 楽園後:どれも皆、エデンの園の後である。
- 楽園ではない:どの時代も、神による直接統治が確立されていない。
- 王国前:すべて第二再臨に先行しています。
- 共宇宙的:これらの時代はすべて、サタンによる世界の管理(コスモス)と同時に進行します。
- 共時的:2000 年という期間を共有しています。

これらの三つの荒野の時代は、王国の前の三つの異なる巡礼の状況下で信者を養う神の恵みを示しています。1)個人の巡礼者として、2)個別の巡礼者の国として、3)世界全体の巡礼者の家族として。 これらの巡礼のいずれにおいても、キリストの至福千年の支配が土台となります。なぜなら、三つの時代のすべての信者が荒野から出てきて報酬を受けるのは、キリストが再臨する至福千年においてだからです(マタイ 16 章 27 節 7、19:28、ルカ 14 章 14 節、黙示録 11 章 18 節; 22 章 12 節)。エデンから追放されて以来、キリスト教会のメンバーである異邦人、ユダヤ人、そしてその両方が、この世の砂漠を通って約束の地を目指して旅をしてきました。 主の再臨の時、私たちは、文字通りの意味でも、霊的な意味でも、乳と蜜の究極の地に入ることになります。 それまでは、この世界は、イスラエルの子どもたちが旅したシナイの砂漠のような荒野です。悪魔の世界は、まさに乾いた荒野であり、バカの谷(上記の詩篇 84 篇 6 節前半のように)です。バカという名称は、乾燥した環境(バルサムの木が生えている場所)を意味するだけでなく、苦しみと涙(ヘブル語の「泣く」という言葉とほとんど区別がつかない)をも意味します。しかし、主に心を留めることで、私たち巡礼者は、この荒涼とした荒野の中で、命の水の祝福を経験することができます(詩篇 84 篇 6 節後半)。

4. 人類の歴史の四つの時代

悪魔とその天使たちが反乱を起こす前、サタンは神の創造の中でユニークな地位を占めていました(本シリーズ第 3 部第 3 項参照)。 サタンは、神の神聖さを不敬なものから守るための守護天使であり、当初の九つの天使師団を示す記念の宝石を身につけて神の前にいました[10]。このような特別な方法で神に仕え、栄光を帰すために造られた者であるのに、悪魔は神に代わって宇宙の支配者になろうと決めました。その結果、サタンはケルビムとしての任務を、他の四人の(選ばれた)天使の生き物に奪われてしまいました。

新しく任命されたケルビム<ケルブの複数形>は、悪魔のかつての任務を引き継ぐだけでなく、新しい明けの明星として、ルシファーに代わる究極の超越的な存在であり、悪魔が破壊しようとする人々の救済者である方の人生と仕事を象徴するという重要な機能を持っています。 このように、各ケルブは、人類の歴史における救い主・王としてのキリストの役割の四つの主要な側面を表しており、これらの 4 つの側面は、同様に、その側面が目に見える形で明らかにされる歴史の明確な時代に対応しています。

- **異邦人の時代:** キリストが救い主として全人類に約束された時代。
- **ユダヤ人の時代:** キリストがメシアとして、特にイスラエルに約束された時代。

[10] ケルビムと天使の命令については、『悪魔の反乱』第 1 部 III.i 項、第 4 部 III.3.b.1-2 項参照。

– **教会時代：** キリストが苦難のしもべとして謙虚に（処女生まれの）肉体を持って人格を現される時代。
– **至福千年時代：** キリストが、王として栄光のうちに（復活した）肉においてご自身を現される時代。

第 1 部で見たように、サタンはルシファー（明けの明星）として、神の栄光を反映する唯一無二の存在でした。 この役割において、サタンは、神である主の天使、受肉前のイエス・キリストに対（つい）をなす被造物でした（第 4 部 III.3.b 参照）[11]。しかし、悪魔の反乱によって、人間の歴史が始まり、四者のケルビムの一団を任命することが象徴的に必要となりました。 なぜなら、イエス・キリストが自ら超越的な方法で悪魔に取って代わるので、神の栄光を反映するというケルビムの機能は、人間の歴史の勝利者である私たちの救い主に向けられることになったのです。 つまり、神の御座に仕える四つのケルブは、キリストのユニークなパーソンと働きの四つの重要な側面を表しているのです。 さらに、ケルビムの四つの顔のそれぞれが象徴するものは、人類史の四つの時代の中で明らかにされているキリストのパーソンと働きの主要な側面に対応しています [12]。

– **牡牛の顔**（異邦人）。キリストは救い主として全人類に約束されました。
– **獅子の顔**（イスラエル）。キリストがメシアとして特にイスラエルに約束されたもの。
– **人間の顔**（教会）。キリストがしもべとして謙虚に肉を持って現れたこと。
– **鷲の顔**（至福千年）。キリストが王として栄光のうちに肉体をもって現れる。

ケルブについては、本シリーズの第 1 部と第 4 部で説明しました（第 2 部 B「来たる艱難期」で再びこの問題を取り上げる機会があります）。 しかし、ここでは、ケルブについていくつかの点を明確にしておく必要があります。

a) **その数：** ケルブ（イザヤ書 6 章ではセラピムとも呼ばれています）は、上記の議論によれば、4つの数であり、ほとんどの場合、そのように記述されています。 しかし、唯一の例外は、恵の座に描かれているケルブです。 この例外は、恵の座と神殿の描写が基本的に二次元的な表現であることを考えると、十分に理解できます。 ケルビムは、神の戦車兼御座の脇に二人一組で立っているので（御座を運ぶとき）、

---

[11] 主の御使いとキリスト降臨の全体については、「聖書の基礎知識」の第 1 部「神学：神について」の II.C.3 項をご覧ください

[12] イスラエルが軍隊的、部族的な編成で、四つの師団に分かれていたことも事実です（民数記 2 章 1-31 節; 10 章 11-33 節）。この四つの師団は、「あわれみの座」（これは神の天の御座の象徴です）に覆われた契約の箱を納めた幕屋の周りに陣取りました。ですから、この点でも（このシリーズの第 1 部の幕屋の象徴の議論を参照）、モーセの律法の配列は天の現実の影なのです（参照：ヘブル 8 章 1-5 節）。

真正面からこの場面を見る人には、二人のケルビムしか完全には見えません。 以上の理由でこの場面ではこのように表されています（後述しますが、彼らの顔についても特別な意味があります）。

b) **翼：** ケルビムの翼は、イザヤ書やヨハネの黙示録では 6 枚とされています。 エゼキエルでは、ケルビムの翼の数が 4 つとなっていますが、これはケルビムが神の御座の戦車を運んでいるところを描写しているからです（イザヤとヨハネの黙示録ではそうではなく、御座が静止しているところを描写しています）。 エゼキエルが各ケルブのそばにあると描写した「車輪の中の車輪」（エゼキ 1 章 15-18 節、10 章 9-13 節）は、実際には、戦車の車輪に回転運動を提供する翼です（したがって、それぞれの場合、「車輪の中の車輪」のように見えます；エゼキエル 3 章 13 節を参照）。この点については、エゼキエルが耳にした 10 章 13 節に記録されている「翼の力を持つ車輪」の記述「つむじ風の車輪」（ヘブル語：ガルガル *galgal*: גלגל）が最も明らかにしています。このイメージ（つまり渦巻雲）は、円状に回転する一対の翼（ケルブの両側から 1 つずつ）の立体的な描写ですが、このケルブの翼の意味深い特徴は、車輪はまた、「多くの目で満ちて」いることです。高速で回転する車輪と一対の翼が連動することで、目が車輪の一部であるかのように見えるのです（エゼキ 1 章 18 節, 10 章 12 節と黙示録 4 章 6 節, 4 章 8 節を比較）。

c) **その象徴:** 上述したように、4 つのケルブの顔はすべてイエス・キリストを象徴しています。それぞれのケルブの顔は、その時代に最優先されるイエス・キリストの歴史的使命の側面を表しています。

- 雄牛の顔（異邦人の時代）は、苦難のしもべであるキリストを表しています。（キリストが私たちの罪を背負ったように：イザヤ 53 章 4 節参照）雄牛は荷を背負うだけでなく、旧約時代において最も重要視されているいけにえの動物であり、その血は、私たちに代わって約束されたキリストの働きの象徴として流されました（レビ記 1 章 5 節～）
- 獅子の顔（ユダヤの時代）は、約束されたメシアとしてのキリストの姿を表しています。獅子はユダ族の象徴であり（黙示録 5 章 5 節; 創世記 49 章 9-12 節参照）、旧約聖書全体でメシア的な意味合いを持っています（民数記 23 章 24 節; 24 章 9 節参照）。 彼が来たイスラエルの世代は、獅子（復讐する戦士としてのメシア）を受け入れる準備ができていましたが、雄牛（自己犠牲的なしもべとしてのメシア）につまずきました。
- 人間の顔（教会時代）は、受肉した、目に見える世界の救い主としてのキリストの姿です。 キリストは＜約束されていた＞人の子であり（マタイ 9 章 6 節）、

罪を除いてあらゆる点で真の人間、典型的な人間であり(ヘブル 2 章 14 節、4 章 15 節)、最後のアダムです(1 コリント 15 章 45 節)。教会は、すべての信者であるユダヤ人と異邦人で構成されており、この地上における主の体です。主が十字架上での御業が完了するまで栄光を受けられなかったように、＜教会は＞まだ栄光を受けていません(ヨハネ 17 章 1-5 節)。

- 鷲の顔(至福千年時代)は、キリストが復活して高められ、戦いに勝利した姿を表しています。十字架での勝利のために父から栄光を受け(エペソ 1 章 19 節後半-23 節)、復活と昇天の以降、再臨の日まで父なる神の右手に座しておられます(詩篇 110 篇)。その時(再臨)には、聖典に記されているすべてのメシアの預言を成就され(エペソ 3 章 10-12 節、コロサイ 1 章 20 節参照)、千年の間、栄光のうちに世界を支配されるのです。鷲には、近寄りがたい威厳と畏怖の意味合いがあります(申命記 28 章 49 節, エレミヤ 48 章 40 節、49 章 22 節、エゼキエル 17 章 3 節、17 章 7 節、ダニエル 7 章 4 節、ホセア 8 章 1 節、ハバクク 1 章 8 節、イザヤ 46 章 11 節参照)。鷲は、最初は十字架(それに伴う復活、昇天、父の右に座ること)で、そして最終的には再臨での、キリストの荘厳で畏敬の念を起こさせる二重の勝利を象徴するのに適しています(マタイ 24 章 28 節; ルカ 17 章 37 節; 黙示録 1 章 12-16 節の栄光のキリストの絵と比較してください)。

d) **その顔の数**: 人間の特徴の中で、顔は最も印象的で表現力のあるものの一つであり、上述のような象徴的な表現には最も効果的な手段です。ケルビムの体は人間の形をしていますが(エゼキエル 1 章 5 節)、ケルビムの四つの顔は独特で、先ほど述べた主の地上での働きの様々な側面を象徴しています。このように、ケルビムの顔は、自分の栄光ではなく、神の子の栄光を反映しています。ちょうど、理想的には、神のしもべである私たちが、神に命じられたとおりに歩むとき、世界がキリストの顔を見ることができるべきであるように。(第二コリント 3 章 18 節;マタイ 16 章 24 節;ヨハネ 13 章 15 節;第一コリント 11 章 1 節;第二コリント 2 章 15 節;ガラテヤ 4 章 19 節;エペソ 5 章 1 節;第一テサロニケ 1 章 6 節、第一ペテロ 2 章 21 節を参照)。

イザヤ書(イザヤ 6 章 1-7 節)では、ケルビムの 4 つの顔がすべて隠されています。これはケルビムが神の御座の上に浮かんでいるとき、(神の栄光を見ないため)一組の翼で顔を隠しているからです。エゼキエル書(エゼキエル 1 章 4-26 節;10 章 1-22 節;41 章 18-20 節)では、ケルブ(とその翼車)は戦車の御座の下に位置しているので、顔を隠す必要はありません。その結果、エゼキエルは 4 つの顔をすべて見ることができたのです。黙示録(黙示録 4 章 6-8 節)では、ケルブは御座を取り囲み、御座の一部となっています(つまり、御座に直接触れています)が、移動するための位置にはい

ません（つまり、回転して守護の位置になっています：下の図を参照してください）。ここでは、神の玉座とほぼ同じ高さにあります（エゼキエルのように完全に下にあるわけでも、イザヤのように上にあるわけでもありません）。そのため、ヨハネはケルブが外側を見る顔以外を覆っているのを見て、あたかも一つの顔を持っているかのように表現したのではないかと推測されます[13]。実際には、3 つの箇所のケルブは、前に人間、後ろに鷲、右に獅子、左に雄牛の 4 つの顔を持っています（エゼキエル 1 章 6-9 節と同様）。しかし、観察者の視点からは、一時ごとに一つの顔しか見ることができないのがほとんどなので、それぞれのケルブは一つの顔しか持っていないように見えるかもしれません（エゼキエル10章14節参照。ヘブル語では一語一語、「第一の顔は(単数形冠詞）」と書いてあります。しかし、エゼキエルは以前、ケルブに 4 つの顔があることを明確にしていました。エゼキエル 1 章 6-9 節）。

e) **その順序:** エゼキエルは 1 章 10 節で、最初にケルブの顔の描写を行いましたが、その順序は自然で合点のいくもので、まず前方を見る顔（人の顔）を挙げ、次に右側と左側（それぞれライオンと雄牛）に移り、最後に後方を見る顔（ワシ）で終わっています。一方、エゼキエル 10 章 14 節は、ケルブ一人の一般的な描写ではなく、神の御座の戦車を運ぶ四者一団についての記述です[14]。

> そのおのおのには四つの顔があった。第一の顔はケルブの顔、第二の顔は人の顔、第三はししの顔、第四はわしの顔であった。（エゼキエル書 10 章 14 節）

この二つ目の記述＜上記聖句　エゼキエル 10 章 14 節＞では、エゼキエルの記述は、戦車の周りを時計回りに（左前、右前、右後、左後）移動し、その都度、外に向かっている顔について言及しています。エゼキエルは、まず戦車の左前方にいるケルブを取り上げていますが、それはこの天使が彼の視界に最も近かったからでしょう。この時点で御座の戦車は神殿の南に位置していると描写されており（エゼキエル 10 章 3 節）、エゼキエル自身は神殿の入口付近（つまり御座の戦車の北側：エゼキエル 8 章 16 節）に位置していました。このケルブを「ケルブの顔」と表現したのは、ヘブル文化圏ではケルブ（cherub:　ㄱㅣㄹㄱㅋ）が一般的に牛のような顔をしていると理解されていたためと思われ、まさにこれがエゼキエルが、本物の天上のケルブは**四つの顔**を持ち、そのう

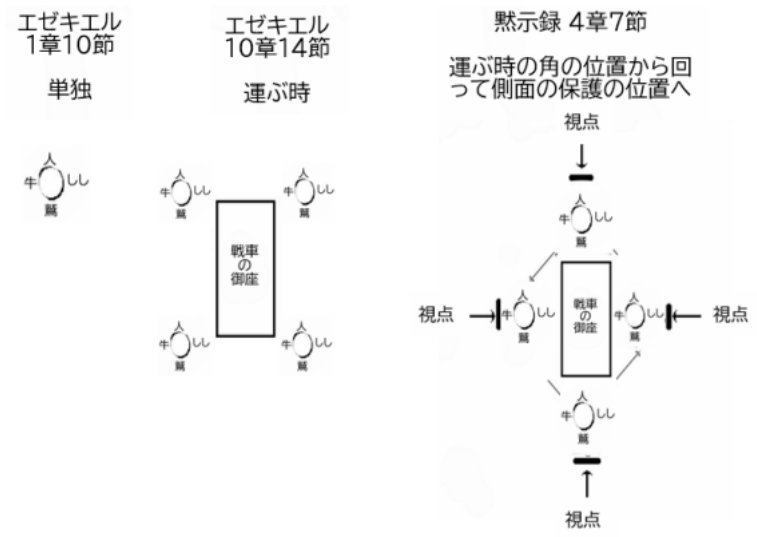
---

[13] エゼキエル 41 章 18-20 節に登場する神殿の壁に描かれた二つの顔を持つケルビムは、当時の芸術的慣習に従って、壁の表面が平らであったため、二次元的な表現が要求されたためと説明されています。従って、観察者は正面と右側面を見ることになります（背面と左側面は、理論的には背面から二次元的に見ることができます）。ソロモンの可動式洗盤台に描かれたケルブの獅子と雄牛の顔の一面的な表現とも比較してください：列王記上 7 章 29 節。

[14] この事実は、いくつかの英語版（NIV など）では明確にされていません。

ち牛に似ているのは一つだけであると明確にした理由です。

黙示録 4:7 で示されているケルビムの順序は、ライオン、雄牛、人間、鷲となっており、聖書の他の箇所(イザヤ 6:1-7、エゼキエル 1:4-26、10:1-22、41:18-20)で見られる順序と一致しています。 エゼキエルの記述では、ケルブは実際に飛翔しながら車座に接しています。イザヤの記述では、ケルブ(セラフと呼ばれる)は離脱して飛翔しています。そして、黙示録では、ケルブは王座に接していて(位置を変えたようですが:下図を参照してください)、飛翔していません(つまり、王座の「真ん中」にいます:ギリシャ語で En meso: ἐν μέσῳ τοῦ θρόνου)。



ヨハネは、黙示録 4 章 7 節でケルビムを右、左、前、後という順序で並べています。これは、エゼキエルが 1 章 10 節で、個々のケルビムの四つの顔を描写しているのと似ていますが、同一ではありません。エゼキエルが前と後ろの間に左と右を挟んでいるのに対して、ヨハネはこの順序を変えて、左と右、そして前と後ろと描写しています。このような順序の変更は、黙示録(文字通りのタイトルである「イエス・キリストのお披露目」)において、聖霊の導きのもとヨハネがケルビムの顔を列挙することで、救い主のご性質と働きを象徴的に表現し、神の御計画全体との特定の関係性を反映することが適切であると考えられたためです。したがって、黙示録 4 章 7 節の順序(獅子-牛-人-鷲)には、次のような意味があります:

- 歴史的なイスラエルの時代の象徴が最初に置かれています。
- 歴史的な来るべきイスラエルの王国の象徴が最後に置かれています。
- この二つの象徴は、先立つ異邦人の時代の二つの象徴を包み込む形になっています。

- 異邦人の時代の象徴が最初に置かれます。
- (異邦人がイスラエルに接ぎ木される)教会時代の象徴は、その隣に置かれています。
- このように、イスラエルと御国イスラエルは、異邦人と奥義である異邦人を囲んでいます(エペソ 3 章 6 節)。

このようにイスラエルが異邦人を包括し、異邦人がイスラエルを満たすという象徴は、強力かつ適切なものです。なぜなら、この四つの時代とそれに対応するケルブの顔は、あらゆる点ですべてを満たし、完成させる方であるキリストを象徴しているからです(エペソ 1 章 23 節;1 章 9-10 節参照)。

5. 人間の歴史の 5 つのディスペンセーションの区分 「ディスペンセーション」という言葉は、神との関係(すなわち、救いと霊的成長)を追求するための神のリソースの配分に関して、歴史が五つの区分に分けられることを説明する言葉であると同時に、またよく間違って解される表現でもあります。というのも、「ディスペンセーション(dispensation)」は、一方では聖書の語彙を忠実に反映した完全に良い英語ですが(ギリシャ語のオイコノミア oikonomia: οἰκονομία の翻訳)、ローマ・カトリックのこの言葉の使い方や、伝統的で福音的な「ディスペンセーション主義」が持つ意味合いは、誤解を招くことがあるからです[15]。ギリシャ語のオイコノミアは、「経済」や「管理」とも訳されますが(ルカ 16 章 2-4 節、第一コリント 9 章 17 節、コロサイ 1 章 25 節、第一テモテ 1 章 4 節参照)、これらは、特有な意味で使われているのであって、聖書のオイコノミアが本当に意味するところを不明瞭にしています。神のディスペンセーションとは、神を求めるために必要となるもの<リソース/資源>が、それを望むすべての人に提供されるようにと、神がそれぞれの時代ごとに異なる恵みの手段を用いられた、というものです。(エペソ 3 章 2 節)[16]。

言うまでもなく、私たちの生きる目的である--神を知り、神との関係を持ちたいと願う人に、神はいつも御手を差し伸べておられます。(申命記 4 章 29 節、箴言 8 章 17 節、イザヤ 45 章 22 節、55 章 6 節、エレミヤ 29 章 13 節、マタイ 7 章 7 節、ルカ 11 章 9 節)。しかし、その方法と手段は、そのディスペンセーション区分<それぞれの区切ら

---

[15] C.I.スコフィールド著『真理のみことばを正しく伝える』pp.19-23 参照。
[16] ヘブル 3 章 1-6 節にある、イスラエルの「家」(オイコス)の執事としてのモーセと、教会の「家」(オイコス)の建設者としてのキリストの記述は、それぞれのディスペンセーション(オイコノミア)を指しています: モーセは、神の御言葉の真理(律法の下での救いと成長に必要な関連手段も)を伝えることを通して、神の家イスラエルに仕えました。第一ペテロ 2 章 4 節では、教会(すなわち、信者)は神の「家」、すなわち、神の霊的な備え(特に)の対象である家族、家庭として描写されています。

れた時代＞に従って異なっています。神を知るためには、神についての情報が必要であり、真理が必要であり、真理は信じて実践されなければなりません。ある種の真理（例えば、神の存在、善悪の区別など）は全人類にとって明白ですが[17]、神に関するより具体的な情報、神がイエス・キリストにおいて提供されている救い、神との関係を築くために不可欠な知識は、神がその普及のために提供した恵みの手段なしでは、人類にとって入手できない真理の領域です。私たちの全知全能の神は、関心を持つすべての人間に、神の真理のすべてを何にも依存せずに啓示することができるのは確かですが、人類史の大半は、神の家族に霊的な食物を提供する責任を負うさまざまな代理人、執事、「分配者」を通してなされてきました。聖書の正典ができるまでは、神の言葉の伝達は、神の選ばれた「預言者」（ヘブル語：*nabi'*－ נביא；ギリシャ語：*prophetes* –προφήτης）と呼ばれる、神の真理を伝える責任を持つ特定の個人にのみ与えられるという、直接的な過程でした。（約 1500 年を要した）正典の形成期には、預言者の口から語られる言葉と書かれた御言葉によって真理を伝える二重の手段がありました。正典が完成し、使徒の世代が過ぎると、神に関する特別な啓示は神の御言葉だけとなり、教会と呼ばれる区分の期間における真理の伝授は、それ以前の区分とはそれ相応に異なることになります（現在では聖霊の働きと賜物が重要）。終末の時代と、それに続くキリストの千年統治が始まると、聖書預言の完全な成就による啓発によって、神の知識が全世界に満ちるようになります（下記参照）。

神がご自身に関する真実（救いと霊的成長に必要なもの）を恵み深く提供する「ディスペンセーション」（神の摂理による時代区分）は 5 つあります。それらは：

- 異邦人の家父長制：アダムからアブラハムまで。
- ユダヤ人の家父長制：アブラハムからモーセまで。
- モーセの律法：モーセからキリストまで
- 教会：キリストの初降臨から再降臨まで。
- 至福千年：キリストの再臨から歴史の終わりまで。

a）異邦人の家父長制：異邦人の時代が個人に焦点を当てていたのと同様に、アブラハムの召命に先立つ歴史の期間に、神は主に個人を通して働かれました。エノク(創世記 5 章 21-24 節、ヘブル 11 章 5 節)、ノア(創世記 6 章 9 節、6 章 13-13 節、ヘブル 11 章 7 節)、ヨブ(ヨブ 1 章 8 節)、サレムの王(創世記 14 章 18-20 節)、そして割礼を受けるまでのアブラム(創世記 12 章 1-3 節；15 章 6 節)の例に倣って、神は個人的

[17] 「自然啓示」と「特別啓示」の区別については、ペテロの手紙シリーズ#11 参照。善悪の区別が人間に備わっていることについては、『聖書の基礎知識：罪論(Hamartiology)』の第 3 部 B、I.3 節、「良心」を参照してください。

な啓示によってご自身についての偉大な知識を与える人たち、管理人を用意されました。 これらの人々は、神の真理の特別な啓示によって神に祝福された預言者であり、神はご自身に関するその真理を管理する手段、すなわち「分配」する手段として用いたのです。

b) ユダヤの家父長制： アブラハムの召命からモーセの律法の付与に至るまでの神の恵みの手段は、神の真理を伝えるという意味では、神との関係において例外的な、個々の信者にもたらされるという点で類似しています。 ユダヤ人の部門でも、異邦人の部門でも、主の目にかなう著名な家長が神の啓示の焦点となり、多くの場合、神との直接の交信（幻や夢とその解釈も含む）を通して、神の啓示を受けます。 異邦人とユダヤ人のディスペンセーションの主な違いは、それぞれの称号に表れています。アブラハム以前には家族の区別はありませんでしたが、アブラハム以後、神はアブラハムの子孫を特に卓越して用い、ご自身のために証しし、神の真理を伝えるようになりました。 例えば、アブラハム、イサク、ヤコブは皆、預言者として働きました（創世記 20:7 参照）。 三人の家長は、神から直接特別な啓示を受けたと聖書に記録されています（例えば、それぞれ創世記 15 章 12-16 節、26 章 2-5 節、28 章 13-15 節参照）。 このように、歴史の前半と後半では、真理の分配の手順は同じですが、後半では、主にメシヤの系統を通して啓示が行われます。

c) モーゼの律法： モーセの律法の制定により、神の真理は人類史上初めて文書化されました。預言者は神から直接啓示を受け続けますが、モーセを始めとして、神の言葉を記録するように指示されることもありました。このように、聖句を書き記すという行為は預言的なものであり、預言者（例：モーセ：申命記 18 章 15 節と民数記 12 章 6-8 節を比較）だけが行い、常に神の求めに応じて（例えば、出エジプト記 34 章 27-28 節）、神の直接指導を受けて（第二ペテロ 1 章 20-21 節参照）[18]、律法が与えられたことで、預言とは別に、神に関する真理の文書が存在するようになりました（この機能は祭司とレビ人が主に担っていました：申命記 33 章 8-10 節; 歴代志下 17 章 7-9 節; 35 章 3 節; ネヘミヤ 8 章 9 節; エゼキエル 44 章 23節）。さらに言えば、律法が規定する国民のライフスタイル全体が、真理を教えるために構成されていたのです。律法の行動要件は、いわば「教育係」として機能し、私たちの罪深い本性を暴き、救いの道へと導くように設計されていました（ガラテヤ 3 章 24-25 節）。清いものと汚れたものを分ける律法は、神の神聖さを教え、それを模倣する必要性を説きました。特に犠牲は、キリストと、キリストが十字架上で私たちのために捧げた犠牲について示唆しており（第一コリント 5 章 7 節参照）、祭儀は、神の時代に対する究極の計画を教えています（下記参照）。

[18] 書き記された御言葉は、ペテロ第二の手紙 1:20 で預言書と呼ばれていることに注意してください(口伝えの予言とは異なります)。

また、幕屋とその備品は象徴的な意味を持ち、神についての多くの真理を伝えていました（ヘブル 9 章 23-28 節参照）[19]。表面的には些細に見える事柄も、霊的には深い意味を持っています（第一コリント 9 章 8-10 節参照）。つまり、律法が与えられたことで、神に関する神の知識の分配は、もはや例外的な個人に限られたものではなく、神の祭司国家イスラエル全体において、より広く、より即座に与ることができるようになったのです。

d) 教会：イエス・キリストの死、復活、昇天、そして聖霊の出現は、救いを学び、霊的成長を追求するための神の恵みの手段に革命をもたらしました。異邦人へ恵みが爆発的にもたらされ、世界的な神の家族の形成に伴い、真理の供与＜ディスペンセーション＞にも大きな変化が求められました（ヘブル 7 章 12 節参照）。キリストに結ばれた一つの家族として、霊的成長の働きは、非常に集団的な努力となりました。この変化を可能にした二つの重要な要因は、1）聖霊が与えられたこと、2）聖書の正典の完成です。教会の初期を除けば、救いと霊的成長のための知識の供与＜ディスペンセーション＞は、直接的または間接的に、ほとんどこの二本の柱にかかっています。（聖書の著者はすべて、キリストを見た使徒か、その権威の下に書かれていたことを覚えておくとよいでしょう。）なぜなら、すべての信者は聖霊の賜物を持ち（ローマ 8 章 9 節）、（神の創造の素晴らしさを熟考することによって神の存在を認識する「一般啓示」は例外として）救いと霊的成長に必要なすべての真理は、聖書に含まれ、聖書に限定されているからです。もちろん、現在の時代は、「人はみな自分だけでやっていける」とか、すべての信者が成長のために必要な霊的食物を「自分だけで給仕する」ことが許可され、それが可能であると言っているわけではありません。むしろ、私たち教会は、この点で世界がまだ見たことのないほど相互につながっている信者の集団です。私たちは一つの体であり、その体の一部として機能し、その一つ一つが不可欠であり、その一つ一つが他のすべてのものを大いに必要としています（第一コリント 12 章 12-30 節）[20]。聖霊がすべての新しい信者に霊的な賜物を授け（第一コリント 12 章 4-11 節）、これらの賜物に力を与え、すべての信者に宿ることによって、教会時代の私たちは、個人の霊的進歩と仲間の成長を助けるためのかつてないほど大きな機会が与えられています。サタンの世界の中で霊的に成長することは容易なことではないので、効果的で集団的な成長には、キリストの体の相互支援が不可欠です。さらに、神の真理の伝達は、もはや預言によって達成されるものではありません（この賜物は、聖書の正典が完成した後、使徒の世代が過ぎると機能しなくなったようです [21]）。また、象徴的な儀式を厳格に守

---

[19] 本シリーズ第 1 部 II.5.b 項参照。
[20] ペテロ・シリーズの#12 と#13 をご覧ください。
[21] 預言は、夢、幻、「神との対話」とともに、（今日を含む）教会時代の大部分において、神が真理を伝えるために選ばれた主要な手段ではありません。もちろん、神は御心のままになさることができますが、この問題についての誤った仮定は、御言葉の重要性、御言葉

ることでもありません(律法は、キリストの受肉と十字架上の働きの現実によって廃止されました:ローマ 6 章 14 節、10 章 4 節、コロサイ 2 章 17 節)。律法が特別で教育的なものであったとしても、私たちは今、それに従わなければならないという義務感なしに、責任の伴う霊的成長を受け入れていく自由があります(ガラテヤ 5 章 1 節, 5 章 13 節, 第一ペテロ 2 章 16 節)。私たちクリスチャンが神と神の御計画における私たちの役割について知る必要があることはすべて、聖書という一つのユニークな書物に含まれているからです(第二テモテ 3 章 15-17 節)。神は聖霊によって霊感された人を使って、この書物を書かせ(第二ペテロ 1 章 20-22 節)、必要な霊的賜物を持って備えられた人達を使って教え、この書物に含まれる真理を「提供」しています(1 第一コリント 12 章 27-31 節; エペソ 4 章 11-16 節; 第一テサロニケ 5 章 12-13 節; 第一テモテ 5 章 17 節; エペソ 1 章 9-10 節参照):[22]

> …神はあらゆる知恵と思慮をもって私たちの上にあふれさせ、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい(直訳では「供与のため」)、時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。(新改訳Ⅳエペソ 1 章:8b-10 節)
>
> すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられたのは、キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるためであり、また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現がどのようなものなのかを、すべての人に明らかにするためです。これは、今、天上にある支配と権威に、教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされるためであり、(新改訳Ⅳエペソ 3 章 8-10 節)
>
> 私(パウロ)は神から委ねられた務めにしたがって、教会に仕える者となりました。あなたがたに神のことば[の真理]を、すなわち、世々の昔から多くの世代にわたって隠されてきて、今は神の聖徒たちに明らかにされた奥義を、余すところなく伝える<ディスペンセーション>ためです。この奥義が異邦人の間でどれほど栄光に富んだものであるか、神は聖徒たちに知

を理解するための御霊の働き、そして御言葉を宣べ伝える者の権威を（そのようなことに重きを置く人々の目には）低下させる効果があります（事実上、この歴史の区分に関するディスペンセーション・システム全体が損なわれてしまいます）。

[22] 恵みの認識論（聖霊の助けによって神の真理を学ぶ方法）については、『聖書の基礎知識』のパート 5 で取り上げています： 聖霊論

らせたいと思われました。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。(新改訳Ⅳコロサイ 1 章 25-27 節)

果てしない作り話と系図に心を寄せたりしないように命じなさい。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、神に委ねられた信仰の務め＜である[真理の]＞を実現＜**伝え**(ディスペンセーション)＞させることにはなりません。(新改訳Ⅳ第一テモテ 1 章 4 節)

e) 千年王国: キリストの再臨によって、(その時主のものとなっている人達と共に)私たちの主は地上を直接支配されるようになります(第一コリント 6 章 3 節; 第一ペテロ 2 章 5 節, 2 章 9 節; 黙示録 1 章 6 節, 2 章 26-28 節, 3 章 21 節, 5 章 10 節, 20 章 4 節, 20 章 6 節)。インマニエル(「神、われらと共にいます」という意)の支配が始まると、アダムの堕落以来初めて、神の子という神聖なお方において、地上における神の個人的かつ直接的な支配が始まります。その時の神聖な真理の分配は、世がいまだかつて見たこともないようなものとなることでしょう。千年王国の成就に伴う他の諸々の不思議に加え、神とその真理に関する知識が普遍的かつ豊富に得られるようになるからです:

しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教えて、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大に至るまで皆、わたしを知るようになるからであると主は言われる。わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」。(エレミヤ 31 章 33-34 節)

彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。(イザヤ 11 章 9 節)

しかし、このような完璧な環境にもかかわらず、また、前例のない啓示による真理がすべての人に満ち溢れ、人類が無視したり知らなかったりすることが不可能な状態になるにもかかわらず、多くの人は真理に抵抗し、代わりに自分の罪深い性質に従うことを選び、機会があるとすぐに(サタンが一時的に解放されると:黙示録 20 章 7-10 節)完璧な王に対して反逆することさえ起こるようになるのです。

6. 人類史の六つの時代:

この六つの時代は、世俗的な観点から歴史を分割し、人類史の重要な部門を年代順に並べ、霊的な意義に基づいて分類しようとするものです(これは、前項の五つの分類と次項の分類の基礎となるものです)。教会の歴史を通じて、多くの訓詁学者＜古典の解釈者＞が主張してきたように、もし、「6」が人間の数であるとすれば、神の視点ではなく人間の視点から見た歴史の六つの期間は、より納得のいくものとなります[23]。一つには、六つの期間は、聖書の中で最も明確に象徴的な意味を持つ数、すなわち「7」(次に続くⅡ・7 項を参照)に確かに一つ足りない数です。しかし、私たちの目的は、歴史が以下の六つの時代に分けられ、神の傾向や特徴ではなく、それぞれの時代に現れる悪魔の攻撃の異なる強調点に対して、それが重要であることに注目すれば十分です。つまり、この六つの時代には、悪魔の視点が大きく反映されています。具体的には、堕落から歴史の終わりまで、悪魔が人類を攻撃する主な対象が挙げられています:

a) 洪水以前の時代: 堕落から洪水まで。悪魔の主な標的: 真の人類。

b) 洪水後の異邦人時代: 洪水からアブラハムまで。悪魔の主な標的: 自由と法。

c) ユダヤ人時代: アブラハムからキリストまで。悪魔の主な標的:イスラエルの民と国家。

d) 教会時代: キリストから艱難時代の始まりまで。悪魔の主な標的:神のみことばの真理。

e) 艱難時代: キリストの再臨に先立つ七年間。悪魔の主な標的:上記のすべて(人類、自由と法、イスラエル、真理)、特に信者を地上から根絶することに重点を置き、悪魔は残された短い時間の中で利用できるあらゆる手段を用いる。

f) 千年王国時代: キリストの再臨後の千年間。悪魔の第一目標:キリストの支配(期間終了時にサタンが解放された後に攻撃される)。

---

[23] 例えば、人間は 6 日目に創造され、反キリスト(自らを神と称する男)の数字は 666 である(黙示録 13 章 18 節)。J.J. Davis, Biblical Numerology (Grand Rapids 1968) 122-123 を参照。

このように、サタンの対抗戦略（神の御計画に対する）が、上記の六つの期間の基礎を形成しています。この戦略（および人類史におけるその実行）については、以下の第 III の主題であるため、詳細な議論はそこで取り扱うことになります。しかし、ここで注意しなければならないのは、人間から見れば、歴史は暗く不愉快な進行であり、正義と真に価値あるものすべてに対する悪魔の連続攻撃によって特徴づけられるということです。神による歴史の支配によってのみ、私たちは敵対者から解放され、この悪の世界において祝福を受け取るのです。

7. 人類史の七日間

神は天と地を居住可能な状態に回復させたとき、文字どおりの六日間でそれを行い、七日目を休息日として、神に信頼するすべての人に与えられる平和と休息の原理を記念するために残されました。この七日間の地球再創造によって、神が悪を裁き、宇宙を回復し、サタンと入れ替わるプロセスが開始されたのです。＜「サタンの反乱」シリーズの＞第一部で見たように、サタンの反逆に対して神が天と地を裁いた後、神は地球を回復し、サタンとその従者をアダムとその子孫に置き換えるための舞台を整えたのです。悪魔はアダムとエバを誘惑してこの計画を頓挫させようとしましたが、人類の堕落は、イエス・キリストの受肉と犠牲を軸とし、歴史の終わりに悪魔とその従者たちを究極的に置き換えるという、神の人類史における壮大な計画を動き出させたにすぎませんでした。

この最初の七日間は、裁き、回復、置き換えの第一段階を示すだけでなく、のちに起こる人類史の全過程を象徴しています。再創造の七日間は、人類史の七千年に相当し、人類がキリストの賜物によって救われ、万物が裁かれ、回復され、置き換えられることになります。世界の基礎以前に神によって定められた明確な期間であったからです。神の恵みの観点からも、サタンの攻撃方法の観点からも、時代によって異なる条件が存在することは前述したとおりです。悪魔とその従者に対する神の最初の裁きによって破壊された天と地の修復が、文字どおりの七日間で段階的に置き換えられていったように、七千年の人類の歴史の中で、神はサタンと堕天使の置き換えを段階的に行い、その過程で、信者が召し出された状況が大きく異なっても、神の多様な恵みを示しています：

第 1 日目と第 2 日目：異邦人：（紀元前 4065 年～2065 年頃）。

a. 洪水前文明：

時間枠：アダムの堕落からノアの頃まで。
信者へのチャレンジ：完璧な環境から現世の苦難に移行する中で、神への信仰を維持・発展させること。

b. 民族の分裂：

時間枠：ノアの時代からアブラハムまで。
信者へのチャレンジ：前例のないサタンの攻撃（創世記 6 章の遺伝子の希釈、大洪水後のサタンの統一世界政府樹立の試み）に直面しても、神への信仰を維持し発展させる。

3 日目と 4 日目：イスラエル：（紀元前 2065～2 年頃）［バビロン捕囚の 70 年間は除く、艱難時代の 7 年間はまだ未来］。

c. イスラエルという国家：

時間枠：アブラハムからダビデの頃まで。
信徒へのチャレンジ：異教の世界の中で、神様の特異な証人として（そして悪魔の主要な標的として）神様への信仰を維持し、発展させること。

d. イスラエルの王国

時間枠：ダビデの時代からキリストまで。
信徒へのチャレンジ：悪魔を崇拝する国々からなる世界の中で、悪魔と対立する中心的な存在である神の唯一の国イスラエルのメンバー（または仲間）として、神への信仰を維持し発展させること。

5 日目、6 日目：教会：（紀元 33 年頃～2033 年頃）

e. 中央集権的なキリスト教：

時間枠：キリストから教会の分裂の頃まで。
信徒へのチャレンジ：一枚岩で官僚的なニセ・キリスト教が、真理への反発を強めている中でも、神への信仰を維持・発展させること。

f. 分散型キリスト教:

時間枠: 教会の分裂前後からキリストの再臨まで。
信者へのチャレンジ: 真理に対するあらゆる方面(宗教、社会、経済、政治)からの攻撃が強まる中で、神への信仰を維持し、発展させること、そして、人類史上最も激しい圧力と反発の期間である艱難時代を頂点とする。

7 日目:神の国(安息日): (西暦 2033 年頃〜3033 年頃)

g. 千年王国:

時間枠: キリストの再臨からゴグマゴグの反乱まで。
信徒への挑戦: 悪魔の世界からキリストの完全な人類支配(罪深い人間が究極の繁栄の試練に直面する)へと移行する間、神への信仰を維持し発展させる。

8.「七日間」解釈の証拠:

a. 聖書の直接の証言:人類の歴史を七千年単位で解釈することは、このシリーズで説明した、悪を裁き、義を回復し、悪を行う者を忠実な信者に置き換えるという、非常に具体的な目的のために、歴史全体が神によって設計されているという、ある確実な論理があります:

> 信仰によって、わたしたちは、この世界<(時代)-原語は「アイオン」>が神の言葉で造られた…ことを、悟るのである。(ヘブル 11 章 3 節前半)

聖書には、私たちが人類史と呼んでいる時間の一部に対する神の具体的な構築計画が、実に七つの千年紀の連続であることを示す明確な示唆があるのです。例えば、聖書はイエスが内輪の弟子たちを連れて変貌の山に登ったことがわざわざ「六日後」であったことを語っており(マタイ 17 章1節; マルコ 9 章 2 節; 出エジプト 24 章 16-18 節参照)、理由なくこのような情報は提供されてはいないとの推測は妥当でしょう。福音書の中でほとんど唯一とも言える、マタイとマルコに記されている、このような日数に関する情報の理由があるとしたら、それが何か特別な目的があって述べられていると捉えることは妥当です。まさに**七日目**に主が「変貌され」、(二人の先駆者モーセとエリヤが現れて)、それが主の栄光ある再臨を予告するためであったとすれば、つまり七日目が再臨と象徴的に結びついているのであれば、それに先立つ「六日間」という不可解

な表現が、再臨と千年王国に先立つ人類史の六千年を表している可能性があることを考慮しないということはないでしょう。

つまり、人類史の最後の期間である千年王国は、聖書で具体的に名称がつけられている人類史の唯一の期間であり、文字通りの千年の期間として最も明確に記述されています（黙示録 20 章 1-7 節）。聖書の他の箇所では、キリストの凱旋とそれに伴う敵への裁きによって始まるキリストの支配の時代の千年王国は、「主の**日**」と呼ばれています（イザヤ 2 章 11-21 節; 10 章 11-34 節; ヨエル 2 章 28-32 節; アモス 5 章 18-20 節; オバデア 1 章 15 節; ゼパニヤ 1 章 14 節; ゼカリヤ 14 章 1-7 節; マルコ 4 章 5 節; 第一テサロニケ 5 章 2-4 節; 第二テサロニケ 2 章 2 節; 第二ペテロ 3 章 10 節; 黙示録 6 章 17 節, 16 章 14 節）、「主の**年**」（イザヤ 61 章 2 節, 63 章 4 節; イザヤ 49 章 8 節; ルカ 4 章 19 節; 第二コリント 6 章 1-2 節 参照）とも呼ばれています。したがって、千年王国について、聖書は、文字どおり具体的な 1000 年の期間を「一日」と呼んでいます。人間から見れば、一日と千年の違いは非常に大きいのですが、時間枠の外に存在し、時間の支配者であられる神にとっては、この二つの有限の年代はほとんど同じなのです：

> あなたの目の前には千年も過ぎ去ればきのうのごとく、夜の間のひと時のようです。（詩篇 90 篇 4 節）

> 愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。（第二ペテロ 3 章 8 節）

> 主は、ふつかの後（すなわち、教会時代の後）、わたしたち（イスラエル）を生かし、三日目（すなわち、千年王国）にわたしたちを立たせられる。わたしたちはみ前で（すなわち、三日目に復活してこの預言を体現するメシア＜と共に＞）生きる。（ホセア 6 章 2 節）

短い時間（数時間、数日、数週間）を使って、はるかに長い時系列期間を表現することで、聖書は時間に対する神の完全な主権を反映しています。時間の発明者であり主人であられる神の重要性に比例して、時間の長さの重要性を低くするという聖書のこの傾向は、聖書の中で一般的であり、しばしばこのような方法で、はるかに長い期間を表すために比較的短い時間の単位を使用することがあります。例えば、イザヤ書 63 章 4 節の「あがないの年」とイザヤ書 34 章 8 節と 63 章 4 節の「報復の日」は千年王国を、イザヤ書 49 章 8 節の「救いの日」は千年王国に加えて教会の二千年を指しています（2 コリント 6 章 1-2 節参照）。ダニエル書 9 章の「七十週」の預言では、「週」の

各日が一年の期間です(ダニエル 9 章 25-27 節節)。同様に、黙示録 12 章 14 節の「一年、二年、また、半年の間」とは、大患難時代の三年半を指しています(ダニエル 4 章 16 節の七つの「時」は 7 年です)。これらの箇所はすべて神の選民に対して、時間は私たちの人生において一見支配的な役割を果たしていますが、神にとっては何でもなく、神の意志を達成するためのわずかな障害にもならない、ということを明確にするものです。時間は、私たちが神のために選択できるようにと、私たちの人生を秩序づけるために神が発明した道具に過ぎないのです(時間は一つの選択に過ぎません: エペソ 5 章 16 節; コロサイ 4 章 5 節)。ですから、人類史の総決算である七千年は、地上の私たちには長いスパンに見えるかもしれませんが、神が私たち忠実な信者のために備えられた永遠から見れば、それは言い表せないほど微細な時間なのです。

後でも触れますが、聖書にある年表を見ると、キリストからアブラハムまで約 2000 年、アブラハムからアダムまでさらに約 2000 年＜本書で「異邦人の時代」と呼んでいます＞あります。異邦人時代とユダヤ人時代がともに約 2000 年であり、神の人類史の計画における最後の「日」である千年王国が 1000 年であることを考えると、教会時代をそれに匹敵する 2000 年とすることは、解釈学的に大きな飛躍を必要としません。そうすると、各千年期が神のシステムにおける「一日」として計算され、合計 7000 年となります。

また、神が考案された週七日というのも無視できない関連があります(創世記 1 章 3 節～.21 節～参照)[24]。特に、安息日である七日目と、約束された平和と豊かさを持つ人類史の 7 日目にあたる千年王国が、同じように七つのうちの最後の「日」として訪れるという非常に近い類似性があります。(イザヤ 9 章 6-7 節参照。本シリーズ第 1 部、Ⅱ. 6. f 項参照)。[25]

したがって、一週のたとえに基づくと、千年王国は、六つの各千年紀を「日」と仮定することができるでしょう。この裏付けは、神による人類歴史においての回復と置き換えの過程の期間と、神の最初の七日間の終わりが休息の日で終わることを考慮すると、より説得力があります(マタイ 17 章 1 節における再臨と「第七日目」である千年王国の象徴する変貌の前の「6 日間」も比較して下さい)。

b. 再創造の七日間: 週七日が人類の歴史に関する神の全体的な設計の反映であることは、その歴史の幕開けに起こった、来たる七つの時代を予見させる最初の再創造の週から最も顕著に見ることができます。(このシリーズの第二部で見たとおり)この七日間の間に、神は地球を全面的に修復されました。この物質世界の修復は、人類史

---

[24] 現代の西洋の「週」は、聖書の「週」から派生したものであり、ユダヤ教やキリスト教の影響で注目される以前は西洋では知られていませんでした。
[25] 聖書の他の箇所では、週を年数として数えています(ダニエル 9 章 24-27 節)。

の七千年の間にサタンとその従者たちを置き換えることになる神の御計画と非常によく似ています:

第 1 日と第 2 日: (すべての過程の始まりを示す光の出現は重要な例外ですが)創世記の再創造の最初の二日間は、明らかに対になっており、この二日間だけでほとんど分離のわざに焦点を当てており、闇から光が分かたれました。この最初の二日間は、光と空気の供給を通じて、物理的な生命のための不可欠な基盤を提供するものです。この物理的な準備は、異邦人の時代の最初の二つの千年紀期間が提供する霊的本質的な土台に類似しています:

第 1 日目 – 異邦人時代の第一千年紀: 肉体的な生命に最も必要な光は、再創造の 1 日目に闇の世界に初めて現れたように、霊的な生命に最も必要な神の真実は、キリストの最初の約束に始まる異邦人時代の最初の千年紀において悪魔の闇の世界に初めて現れました(創世記 3 章 15 節)。そして、この真理の遺産は、アダム、そしてセツの子孫からノアとその家族へと受け継がれていくのです。

第 2 日目 – 異邦人時代の第二千年紀: 肉体的な生命を維持するために必要な空気が再創造の二日目に提供されるように、異邦人時代の第二千年紀では、神は、肉体の生命にとっての空気と同様に、霊的生命にとって絶対不可欠である**自由**という新しい空気を人類に保証されました:

1) 天使の干渉の禁止(創世記 6 章 1-7 節)。

2) 法律による犯罪の抑制(創世記 8 章 21 節-9 章 17 節)。

3)(バベルの塔に対する具体的な対応として)ナショナリズムによって世界一国独裁制に対する抑制:(創世記 11 章 1-9 節)。

(1)創世記 6 章の天使の暴挙を終わらせ、(2)法の支配を確立し、(3)その結果、国々が分裂するための神の裁きの道具は、大洪水でしたが、それによって地球は一時的に乾いた地のある以前の状態に戻りました(第一ペテロ 3 章 18-22節; 第二ペテロ 3 章 5-6 節を参照)。したがって、大洪水のおかげで、(天使の干渉の制限、法の確立、ナショナリズムの発展によって)真理の遺産は保護され、自由の環境の中でより安全な足場を見つけることができるようになったのです。

分離: 創世記の最初の二日間が、光と闇、上の水と下の水の分離を通して、肉体の成長に不可欠な環境の形成に焦点を当てているように、千年期の最初の一組の＜つまり二つの＞千年紀（異邦人の時代）＜すなわち二千年間＞は、神の真実（悪魔の嘘から分離して保護）と人間の選択の自由（悪魔の干渉、殺人、不寛容な国際主義によって人間の自由意志を破壊するという悪魔の最大の企てからの分離による保護）の提供を通して精神成長のために不可欠な基盤形成に焦点を当てています。

b. 再創造の七日間:

第 3 日と第 4 日:

創世記の二つ目の再創造の二日間は、分離と充填（満たすこと）の両方のわざが明らかに対になっているのがわかります：つまり、乾いた大地が水から分離され、大地が植物で満たされ（3 日目）、太陽、月、星が天を満たし、光と闇が分離された（4 日目）のです。3 日目は「分離」が「充満」に先行し、4 日目は「充満」が「分離」に先行し、「分離」に継いで「充満」が起こっていることがわかります。第二の二日間＜三日目と四日目＞の組は、乾いた土地と特定な時間を区切ることによって、物理的な生命の維持にとってより必須となる基盤を提供しています。この第二の二日間＜三日目と四日目＞は、植生と天体の創造を通して、空っぽの世界を再充填するための出来事が二回起こります。このように、一方では物理的な備えがなされ、他方では空虚な世界を充填するということは、それぞれ、一方では必要とされる霊的基盤のさらなる構築、他方では、二つ目の千年紀の組＜すなわち2000年間＞であるユダヤの時代にもたらされる信者達の増加に類似しています。

第 3 日目 – ユダヤ時代の第一千年紀 ：再創造の 3 日目に乾いた土地を分けることが人間の生活に必要だったように、＜再創造から始まって＞第三千年紀に聖なる**民**を神のもとに分けることは、真理と霊的成長が花開く環境を確立するために不可欠でした。そして、創世記の 3 日目に空っぽの世界を再び満たすための最初の一歩として植生が創造されたことが、アブラハムの種を呼び出すことによって悪魔とその従者を神の御心に適った民に置き換える過程における、最初の実質的かつ継続して加えられていく信者の集団をもたらすものであり、「多くの国民の父」であるアブラハムの信仰が、後に信じるすべての人々の救いの型をもたらしました（ローマ 4 章 17 節、ガラテヤ 3 章 7-9 節）。

第 4 日目 – ユダヤの時代の第二千年紀 ：創世記の第 4 日目に光と闇が明確で規則的な区分に分離して、（人間の生活に必要な）時間の流れや物事が起こる順序が、秩序あるものにするために必要だったように、第 4 千年紀に聖なる国民が神のもとに

分離されて真理と霊的成長が繁栄し、その後諸国民に証する環境をしっかりと備えることは必須でした。そして、創世記の第 4 日におおぞらが天の光で満たされたように、すべての国の光となる聖なる国民、イスラエルの設立は、神の家族の拡大にとって不可欠なステップでした(イザヤ 42 章 6 節, 43 章 21 節, 49 章 6 節, 使徒行伝 13 章 47 節)。

分離: 特定の家族が神によって召し出され、証しをする特異な国に発展するためには、その家族が存在した異教世界のあらゆる不敬なものから分離し、聖別されることが必要でした。アブラハムに約束された聖なる子孫の印、すなわち割礼は、神の目から見てイスラエルを特異な存在として区別する役割を果たし、また重要なことに、神と神の約束を信じることの象徴的な証印でもありました(ローマ 2 章 29 節)。またモーセの律法は、分離、聖化、区分の手段でもありました。モーセの律法はイスラエルに「わたしは聖なる者であるから、あなたがたは聖なる者とならなければならない」(レビ 11 章 44-45 節、第一ペテロ 1 章 16 節)と呼びかけ、そのすべての戒律において、聖と俗を分離させることが本質的な基本原理でした(レビ 10 章 10 節; 20 章 25-26 節)。律法の本質である十戒(参照:申命記 4 章 13 節)[26]は、神の民を悪から切り離し、人生の最も重要な領域における行動を聖化するという、この同じ基本理念を語っています:

領域 1<聖化のためになされた分離の領域>:神に対する神聖さ(私たちが考え、行い、言うことにおいて、神を聖なる方とすること):

1. 他に神々を持たない:私たちが神についてどう考えるかの聖性を守る。

2. 偶像を持たない:私たちが神に対してどのように行動するかの聖性を守る。

3. 主の名前を悪用しない:私たちの話し方で、主をどのように表現するかの聖性を守る。

領域 2<聖化のためになされた分離の領域>:生活における聖性(この世に依存することから自分を聖別すること)

4. 安息日を守る: 休息日の神聖さを守り、現世での備えを自分ではなく神に信頼する(エゼキエル 20 章 12 節, 20 章 20 節参照)。【要注意!】:これは新約聖書で繰り返されていない唯一の戒めです。ヘブル書が力強く宣言しているように、特定の日を守

[26] 神への愛と隣人への愛、このような行為を否定する律法はない(ガラテヤ 5 章 23 節)と主が教えておられるように、愛の律法によって、さらに洗練されたものになるのです。

ることは、(動物の犠牲がキリストの犠牲という現実に取って代わられたのと同じように:ヘブル 4 章 1-11 節、ローマ 14 章 5-8 節、コロサイ 2 章 16-17 節参照)神への継続的な休息と依存という現実に取って代わられました。十字架以来、私たちはある特定の日だけでなく、常に神のもとに安住するようになりました。

領域 3＜聖化のためになされた分離の領域＞:権威に対する聖性(神によって構成された権威に対する反抗から聖別すること):

5. 父と母を敬う: 正当な権威に対する私たちの行動の聖性を守る。

領域 4＜聖化のためになされた分離の領域＞:他者に対する聖性(他者がこの人生において神を求める権利を侵害することから、自らを聖別する＜律する＞こと):

6. 殺人の禁止: すべての人間が、神から与えられた時間の中で神を求めるための必須条件である生命の尊厳を守る。

7. 姦淫禁止: 大多数の人々が、神を求めるための基盤として、人生を正常に機能させるために必要とする、基本的なサポートネットワークである家族の神聖さを守る。

8. 窃盗をしない: 神様を求めるために必要な、この世を生き抜くための要素である財産の尊厳を守る。

9. 偽証禁止: 自由に神を求めることができる重要な条件である、法の下での無実の人の自由の神聖さを守る。

10. 貪欲でないこと: 神への探求を妨げる邪悪な行為や意図の脅威から、一般的な行動の自由の聖域を守る。

最後に、イエス・キリストの明確な予型であるダビデが召天し、イスラエルという国がしっかりと確立されたこと(詩篇 110 章)は、暗い世界に、神と神の完全な基準に従う国に、神の義とそれに伴う祝福が注がれるという輝く例を提供しました。それは人間の生存に必要な光の継続的秩序を持つ天体の規則正しい機能に類似した形で、暗い世界の中で神を求め、神を証するための(律法、旧約聖書、聖なる国民で表された)環境基準を設定しました(出エジプト 19 章 5-6 節、レビ 20 章 26 節を参照):

あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。（申命記 7 章 6 節）

主は言われる、「あなたがわがしもべとなって、ヤコブのもろもろの部族をおこし、イスラエルのうちの残った者を帰らせることは、いとも軽い事である。わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、わが救を地の果にまでいたらせよう」と。（イザヤ 49 章 6 節）

充填される＜満たし＞: アブラハムへの子孫の約束とイサクの誕生によって、神の家族が拡大していく過程が本格的に始まりました。アダムから引き継がれたセツへの信仰を辿る証人は、この地上ではほとんど数の増大しない直線的な系図でした（洪水の時にノアとその家族七人＜合計八人＞しか残っていなかったことが証明しています: 第一ペテロ 3 章 20 節）、創世記 3 日目に植物が地に満ち溢れたように、葡萄であるイスラエルが、より恵まれた環境の下で繁栄し、世界に大きく広がって発展します（詩篇 80 篇 8-16 節、イザヤ 5 章 1-2 節、エレミヤ 2 章 21 節、エゼキエル 17 章、ホセア 10 章 1 節、ヨハネ 15 章 1 節参照）。割礼の誓約（分離の印）と律法の授与（善悪の完全な分離）は、この聖化の主要な要素でした。金の子牛の反乱の際、神がモーセに「わたしはあなたを大いなる国民にする」（出エジプト 32 章 10 節）と言われたように、（この拡大した家族から）聖なる国民を形成することも、神の置き換え計画の鍵となるものでした。

エジプトでのイスラエルの保護、厳しいパロの下での試練、荒野での訓練、そして神の指示と助けによるカナン族の追放は、すべて一人の人の種から神の家族を増え広がらせるための過程の一部でした。キリストの明確な予型であるダビデの最初の指揮の下、国境という明確な地理的境界線を持つ国家イスラエルの到来により、神がアブラハムに約束された子孫が天の星よりも多くなるという成就のために、充填と置き換えのプロセスが継続されていますが、これは創世記 4 日目に天のおおぞらが＜大きな光、小さな光、星などで＞満たされたことと似ています（創世記 15 章 5 節, 22 章 17 節, 26 章 4 節; 申命記 1 章 10 節; 歴代志上 27 章 23 節; ネヘミヤ 9 章 23 節; ヘブル 11 章 12 節; 創世記 37 章 9 節; 黙示録 12 章 1 節参照）。そしてこれは「星」である堕天使が、神を選んだ信仰者の「星」に置き換えられる前兆です（黙示録 12 章 4 節と 黙示録 12 章 1 節 を参照のこと。アブラハムの霊的種である私たちも神の天空の星です: ローマ 4 章 16 節）。

創世記の第二の二日間＜すなわち三日目と四日目＞は、乾いた地と水、光と闇を分離することで、物理的な生命にとって不可欠な環境を完成させることに焦点が当て

られました。（具体的には、第一の日に達成された光と闇の大まかな分離とは違い、一連の連続した集中的な光であり、）これは第二の二組の千年紀＜すなわち第二の二千年間＞（ユダヤ人の時代）が、神が人類史の計画において、まず一つの民を、次に国家をご自身のために聖別し、異教世界の他の部分から聖別された神の家族を拡大し、次に国家として、イスラエルの光を通して神の証を世界に示すための安息の地を提供することと重なります。

創世記の第二の二日間＜すなわち三日目と四日目＞が、地が植物で満たされ、おおぞらが太陽、月、星で満たされた最初の段階に焦点を当てるように、第二の二組の千年紀＜すなわち第二の二千年間＞（ユダヤの時代）は、数の面では、（葡萄のつるであるイスラエルと、星の数ほどいる国家イスラエルを通して）人類史上初めて神の家族が大きく拡大し、神の家族から離れることを選んだ天使たちと置き換えるプロセスの始まりとなるのです。

第 5 日と第 6 日：

創世記の再創造の第三の二日間＜すなわち 5 日目と 6 日目＞は、特に明らかにひと組になっており、両日とも、もっぱら充填のわざとなっており、水生生物で水を満たし、鳥で空を満たす（5 日目）、陸生生物で地を満たし、人間（地の正しい支配者としてのキリストの予型、ここでは 6 千年期の終わりの神の家族の補充完了の象徴）の創造を頂点（6日目）となっているのがわかります。

第三の二日の期間は、水生生物と陸生生物の創造を通して、空っぽの世界を再び満たすことを完了します。この空っぽの世界を再び満たすプロセスの完成は、神が、サタンに従う者＜堕天使＞の代わりとして、第五千年期と第六千年期に信者を増え広がらせることの完成に似ています。

<u>第 5 日 – 教会時代の第一千年紀</u>: 創世記の 5 日目に水生生物と鳥類が創造されたことが、空っぽの世界の再充填において飛躍的な進歩をもたらしたように、教会時代の最初の千年紀では、福音が初めて異邦人に本格的に伝わり、地上の神の家族の数が正に爆発的に増加したのです。第 5 番目の千年期において、聖典が一つの完全な聖書に集められ、配布されたこと、そしてそれを原語で学び、教えるために必要な基盤が出現したことが特徴です。すなわち、キリスト教の神学体系の構築、写本形式の開発（つまり、多くの学者が初期キリスト教徒によると信じている本が制作され）、多くの言語に訳され、（それらの結果として）識字率の向上（教養ある少数の人々だけでなく、多くの人達が神の言葉を読むことが可能になりました）などです。これらの出来事は、使徒たちが教会の第一世代において始めた、福音信仰の爆発的な拡大をもたらしました。しかし、聖霊の働きは今日に至るまで同じように継続していますが、聖霊の

奇跡的な賜物（例えば、使徒職、異言、預言、癒し）の多くは、その最初の時代から継続しなかったという事実に留意すべきです。

このように、教会時代の二つの千年期にまたぐ信仰の高まりの中で、（ペンテコステの日に注がれた）神の御霊と、（教育の確立とヘブル語とギリシャ語の原典が幅広く教師らに入手可能になり、また翻訳がなされたことによって、すべての一般のクリスチャンに利用可能になった）神の御言葉との強力な組み合わせが、最も華々しい奇跡のわざや最も興味をそそる霊的賜物に勝って力強く、かつ効果的であることが歴史的に証明されています。

第 6 日-教会時代の第二千年紀：創世記の第 6 日目に地上の生命が創造され、空っぽだった世界が再び満たされたように（人間の創造に至る）、第六の千年紀は、イエス・キリストの世界規模の教会が創造されたのでした。教師が神の御言葉を正しく学ぶ手段（聖書の原語教育、神学教育、聖書の歴史的・文化的背景教育）が確立され、豊富な言語による聖書の入手が可能になったことで、福音のメッセージはほぼすべての風土と場所に浸透しています。この過程は、福音が普遍的に利用可能になり、神の家族として最後に置き換えられることになっている者達が加わるまで続き、それからイエス・キリストの再臨によって終わりが来ます（マタイ 24 章 14 節； 黙示録 10 章 1～7 節,14 章 6,7 節）。

充填＜満たし＞： 異邦人への福音の伝播（イスラエルを通して）により、第三の二つの千年期間＜五千年紀と六千年紀＞の預言によって約束された神の家族の大拡張の過程は、イエス・キリストの再臨の直前にその完成に達します。 異邦人がある日、かつてないほど多く主に立ち返るということは、ヘブル語の聖典が明確に預言していることであり（使徒行伝 9 章 15 節,15 章 13-19 節; ローマ 9 章 1 節-11 章 36 節、15 章 15-16 節 参照）、神から霊感を受けて新約聖書を書いた人たちはこの事実をよく理解しています：

> わたしはあなた（アブラハム）と契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう。（創世記 17 章 4 節） （ローマ人への手紙 4 章 17 節参照）

> アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか。（創世記 18 章 18 節） （ガラテヤ人への手紙 3 章 8 節参照）

国々の民よ、主の民のために喜び歌え…（申命記 32 章 43 節）（ローマ人への手紙 15 章 10 節参照）

このゆえに主よ、わたしはもろもろの国民のなかであなたをたたえ、あなたのみ名をほめ歌います。（詩篇 18 篇 49 節）（ローマ人への手紙 15:9 参照）

主よ、あなたが造られたすべての国民（＝異邦人）はあなたの前に来て、伏し拝み、み名をあがめるでしょう。（詩篇 86 篇 9 節）（ヨハネの黙示録 15 章 4 節参照）

もろもろの国よ、主をほめたたえよ。もろもろの民よ、主をたたえまつれ。（詩篇 117 篇 1 節）（ローマ人への手紙 15 章 11 節参照）

その日、エッサイの根が立って、もろもろの民の旗となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光がある。（イザヤ 11 章 10 節）（ローマ人への手紙 15 章 12 節 参照）

彼は多くの国民（異邦人）を［救いをもって］驚かす。王たちは彼のゆえに口をつむぐ。それは彼ら（異邦人）がまだ伝えられなかったことを見、まだ聞かなかったことを悟るからだ。（イザヤ 52 章 15 節）（ローマ人への手紙 15 章 21 節参照）。

わが家はすべての民（＝異邦人）の祈の家ととなえられるからである。（イザヤ 56 章 7 節後半）（マタイ 21 章 13 節; マルコ 11 章 17 節; ルカ 19 章 46 節参照）

わたしはわたしのために彼を地にまき、あわれまれぬ者をあわれみ、わたしの民でない者に向かって、「あなたはわたしの民である」と言い、彼は「あなたはわたしの神である」と言う。（ホセア 2 章 23 節）（ローマ 9 章 25 節参照）

その日には、わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、その破損を繕い、そのくずれた所を興し、これを昔の時のように建てる。これは彼らがエドムの残った者、およびわが名をもって呼ばれるすべての国民（異邦の国々）

を所有するためである」とこの事をなされる主は言われる。(アモス 9 章 11-12 節)[27] (使徒 15 章 16-17 節参照)

したがって、キリストの花嫁(すなわち、アブラハムからキリストに至る信仰深いイスラエル人)の最初の主要な入信がいかに大規模なものであっても、数値的には、その救いを勝ち取った方の出現と犠牲を機に続く、その後の救われた人々の大波には及びません。さらに、私たちすべての救い主、世界と人類の歴史はこの方のために存在し、この方を通して私たちに生ける神の子となるという計り知れない特権を与えられた歴史の鍵と礎である方にとって、(救われない堕天使に代わる)大波のように数多く救われる人類が、その犠牲となられた方の生涯と死、そして永遠の命の希望を保証する復活の流れとなって続くことは、確かにふさわしいことです(ヨハネ 1 章 16 節; ガラテヤ 4 章 4 節参照):

なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君(私たちの主イエス・キリスト)を、苦難をとおして全うされたのは、彼(父)にふさわしいことであったからである。実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかた[父]から出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。すなわち、「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめ歌おう」と言い、また、「わたしは[も]、彼[=父]により頼む」、また、「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子らとは」と言われた。(ヘブル 2 章 10-13 節)

---

[27] 使徒言行録 15 章 16-17 節でヤコブがこの節を引用していること(七十人訳とは若干異なる)、また七十人訳の解釈も同様であることから、この節は、マソラ写本伝承版における些細な変更が、意味にかなり大きな食い違いをもたらした稀な例の一つであると、ほぼ確信をもって言うことができます。マソラ写本に基づくヘブル語では、למען יירשו את שארית אדום が למען יידרשו אתו שארית אדם のことを指しているのはほぼ間違いないでしょう。(七十人訳の原文とヤコブが理解した)原文は、「エドム」のワウוを先の目的語標識の末尾に移すだけで、動詞の最初の根文字としてヨードיの代わりにダレスדと読むだけで、字数を変えることなく(文字を数えることがテキストを保護する主な仕事であったマソラ書記にとって決定的に重要な問題)、改訂されたテキストができてしまいます。この混乱は次のように説明されます:原文では、ダレス(daleth)דの縦書きの下の部分が不明瞭になり、(「主を求める」ではなく)「主を所有する」となってしまったのです。そこで、この書記者は、ワウ(すなわち、「彼」の表記)を、「人」という言葉の、最初の適切と思える場所に転置作業をしてしまい、これによって、「人」がエドム(「所有する」の言葉が上手くはまる箇所)に豹変し、「残りの者」が主語ではなく目的語になるという二重の結果が生じたのです。さらに詳しい議論は、Gleason L. Archer and G.C. Chirichigno, Old Testament Quotations in the New Testament: A Complete Survey (Chicago 1983) 152-155 を参照してください。私自身、אתの代わりにאתוと読むことについて、この文献にお世話になりました。

このように、教会時代は、異邦人時代が予象し、ユダヤ人時代から始まったこと、つまり反抗的な堕天使を、神であるイエス・キリストと結びつく忠実な人間と体系的に一対一で置き換えます。このことは、聖なる建物が本質的な礎であるイエス・キリストの上に建てられているという聖書のたとえからもわかります(イザヤ 28 章 16 節、マタイ 16 章 18 節 [ペテロではなくキリストが岩 [28]]; ローマ 9 章 33 節、エペソ 2 章 21 節、第一ペテロ 2 章 4-7 節):

1) 異邦人時代＜最初の二千年の期間＞の信者は、一連の義の原型であり、構造物の設計図に類似しています(ヘブル 11 章 4-7 節)。

2) ユダヤ時代＜第二の二千年の期間＞の信者は、キリストの系図にある人達と聖書の著者らであり、構造物の基礎です(エペソ 2 章 20 節)。

3) 教会時代＜キリストの復活以降の二千年の期間＞の信者は、ユダヤ人と異邦人を問わず、信仰を持つ人々の大きな流入であり、建築物を構成する「生きた石」です(第一コリント 3 章 10-17 節; エペソ 2 章 22 節; ヘブル 3 章 6 節; 第一ペテロ 2 章 5 節).

すべては完全に等しくキリストの体の肢体であり、神の家なのです。(第一テモテ 3 章 15 節; ヘブル 3 章 6 節) そして、最後のラッパが鳴り、主が再臨されるとき、全ての「肢体」が復活して一つにつながり、主の凱旋に加わるのです(第一コリント 15 章 50-54 節; 第一テサロニケ 4 章 13-17 節; 第一ヨハネ 3 章 2 節; 黙示録 19 章 14 節)。それゆえ、初期の異邦人、ユダヤ人、そして教会が、重要な点でどこか違うと考えるのは間違いです [29]。私たちは皆、キリストにあって共に一つの体なのです。なぜなら、主は私たちを隔てる中垣を取り壊されたからです:

---

[28] パウロ書簡は、ペテロを「最初の教皇」とする主張を裏付けるためにマタイによる福音書 16 章 18 節を用いることが誤りであることを証明するのに十分な証拠です。なぜなら、パウロ書簡はその内容的にも量的にも、ペテロの優越性という概念を明らかに否定しているからです。ペテロ自身は、御霊の霊感のもとにパウロに従ったのであって、このような優越性を主張したことはありません (第二ペトロ 3 章 14-16 節)。主ご自身が異邦人への使徒として任命されたのはペテロではなくパウロであり (使徒行伝 9 章 15 節; ガラテヤ 1 章 15 節と 2 章 7 節参照)、使徒の中で最も偉大な使徒が立派に果たした役割です。マタイ 16 章 18 節のテキストについて言えば、「この岩の上に」という表現によって、キリストは明らかにペテロではなく、ご自分を指しておられます。この事実は、キリストがヨハネ 2 章 19 節で同じように指示代名詞ホウトス *houtos* を御自身を指て用いていることによって見分けることができます。(明確にご自身の体のことを言っているヨハネ 2 章 21 節と「このパン」と言っておられるヨハネ 6 章 50-51 節; 6 章 58 節も参照してください。) さらにこの点については、ペテロ・シリーズ#2 をご覧ください。

[29] 例えば、第一コリント 15 章 23 節は、アダムから再臨までの「キリストの花嫁」全体を、「キリストが来られる時にキリストのものとなる者たち」という表現で一つにまとめており、千年王国以前の信者を区別していません。

だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であって、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々からは、無割礼の者と呼ばれており、またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であった。ところが、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近いものとなったのである。キリストはわたしたちの平和であって、二つのもの[ユダヤ人と異邦人]を一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて[この]平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、[神と人間の間の]敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、[初臨において]こられた上で、[神から]遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあって、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである。(エペソ 2 章 11-22 節)

(i.) **イスラエルの独自性：** 前項では、現代の異邦人信者が、イスラエルに取って代わるのではなく、イスラエルと共に神の家に属するようになったと描かれていることを見逃してはなりません。この描写は、新約聖書でこの問題が議論されている他のすべての箇所と一致しています。異邦人は、自然のオリーブの木であるイスラエルに接ぎ木された野生のオリーブの枝です(ローマ 11 章 13-24 節)。この問題の真実は、教会はユダヤ人と異邦人で構成され、ユダヤ人信者はユダヤ時代だけでなく教会時代にも、神が建てようとしている聖なる建物の土台であるということです：

1) キリストの使徒はすべてユダヤ人でした。また、新約聖書はほとんどギリシャ語で書かれていますが、新約聖書と旧約聖書のすべての著者もユダヤ人でした(参照：申命記 4 章 6-8 節、詩篇 147 篇 19-20 節、イザヤ 59 章 21 節、ローマ 3 章 1-2 節)[30]

[30] 旧約聖書と新約聖書のごく一部はアラム語で書かれています。旧約聖書の著者については、匿名の部分もありますが、すべてヘブル語です。新約聖書の中で唯一「匿名の」書物はヘブル人へ

2)　一世紀のユダヤ人の多くは、ユダヤ人の同胞が自分たちのメシアを拒絶したのと同じように福音を拒絶しましたが、使徒行伝と書簡をざっと読んだだけでも、ユダヤ人信者が教会の最初の基盤であり、異邦人の流入が始まった後も大きな役割を果たし続けたことがはっきりとわかります。

3) ユダヤ人信者は存在するだけでなく、教会のすべての世代において重要な役割を果たし、また果たし続けるでしょう(ローマ 11 章 5 節)。福音は、まずユダヤ人のものであり、神の恵みによって私たち(異邦人)にもたらされたものであるからです:「**まずユダヤ人に、そしてギリシャ人(異邦人)にも**」(ローマ 1 章 16 節;マタイ 10 章 5 節,15 章 26 節、使徒行伝 13 章 46 節、ローマ 2 章 9-10 節)とあります。

4) 教会時代の大多数のイスラエルの血筋の頑なさは、パウロの時代から、信じる同胞の心にかなりの重荷となっていました(ローマ 9 章 3 節,10 章 1 節)。イエス御自身、彼らの信仰の欠如を嘆き(マタイ 23 章 37 節)、千年王国時代の二つの教会時代を構成するこの「異邦人の時代」について、異邦人が王国に殺到する一方で、ユダヤ人の信仰は衰退すると預言しました(ルカ 21 章 24 節、招かれた人々が来ず、代わりに他の人々が連れて来られる婚宴のたとえを参照:マタイ 22 章 1-14 節; ルカ 14 章 15-24 節)。[31]　抵抗する多数派の場合、過去と予言された未来の両方において、信仰の面でイスラエルが優位に立つのとは全く対照的であるこの抵抗の中核には、常に次の二つの問題があるようです:[32]。

の手紙ですが、この手紙は使徒パウロによって書かれた可能性が高いです。ルカもまたユダヤ人でした(オリゲンからディースマンまでの学者たちが推測しているように、ローマ16章21節では、彼は間違いなくパウロのユダヤ人「近親者」として記述されている「ルキオ」です。ローマ16章7節参照)が、コロサイ4章11節を根拠に異邦人とみなされることが多いのは、ギリシャ語のパレゴリア(παρηγορία:新約ではここでのみ使用)という言葉の誤解によるものです:「**また、ユストと呼ばれているイエスからもよろしく。割礼の者の中で、この三人だけが神の国のために働く同労者であって、わたしの慰めとなった者である。**(つまり、パウロを慰める言葉ではなく、ローマ当局に対するパウロの弁護に役立つ言葉を発した者として)『ローマ人への手紙』から明らかなように、ローマにはユダヤ人クリスチャンが大勢いたのですから、捕囚中のパウロを慰めたユダヤ人がこの三人だけであったとしたら、それは奇妙極まりないことです。

[31] ユダヤ人と異邦人に関しては、「必要な置き換え」の問題ではありません。神の資源は無限であり、キリストの血はすべての人に十分です。神はすべての人が救われることを望んでおられ(第一テモテ2章4節; 第二ペテロ3章9節)、パウロが雄弁にこう言っているように、「**もし、彼らの罪過が世の富(救い)となり、彼らの失敗が異邦人の富(救い)となったとすれば、まして彼らが全部救われたなら、どんなにかすばらしいことであろう。**」(ローマ11章12節)

[32] 罪の性質が人間の肉体に宿っている限り、イスラエルが完璧であった、あるいはこれからも完璧であろうと主張する人はいないでしょう。ユダヤ人時代の失敗はよく知られています（例えば、出エジプトの全世代)。しかし、このケースは、チャーチルが民主主義

a) 受難したメシアを受け入れない(マタイ 16 章 21-23 節;ヨハネ 6 章 66 節;第一コリント 1 章 22-23 節; 十字架の代わりに奇跡的な力を示すことを望むことについての節を参照 マタイ 16 章 4 節; マルコ 8 章 11-12 節; ルカ 11 章 29 節)、その結果、礎であるイエス・キリストとその十字架の「辱め」につまずきます(ローマ 9 章 32-33 節; 第一コリント 1 章 22-23 節; ガラテヤ 5 章 11 節; ヘブル 11 章 26 節, 12 章 2 節, 13 章 13 節).

b) ただ信仰によるだけの異邦人をアブラハムの子孫である神の家族に含めることへの憤慨(マタイ 27 章 18 節; 使徒行伝 13 章 43-45 節, 17 章 5 節, 22 章 21-22 節;ローマ 10 章 2 節; ルカ 15 章 25-32 節参照)、それに付随して、信仰の代わりに律法による自分の義を信頼する(ローマ 9 章 30-32 節, 10 章 3-4 節)ことになります。この第二の問題は、まさに十字架後の問題です。イエスの地上での働きは、異邦人ではなく、完全にイスラエルに焦点を当てていたので、主の同時代の人々にとっては、これは問題にはなりませんでした。彼らは異邦人の信仰のことが持ち上がる前に、イエスを拒絶したのです(マタイ 7 章 6 節, 10 章 15 節)。

このイスラエルの「一部が頑なになる」のは、「異邦人の満ちる時が来るまで<新改訳Ⅳ>」続く運命にあります。(ローマ 11 章 25 節)。これは教会時代を特徴づけるもので、異邦人信者の召し出されるのが完了するまで、つまりキリストの再臨の直前まで継続するもので、再臨の時に完了します(黙示録 11 章 2 節, 12 章 17 節参照)。主の再臨の瞬間、イスラエルのすべてが変わり、栄光のうちに帰って来られる主を仰ぎ見る時、完全な輝かしい心の変化がもたらされます(ゼカリヤ 12 章 10-14 節; 黙示録 1 章 7 節; ヨエル 2 章 30-32 節;マタイ 24 章 30 節参照)。

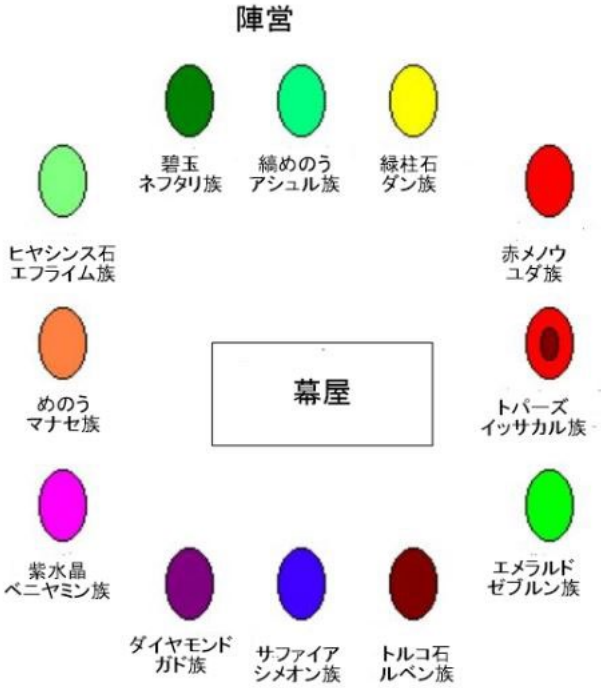
5) このような長い期間の「頑なさ」にもかかわらず、教会時代の最終段階において、ユダヤ人の時代の艱難期と呼ばれる最後の七年間と重なるとき、イスラエルは再び壮大な形で主導権を握ることになります。黙示録 11 章の二人の証人であるモーセとエリヤは、最も重要な警告の働きのために再び現われるでしょう。この二人は、まさにこの目的のために神によって体が「取り去られた」、私たちが知っている唯一のユダヤ時代の信者です(申命記 34 章 6 節、ユダ 1 章 9 節、列王紀下 2 章 11-12 節と比較のこと)。そして、福音(と差し迫った終局についての神の警告)の最後の世界的な証し

を、他のすべてのものを除けば最悪の政治形態である<つまり他の政治形態はもっと悪い>と評したのとよく似ています。イスラエルの業績は、その失敗に限って言えば悲惨なものですが、私たち自身のキリスト教時代を含め、人類史上の他のどの国家や集団よりもはるかに優れています。

は、14 万 4 千人のユダヤ人によって地球の四隅にもたらされます(黙示録 7 章 1-8 節,14 章 1-5 節)。こうして、世界に福音が行き渡るという預言が、ユダヤ人の手によって一部成就します(黙示録 14 章 6-7 節にある究極的な預言の成就と比べれば、異邦人らによる証は付随的なものとなるでしょう: マタイ 24 章 14 節; マルコ 13 章 10 節)。

6) ダビデの子が王として地上を支配するために戻ってくるときの、イスラエルの千年王国時代の栄光とその議論の余地のない卓越性によって、アブラハムの子孫が神の御計画と家族において高くされていることが明白になります。(千年王国時代の詳細については以下のセクション IV.2 と本シリーズ第 1 部も参照)。

7) イスラエルの優位性は、ヨハネの黙示録 21-22 章の永遠の状態の記述からも明確に見ることができます。(歴史的なユダヤの首都にちなんで名付けられた)新エルサレムの十二の門はイスラエルの十二部族にちなんで名付けられ(黙示録 21 章 12 節)、その壁の十二の基礎は(ユダヤ人の)十二使徒にちなんで名付けられます(21 章 14 節)。[33]



8) そして、メシアはイスラエルから来ます(ヨハネ 4 章 22 節; 詩篇 2 篇 8 節)。 私たちは、キリストがユダヤ人であり、アブラハムの子孫であり、イスラエルのぶどうの木(詩

[33] ここに表示されているチャートの宝石の順序についての具体的な情報は、このシリーズの第 4 部 III.3.b.2 項を参照してください。

篇 80 篇 8-16 節; ヨハネ 15 章 1 節～)、ダビデ家の血をひく枝(イザヤ 4 章 2 節; エレミヤ 23 章 5 節, 33 章 15 節; ゼカリヤ 3 章 8 節, 6 章 12 節;)、そして、預言的には、イスラエルの光、世の光(イザヤ 42 章 6 節,49 章 6-7 節,55 章 3-5 節;ヨハネ 1 章 5 節, 3 章 19 節, 8 章 12 節, 9 章 5 節, 12 章 46 節と比較のこと)です。

したがって、異邦人がイエスの「他の羊」であり(ヨハネ 10 章 16 節; 11 章 52 節; ゼカリヤ 2 章 11 節参照)、キリストにおいてユダヤ人と一つにされ(ガラテヤ 3 章 28 節; マタイ 23 章 8 節の「兄弟愛」参照)、二つの群れの間の障壁が主の十字架によって取り除かれる(エペソ 2 章 11-21 節)、そして、小羊の勝利の宴で小羊と共にある東と西からの多くの人々がいること(イザヤ 25 章 6 節; マタイ 8 章 11 節; ゼカリヤ 2 章 11 節)、異邦人のクリスチャンは、自分たちがイスラエルの霊的子孫(黙示録 12 章 17 節)、信仰によるアブラハムの子(ローマ 4 章 11,16 節)だと理解しなければなりません。私たちは野生のオリーブの枝であり、私たちを産むのはイスラエルの根であって、その逆ではありません:

> しかし、もしある枝が切り去られて、野生のオリブであるあなたがそれにつがれ、オリブの根の豊かな養分にあずかっているとすれば、あなたはその枝に対して誇ってはならない。たとえ誇るとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのである。すると、あなたは、「枝が切り去られたのは、わたしがつがれるためであった」と言うであろう。まさに、そのとおりである。彼らは不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っているのである。高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう。神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう。しかし彼らも、不信仰を続けなければ、つがれるであろう。(ローマ 11 章 17 節-23 節前半)

(ii.) **教会**: イスラエルが神の計画の中で明らかに特異であり、神との特別な関係を持っていたことを考えると(申命記 4 章 6-8 節, 4 章 34 節, 7 章 6 節, 列王紀上 8 章 53 節, ゼカリヤ 2 章 8 節)、異邦人が前例のない数で神の家族の一員として呼び出されたことは、(上に記したように)預言で予見されていたとはいえ、特に悪魔にとってはかなりの驚きでした。悪魔は、人類の歴史の 7,000 年の概要はよく知っていて、自分と自分に従う者たちが、人類の信者と一対一で入れ替えられることもよく知っていたと思われますが、これは本来、安息の日の開始時に完了するべき計画です。ペンテコステ

の日を前にして、彼が慎重に作成したスコアカードを見ると、すでに経過した時間の 3 分の 2（異邦人の時代＜2千年＞とユダヤ人の時代＜2千年＞）において、必要な数のごく一部しか神を信じ選んでいないことを考えると、必要な入れ替えの数を予定通りに満たすことは不可能だと思われたに違いありません。

しかし、神であるにもかかわらず真の人間を身にまとい、人間のために死なれた主イエス・キリストの受肉と犠牲が、肝つぶしのような神の偉大な戦略であり、時代の勝利であるように、最後の一組＜創造から 5 千年目と 6 千年目＞の二千年の間に、異邦人のキリストの信者の集まりが洪水のように満ちることは、勝利の十字架の後に続いた偉大な「奥義」なのです。

創世記の最後の一組＜5 日目と 6 日目＞の日に再創造された地球が、本格的に多くの生き物で満たされたように、歴史的な千年期の最後の一組の期間に、神の家族が信者で満たされ、キリストの体、キリストの花嫁がその完全な数に満たされることが、神の視点から見た世界の歴史の基本的な目的なのです。

教会という言葉と概念は、このような観点から見なければなりません。なぜなら、正しく理解された教会は、最終的にはペンテコステの日以降にイエス・キリストに信仰を置いた人々だけでなく、最初の六つの千年の期間（至福千年については後述します）を通じて、すべての信者によって構成されるからです。

ステパノが「荒野における集会」（使徒行伝 7 章 38 節- NIV 訳では「集会」）と言ったことは、普遍的な信者の集会が、一般に「教会」と考えられているものよりも前にあったことを明確に示しています。英語の「チャーチ」という言葉は、ギリシャ語の「キリアコン」（主に属する）という形容詞が古英語に借用されて変化したもので、当時の信者たちが、地域の信者の集まりと普遍的な教会を区別することを意図していたことは明らかです。

ギリシャ語の新約聖書では、「教会」と訳されている言葉は、「エクレシア（*ekklesia* (ἐκκλησία)」という全く別の言葉です。この言葉は、「召集する」という動詞と「から」という前置詞から派生したもので、古典ギリシャの都市国家において、権利を与えられた市民の集まりに使われた言葉と同じです。このような特別な選択や特別な特権という概念は、形容詞形である eklektos＜エクレクトス＝選ばれた・選び出された＞にも見ることができます。この形容詞は、英語の「エレクト elect＜＝選ぶ＞」の語源となったラテン語と形も意味も似ています。

このように教会は、人類の歴史の最初の 6 千年の間に、イエス・キリストに忠実に従うことを選んだすべての人々の世界的な集まりであり、選ばれた少数の人々（信仰による恵みによって、エペソ 2 章 8-9 節）であり、神によって悪魔の世界から神の家族の中に召され選ばれたグループであるということは真実で、新約聖書全体で支持されているだけでなく（マタイ 22 章 14節; ローマ 8 章 33 節; 第一コリント 1 章 27 節; 第一テサロニケ 1 章 4 節; 第一ペテロ 1 章 1 節; 黙示録 17 章 14 節参照）、「エクレシア」は

イスラエルの集会「カハール qahal (קהל)」の標準的な訳であり、旧約聖書で与えられているイメージとも一致しています [34]。

私たちが世から選び出されたのは、選ばれた方であるイエス・キリストにより、その方のために私たちは世から選ばれ、その選ばれた方と一緒に永遠を分かち合うためなのです（イザヤ 42 章 1 節と 44 章 1 節を比較、ルカ 9 章 35 節, 23 章 35 節；第一ペテロ 2 章 4 節を参照）。

> もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世**から選び出した**のである。だからこの世はあなたがたを憎むのである。（ヨハネ 15 章 18-19 節）

> ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神はキリストにあって、天上で霊のもろもろの祝福をもって、わたしたちを祝福し、みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、**キリストにあってわたしたちを選び**、（エペソ 1 章 3-4 節）

このようにして、教会の真の意味は、人類の歴史のあらゆる時代からキリストのために形成され、選ばれた集合体ということです [35]。

(iii.) キリストの奥義： ギリシャ語で、「奥義」(ミステリオン μυστήριον)とは、最も一般的には、秘密の儀式、祭礼や難解な情報の一部で、あるカルト（例えば、エレウシアの奥義）の入門者だけが知ることを許され、言い換えれば、選ばれた少数の者以外には一般的に隠された秘密のことです。この「奥義」という呼称は、メシアの初降臨（受肉と十字架上の勝利）と、それに続くメシアの教会の召集（異邦人信者が全く予期せぬ数で神の集会に殺到する）の両方の性質を完璧に反映しています。先に見たように、メシ

---

[34] カハールという語は、「集められる」ことを強調し（NASB 版では 95 回「集会」と訳されています）、もう一つのイスラエルの民を表す語、エダ（עדה）は、「定められた場所に召された」ことを強調します（NASB 版では 126 回「会衆」と訳されています）。この後者の用語には、旧約聖書のギリシャ語版である七十人訳では、シナゴゲ（synagoge）、つまり私たちの「会堂」が使われています（ヘブル 10 章 25 節「あなたがたの会堂を共にすること」と比較）。この二つのヘブル語が同義語であることは、七十人訳が民数記 16 章 2-3 節をエクレシアと訳していることからも明らかです。ギリシャ語のエクレシアは、カハールとエダの両方を訳すのに自然な言葉であり、エクレシアという言葉には両方の概念（すなわち、すでに召し出されているということと、召し出される過程にあるということ）が含まれているからです。

[35] つまり、キリストのために特別な祝福を加える至福千年期の信者を除いては（下記参照）。

アの受難も異邦人の神の家族への流入も聖書で予言されていましたが、三位一体の第二位格が人間の存在を担って私たちの罪のために死ぬという特殊性と、異邦人の信仰者が神の教会に殺到するという前例のない特殊性は、それを暗示した旧約聖書の預言者たちをも驚かせたことでしょう。つまり、これらのすべては、十字架以降に初めて完全に明らかになった「奥義」だったのです:

> この救については、あなたがた[異邦人]に対する[来たるべき]恵みのこと(例えば、異邦人の中から多くの者達が召し出されること)を預言した[昔の]預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光(例えば教会が召された者たちで満たされること)とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。(第一ペテロ 1 章 10-12 節)

この最後の節には、キリストと教会の奥義が、キリストの復活まで事実上覆い隠されたままであったという、非常に深い疑問への答えが記されています: もし、神に選ばれた民であり、神の御心にかなう地上の唯一の民であるイスラエルの多くが、神を受け入れなかったとしたら(列王記上 19 章 18 節、第一コリント 10 章 5 節など)どうして神から遠く離れた異邦人がこれほど大勢、神の家族に押し入ることがあり得るのかということです。その答えは、上記の 12 節が明らかにしているように、聖霊の働きによります。聖霊の働きについては、「聖書の基礎知識　第五部、聖霊論」で詳しく説明します。聖霊の賜物は、キリストの勝利と栄光の前には起こり得ない出来事であり(ヨハネ 7 章 39 節、ピリピ 2 章 5-11 節、イザヤ 53 章 2 節、ヨハネ 12 章 23 節,13 章 31-32 節, 17 章 1-5 節も参照のこと)、ここでは教会時代の最も重要で際立った特徴の一つであると言えば十分でしょう。ペンテコステ以降の伝道の拡大(使徒行伝 2 章 1-41 節, 5 章 12-14 節, 8 章 4-6 節, 8 章 29 節, 10 章 44-46 節)、イスラエルの国境を越えた伝道の拡大(使徒行伝 13 章 2 節, 15 章 28 節, 16 章 6 節, 20 章 28 節)、異邦人信者の神の家族への大量流入、これらの傾向は今日まで続いています(ヨハネ 3 章 5-8 節, 15 章 26-27 節, 16 章 5-11 節; ローマ 8 章 2 節, 8 章 26-27 節; 第一コリント 2 章 4 節; ガラテヤ 3 章 2-3 節, 5 章 16 節　次も参照のこと:第一ヨハネ 5 章 6-7 節)。

教会に先立つ系図（初期の異邦人）とその基礎（歴史的イスラエル）は、救い主の到来に先行するものでしたが、教会という偉大な体系の確立は、救い主の勝利と栄光と共にもたらされるものであり、キリストの心の「喜び」（ヘブル 12 章 2 節）、すなわち、キリストを完成する花嫁である教会を、この二千年の期間のうちに完成させるのは聖霊の働きなのです。その間に、同様に聖書から予想される（エレミヤ 31 章 33-34 節参照）ユダヤ人の信仰の急増な高まり（ただし、どの時代にも、少なくとも信仰を持つユダヤ人のレムナント＜残された者たち＞は存在します　ローマ 11 章 5 節）の預言は、破棄されたのではなく、単なる保留状態なのです。終末の日に来ると預言されている準備の務めを待ち、＜ユダヤ人らの信仰が＞メシアの再臨の時に完全に満ち溢れ出る備えがなされているのです：

> 兄弟たちよ。あなたがたが知者だと（思うべき限度を超えて）自負することのないために、**この奥義**を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が[神の家族に入って]全部救われるに至る時までのことであって、こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある、「救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払うであろう。そして、これが、彼らの罪を除き去る時に、彼らに対して立てるわたしの契約である」。（ローマ 11 章 25-27 節）

つまり、ユダヤ人がキリストを信じるようになる心の変化（教会時代を特徴づける異邦人の入信が洪水のように起きることに匹敵する）は、メシアの実際の帰還の時です。彼らが「刺し貫いた方」を見るとき（ゼカリヤ 12 章 10-14 節, 黙示録 1 章 7 節, ヨエル 2 章 30-32 節, マタイ 24 章 30 節参照）、イスラエルは教会時代の最大の＜魂の＞収穫をしのいで神に立ち返ります。神が選ばれた民を清め、回復させ、神がなさったすべての約束（イザヤ 65 章 8-10 節; エレミヤ 31 章 31-34 節; エゼキエル 20 章 33-38 節, 37 章 11-14節; ホセア 1 章 10-11 節; マルコ 4 章 5-6 節; マタイ 23 章 39 節, ローマ 11 章 26 節）を成就させるからです。この待望の霊的（地理的）なイスラエルの回復は、メシアの（最初の）出現に伴って起こるのではなく、メシアの十字架上の勝利以来（その勝利の直接的結果として：ルカ 2 章 32 節, 10 章 17-20 節参照）私たちが経験してきている、無数の異邦人が召される教会の完成を待って起こるという事実こそ、「奥義」なのです：

> すると、長老のひとりがわたしに言った、「泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、**勝利を得た**ので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる」。（黙示録 5 章 5 節）

神は、わたしたちを責めて不利におとしいれる証書（私たちの罪ある性質や個人的な罪など）を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた。そして、[十字架によって、神は]もろもろの[悪霊の]支配と権威との武装を解除し、キリストにあって**凱旋し**、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。（コロサイ 2 章 14-15 節）

(1)こういうわけで（つまり教会を聖なる宮に築き上げるため：エペソ2章 14～22節参照のこと）、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロ―(2)わたしがあなたがたのために神から賜わった恵みの務について、あなたがたはたしかに聞いたであろう。（すなわち、「キリストの名を異邦人に宣べ伝える」という任務：使徒行伝 9 章 15 節）(3)すなわち、すでに簡単に書きおくったように、わたしは[神の]啓示によって[神が異邦人を召し出すという]**奥義**を知らされたのである。(4)あなたがたはそれを読めば、**キリストの奥義**をわたしがどう理解しているかがわかる。(5)この奥義は、いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知らされてはいなかったのである。(6)それは[奥義とは]、異邦人が[今]、[主の勝利の宣言である]福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に[イスラエルに対する救いの]約束にあずかる者となることである。(7)わたしは、神の力がわたしに働いて、自分に与えられた神の恵みの賜物により、福音の僕とされたのである。(8)すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、(9)更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた[異邦人が召されるという]**奥義**にあずかる(「ディスペンセーション＜恵みの分配＞」の)務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。(10)それは[神がなされたので]今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、(11)わたしたちの主キリスト・イエス[というお方]にあって実現された神の永遠の(すなわち歴史の)目的にそうものである。（エペソ3章1～11 節）

これらのことを咀嚼（そしゃく）すると、上記の箇所は、第5千年紀、6千年紀の時代の奥義、すなわち、キリストの体を満たすための異邦人の召し出しという主題について、これまで議論してきた内容のほぼすべてを教えています。これについての預言は、その成就まで完全に理解されていなかったので、（花嫁である教会の立場から見

た場合）教会の奥義であると同時に、（花婿であるイエス・キリストの立場から見た場合）キリストの奥義でもあるのです＜以下は上記の聖句の解釈です＞：

－（1 節）（2 節）：パウロの宣教の目的は、キリストによって知らされた異邦人を召すという奥義を実行、または供与することです。
－（3 節）：過去に隠されていた奥義が、神の働きによって明らかにされました（啓示は奥義と対をなすものです）。
－（4 節）：（キリストの視点から見た奥義は、キリストの体と花嫁である教会の成就であるため）イエス・キリストが奥義です。
－（5 節）：この奥義は、この時の使徒と預言者に完全に明らかにされました（彼らは、異邦人への適切な宣教のために、異邦人の召し出しについて知ることが必要でした）。
－（6 節）：パウロは、キリストの花嫁の観点から、その奥義を具体的に説明しています。すなわち、異邦人が新しく同等の権利を共有すること（そして、彼らが神とイエス・キリストの群れの一員となること）です。
－（7 節）（8 節）（9 節）：キリストの勝利を宣言する福音による神の家族の予期せぬ拡大に対して、キリストの富を異邦人に開放し（ローマ 11 章 12 節; ガラテヤ 3 章 8 節参照）、奥義を明示する奉仕がパウロの仕事です。
－（10 節）：集会（キリストの教会）を満たす神の知恵は、こうして天の場所で知られるようになり、悪魔とその天使が反駁され、置き換えられることになります。
－（11 節）：このようなことが、人類史における神の目的であり、計画でした。それは、イエス・キリストという方のために、またそのお方を通して、置き換えのための神の集会である教会を築くことでした。

(iv.) 花嫁： 教会は、キリストの「からだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているもの」（エペソ 1 章 23 節）です。聖書は一貫して、キリストとその教会、そして男性と妻との関係に類似性があることを主張しています。エペソ人への手紙 5 章で、妻の夫に対する服従の義務と、夫の妻に対する愛の義務について長く論じた後、最後の節（エペソ 5 章 32 節）で、パウロは、これは大きな「奥義」であると認め、ずっと夫婦＜の関係＞について述べてきたことは、意外にもキリストと教会について＜の関係を＞、たとえとして主に語ってきたのだと告げています。

このように、救い主と救われた者の親密な関係は、非常に緊密で強烈であり、それ自体が、私たちがこれまで論じてきた奥義であり、教会のための犠牲となったイエスの受肉と、そしてイエスの勝利の後、教会がこのように驚くべき予期せぬ形で満たされることの両面の意味があります。

したがって、この（キリストと教会、男性と妻の間の）類似性は信じられないほど密接であり、神が結婚という人間の制度を造られ、聖別した人類史の最初の段階から見ることができるのです。実際、結婚という概念全体（人間特有のもの：ルカ 20 章 35-36 節参照）は、神が人類のために設けられたものであり、それは、神のすべての歴史に対する計画の基本的かつ不可欠なこと、すなわち、御子（愛する夫）の受肉と犠牲、教会（誠実な妻）の救いについて教えるためだと推論しても過言ではありません。

それは、最も基本的で原初の人間の制度（堕落前のエデンで奉献された結婚：創世記 2 章 18-24 節）が、神が構築した人類史の最も基本的で中心的な目的（イエス・キリストの救いと神の教会の召し）を映し出し反映するのにふさわしいものであることは確かです。神が人間の存在と人間の性質を、男が女を、女が男を必要とするよう造られたように（創世記 2:18）、神は人類の歴史のスパンを、この相対する型として確立し、真の人としてのイエスの到来とその花嫁の準備と召しを、この最初の六千年の日＜期間＞の重要な出来事とされたのです。

このように、歴史の全目的と理由（キリストの人格と業による教会の救い）は、死の必然性を除けば、間違いなく現世における人間の主要な関心事である結婚関係に反映されています。そして、すべての結婚関係において、私たちはすべての神秘の中で最も偉大なもの、イエス・キリストの偉大な愛とその教会の誠実さについて何かを学ぶのです。それは、私たちの肉の弱さと、その結果としての悪魔の世界における人間関係の不完全な性質にもかかわらず、適用されます。人は、キリストの愛の完全な基準に達するを得ませんが、人類のあらゆる夫の不完全さとの比較によって、キリストの完全な愛の神秘的な性質について学ぶことができます：すべての人間の過ちは、私たちの夫である神の完全さに注意を向けさせてくれます。

女性の側についてですが、イエス・キリストの完璧な愛に対する教会が捧げるべき完璧な従順さと忠実さはどうでしょうか？そのような例はすべて、私たちの天の夫にふさわしい完璧な応答が期待されていることを示すものですが、完璧さからはほど遠いものです。これらの肉体をもってこの世に残っている肢体の部分であるキリストの教会は、女性も男性も、自分たちが女性の役割にあることに気づき、キリストが地上での滞在中に示した、十字架上で完全な屈辱と死に至るまでご自分を低くされ、神に対する完全な従順と忠実を示されたように、私たちにも求められていることに注意しておくべきです（ピリピ 2 章 5-8 節）。

ですから、私たちは妻という立場から、教会とキリストの関係だけでなく、私たち個人とキリストの関係についても学ぶことができるのです（これは非常に重要です）。私たちは夫に対して義務を素晴らしく果たしている妻を示しているでしょうか。私たちは、血で私たちを買い取ってくださった方に対する自分たちの行いを調べ、その方の目に映っている＜期待の＞姿に生きられるよう挑戦しなければなりません。

私たちは、聖書の基準から大きく外れている妻でしょうか？私たちは、キリストと、私たちの反抗的な行動に直面したときの、キリストの赦しと誠実さに対する自分の振舞いをよく考えてみる必要があります。つまり、結婚に例えることで、キリストがどのような方で、私たちに何を求めておられるかを知り、私たちの真の優先順位と私たちの行動に対して、キリストがどう思われているかを知ることができるのです。

これはイエスが選んだ使徒たちを通して、今、教会に啓示された偉大な奥義です。これをよく考えることは、私たちが主をよりよく知り、主のためによりよい奉仕者になることによって、私たちが主に近づく助けとなるのです。最初のアダムが神によってエバと結ばれ、彼の肉の肉、彼の骨の骨となったように、教会は、最後のアダム、イエス・キリストの花嫁であり（1 コリント 15 章 45 節;ローマ 5 章 14 節参照。）、彼を完全に補完し、彼のために設計され、永遠に彼と一つになるように運命づけられているのです（マタイ 9 章 15 節, マタイ 25 章 1 節～； マルコ 2 章 19 節; ルカ 5 章 34 節;ヨハネ 3 章 29 節; 第二コリント 11 章 2-3 節; エペソ 1 章 22-23 節,5 章 22-33 節; 黙示録 19 章 7-14 節,21 章 2-4 節, 21 章 9 節　次も参照のこと:22 章 17 節, ローマ 7 章 1-6 節参照）:

> わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、神の真実の言葉である」。（黙示録 19 章 7-9 節）

(v.) **出現：** 私たちは今、キリストと教会の奥義について知りましたが、私たちがどうなるかはまだ完全に明らかにされていません（第一ヨハネ 3 章節）。なぜなら、来るべき栄光は経験するまで完全に理解することはできないからです。したがって、この偉大な奥義の最終的かつ完全な体験的顕現は将来のことであり、キリストの再臨において、世に完全に明らかにされる日がやってくるのです（ルカ 17 章 30 節、第一コリント 1 章 7 節; 第二テサロニケ 1 章 7 節; 第一ペテロ 1 章 7 節, 1 章 13 節, 4 章 13 節, 黙示録 1 章 1 節）、そして私たちキリストの花嫁は、キリストと共にその姿を現すのです（ローマ 8 章 19 節; ローマ 16 章 25-26 節; ガラテヤ 3 章 23 節; エペソ 3 章 5-6 節参照）[36]。

これらのことは、来るべきことについての神よりの示唆はあったものの、十字架以前には隠されていた大いなる奥義でした。これによってサタンは完全に驚かされ、神に栄光が帰され、悪魔は狼狽することになりました。（参照：箴言 25 章 2 節; マタイ 13 章

[36] このように艱難期と再臨の出来事は、イエス・キリストの「黙示」（ギリシャ語 でアポカリプス Ἀπ ο κάλ υ φ ι ς）、あるいは「出現」を構成しています（黙示録 1 章 1 節）。

11 節; マルコ 4 章 11 節;ルカ 8 章 10 節)。人となられた神であるキリストが、私たちの罪のために地上に来て死なれたことが奥義であり(コロサイ 2 章 1-4 節; 1 テモテ 3 章 16 節)、キリストがそのために死なれた神の体、神の花嫁である教会のこの時代の奇跡的完成は、この奥義(エペソ 1 章 23 節)の裏面であり、キリストとその教会は一体であるゆえに、この時代には教会もまた奇跡的な形で完成するのです。

創世記の 5 日目と 6 日目の対型＜antitype:対応するもの、あるいは来るべきものの予告的影-ウェブスター＞として、教会の時代は、新しく再生された地球の再充填を反映しています。その前の創世記の四日間は、5 日目 6 日目の神による被造物の生息環境を整えるものであり、最後にはアダムとエバという人類の創造がなされたように、教会の時代＜五千年紀、六千年紀＞は、異邦人の時代＜一千年紀、二千年紀＞に植えられた信仰の種がユダヤ人の時代＜三千年紀、四千年紀＞に芽生えた豊かな収穫の到来を見ることになったのです。大洪水の時、ノア一人(他七人)がこの種を生かし(第一ペテロ 3 章 20 節)、ユダヤ時代の信者たちは、種が成長するにつれ、その信仰の中核を構成することになりました(詩篇 80 篇 8-16 節; イザヤ 5 章 2 節; エレミヤ 2 章 21 節; エゼキエル 17 章; ホセア 10 章 1 節; ヨハネ 15 章 1 節参照)。しかし、創世記の五日目と六日目に、最初の四日間によって造られた好環境(創世記の型では肉体の生命に必要なあらゆるすべてのもの)が整えられた後になって、生命あるものが造られて世界が満たされたように、人類史の対型の教会時代である今、必要条件が満たされ、それら植えられたものが全世界における救いの豊かな「百倍の」収穫がなされ(ルカ 10 章 2 節)、約束の種であり、イスラエルの枝であるイエス・キリストの出現と勝利の後に、キリストの体が完全に満たされるのです。教会時代はまさに、教会の完成に向けて「時の満ちる」過程にあるのです(エペソ 1 章 9-10 節)。そして、創世記の最後の一組の二日＜五日目と六日目＞が、男と彼を補う女の創造で頂点に達しているように、歴史の最後の一組の二日間＜二千年の期間＞は、人の子の二度の来臨で始まりと終わりがくくられ、彼の死から始まって完成に至らせた花嫁は彼のもとに迎えられるのです。なぜなら、この時代においてこそ、キリストとその教会の奥義が明らかにされ、成就されつつあるからです。悪魔とその天使の離反によって生じた神の家族の欠損は、キリストとその教会によってほぼ補充されるところです。十字架とその異邦人への福音の伝播の前には不可能と思われた偉業が、この時代の終わりには完全に成就されようとしているのです。このような事実が達成されている今に及んでも、この世の支配者に目を奪われているすべての人々にとっては隠された奥義であり、彼らには隠れているのです。ただイエス・キリストの富にあずかる特権を持っているすべての人々には不可欠で祝福された真理なのです:

わたし[パウロ]は、神の言[の真理]を告げひろめる<英文では「dispensing ディスペンス」>務を、あなたがたのために神から与えられているが、そのために教会に奉仕する者になっているのである。その言(ギリシャ語で「logos ロゴス」)の奥義は、[過去の]代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒たち(つまり信者ら)に明らかにされたのである。神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この<栄光の>奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望み(すなわち復活と報い)である。(コロサイ 1 章 25-27 節)

第 7 日： 前節で述べたように、創世記の第 7 の休息日と、イエス・キリストの完全な支配の下での普遍的な平和と安息の時代である至福千年(イザヤ 9 章 6-7 節)は、互いに鏡像であるだけでなく、順番からどちらも第七番目です。究極の位置、つまり王冠のような最終的な完成を意味し、それぞれの場合において、神が成し遂げたこと(再創造と置き換えの両方において)が完全に完璧であり、これ以上何もすることがないことを示しています [37]。この二つの中での重要な違いは私たちが観察していたものと同じです。すなわち、創世記の日では、地球の再建と補充である予型であるのに対し、至福千年の日の場合、教会の形成と完成(すなわち、サタンの反逆によって減少した神の家族の再建と補充)という対型となっているということです。ですから、創世記の 7 日目に神が地の再創造の働きを完全に成し遂げたために終えたのに対し、それに類似する至福千年の 7 日目には、神はキリストの教会の体を満たす働きを終えます(教会は、数が満たされ、完全に入れ替えられ、復活して永遠にキリストと共にあることになります)。しかし、人類の歴史が始まったエデンのように、「生めよ、増えよ」という命令によって、神が満ち足りたものをさらに満ち足りたものにすることが神の御心であることが明らかになったときのように(創世記 1 章 22 節,1章 28 節) 至福千年では、教会に加えて新しい大勢の信者が召されて神の家族の一員となり、神が働かれるところでは、損失(この場合は悪魔とその追随者の損失)には代替があるだけでなく、満ち溢れるという原則が再び実現します(ローマ 5 章 20-21 節)。

創世記の 7 日目が、神が地球を再創造するために行ったすべてのことが「良かった」(創世記 1 章 31 節)ということを示すものであったように、至福千年は、神が(神の油注がれた御子を通して)支配する世界だけが「良かった」とされうることを示すことになりま

[37] 聖書における「7」という数には、このような完成と充足という意味が頻繁に含まれています(詩篇 12 篇 6 節,119 篇 164 節; 箴言 6 章 16 節, 9 章 1 節参照)。さらなる参考文献と考察については、J.J. Davis, Biblical Numerology (Grand Rapids 1968) 116ff.

す。 創世記 1 章の地球は、サタンの反乱に対する神の裁きの後、生命に不利な要素の分離と生命に不可欠な要素の置き換えと満たしによって、人間の生命と生活に適さないすべての要素が徹底的に除去され、暗黒と荒廃の状態から徐々に取り戻されていきます（本研究の第 1 部を参照）。 これと同様に、イエス・キリストの完全な支配下にある至福千年は、最も悪質な悪の源（悪魔とその天使、および彼らが推進する悪の世界システム黙示録 20 章1−3節）[38]、サタンとその従者たちが人間生活への干渉から取り除かれることにより、また、イエス・キリストの完璧な統治の元で祝福と豊かさをもたらすために必要なすべてのものの供給により、世界に「良きもの」を回復させます。[39]世界が神の子の直接の支配下に置かれ、またサタンとその従者が人間の人生への干渉から除かれて初めて（詩篇 2、黙示録 19 章 6 節）、地上は再び「良い」ものとなるのです。悪魔の除去とキリストの再臨というこの二つの重要な要素なしには、地上の楽園はあり得ないことを信者は理解する必要があります [40]。

創世記 2 章 1-2 節では、神が地を回復し、その被造物を入れ替えるという目的をすべて達成したとき、神は 7 日目を祝福し、「これを聖なるものとした」（＝聖別した）＜創世記 2 章 3 節＞とあります。このように 7 日目を特別に「他とは別にする」（ヘブル語とギリシャ語でそれぞれ「聖」を意味する語源「カダーチ *qadash*, קדש」；「ハギアゾ *hagiazo*, ἁγιάζω」）の本質的な意味）することで、神の聖さ、誠実さ、善良さを記念する特別な日としました。 神は、多くの天使たちの反逆に直面しても、その聖性を損なうことなく、正義に基づいて行動し、地上を裁かれました。そうすることで、神の正しい慈悲の扉が開かれたのです。 宇宙に光を取り戻し、地球に居住可能な状態を回復することで、神は被造物の不誠実さに直面する中で、ご自身の誠実さを示され、地球上に再び生命が存在するために必要な条件をもたらし、全体性（聖書の「平和」）を回復されました。 地球上の植物や動物の生命を入れ替えることで（また、堕天使の和解や人類との入れ替えによって、神の家族に欠けているものを補う条件を整えることで）、神は堕落前の宇宙を「良いもの」にされ、被造物に対する神の特別で偉大な愛と、神の恵みの無限で計り知れない御性質を示されました。

---

[38] このシリーズの前回の研究をご覧ください：サタンの反乱 第 4 部：サタンの世界システム：過去、現在、未来

[39] 千年王国がもたらす祝福の具体的な内容については、以下をご覧ください。キリストの完全な統治については、詩篇 2 篇、45 篇、72 篇、110 篇、イザヤ書 9 章、11 章、24 章、40-42 章、54 章、60-66 章、ゼカリヤ書 6 章、9 章、13 章、14 章に説かれています。天の御国が（祝福と信者で）豊かに満たされることについては、からし種のたとえ（マタイ 13 章 31-32 節; マルコ 4 章 30-32 節; ルカ 13 章 18-19 節; ダニエル 4 章にある木も参照）と酵母のたとえ（マタイ 13 章 33 節; ルカ 13 章 20-21 節）、またイザヤ 9 章 6-7 節とダニエル 2 章 35 節も参照。

[40] サタンが支配する現在の宇宙の本質的な悪と、人の力によってそれを改革しようとすることの全くの無益さについては、本シリーズの第 4 部で詳しく述べています。

同様に、至福千年では、神の子の完全な支配を通して、神が地上を直接支配し、人間も最後のアダムであるイエス・キリストの人となりを通して、最初のアダムによって失われたものを取り戻すことになります。 現在の天と地が火によって破壊され、新しい天と地に置き換わるまでは、罪がなくなることはありませんが(イザヤ 65 章 17 節, 66 章 22 節; 第二ペテロ 3 章 7 節, 3 章 10-13 節;黙示録 21 章 1 節)、至福千年は、刈り取りと清めで始まり、そして終わりを迎える期間となります(エゼキエル 20 章 34-38 節、ゼカリヤ 13 章 8-9 節; マタイ 3 章 10-12 節; 25 章 31-46 節; ルカ 3 章 9-17 節; 第二テサロニケ 1 章 7-8 節)。 創世記の第七の日のように、それは主によって聖別された時であり、神の子ご自身によって執行される真の正義と正しさの世界を示します(詩篇 2 篇、黙示録 19 章 11 節、第二ペテロ 3 章 13 節参照)。 申命記 5 章 15 節によると、安息日の主な目的は、イスラエルが神の強大な力によってエジプトから解放されたことを思い出すことでした。 安息日は、召使いや動物など、頼ることのできない者も安息を得ることができるように、安息の日とされました(申命記 5 章 14 節)。それと同じように、至福千年は、その直前の悪魔の支配の大艱難において、そんなにも大変で恐ろしかった経験から世界を神が解放されたことを思い出す時であり(黙示録 20 章 1-3 節)、キリストの完全な支配による休息と祝福を享受する時、神が人類史上最悪の時代においてなさった偉大な解放を祝う時でもあります。

> 主なる神の霊がわたし(メシア)に臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年(至福千年)とわれわれの神の報復の日(再臨)とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め、シオンの中の悲しむ者に喜びを与え、灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与えさせるためである。(イザヤ 61 章 1-3 節前半)

この至福千年の豊かな環境における「善」の回復の主要な部分は、アブラハム、イサク、ヤコブ、ダビデ、そしてユダヤ人国家全体に対する神の約束がすべて成就することです。至福千年では、旧約聖書のすべての契約が完全に成就し、全世界のユダヤ人が、ダビデの子である主イエス・キリストによって、約束された国境を持つイスラエルの地に連れ戻され、その首都エルサレムから全世界を統轄することになります(以下の IV.2 項と本シリーズの第 1 部を参照)。

教会(過去三つの二千紀、または三時代の全信者)は、キリストの再臨の直前に復活して、キリストと共に戻ってきます(1 コリント 15 章 51-52 節; 第一テサロニケ 4 章 13-18

節)[41]。これが「小羊の婚宴」です。(黙示録 19 章 7 節) このようにして、キリストの再臨で教会は完成しますが、しかしキリストが花嫁を連れて再臨された後に、キリストに帰る人が大勢いることでしょう。これらの人々は、「小羊の婚宴に招かれた」人々です(黙示録 19 章 9 節;すなわち、第一コリント 15 章 24 節に暗示されている人々と第一コリント 15 章 23 節の教会について参照してください)。 まず第一に、至福千年の新しい信者はユダヤ人であり、彼らは再臨するメシアの現実に直面したとき、神に立ち返ります(エレミヤ 31 章 31-34 節; ヨエル 2 章 30-32 節; ゼカリヤ 12 章 10 節; ローマ 11 章 12 節; 黙示録 1 章 7 節)。大艱難期の出来事によって壊滅的な打撃を受けた人類が、キリストの世界的な王国の楽園状態の中で加速度的に拡大し、ユダヤ人だけでなく、異邦人を含む多くの人々が信じるようになります(イザヤ 9 章 6-7 節, 49 章 19-21 節, 54 章 1-3 節; ダニエル 2 章 35 節; ゼカリヤ 2 章 4 節,10 章 10 節; マタイ 13 章 31-33 節; マルコ 4 章 30-32 節, ルカ 13 章 18-21 節)。これらのユダヤ人と異邦人は、キリストの再臨後に主に立ち返る人たちで、充満し、完成に至る、キリストの再臨後の教会です。つまり、彼らは、悪魔とその従者たちを厳密に一対一で置き換えるのに必要な数以上に、キリストに与えられているのです(それは第二降臨における教会の復活によって達成されるからです)。 これらの第二降臨＜すなわち再臨＞後の信者は、(キリストと教会が結ばれ、至福千年の記念すべき時を通じての祝賀である:黙示録 19 章 9 節)「小羊の婚宴に招かれ」、キリストの千年王国支配の世界的な祝福と恵みを分かち合い、享受します。このように、至福千年の信者は、キリストのための追加の祝福、伝統的には長男の権利である「二倍の分け前」の祝福を受けるのです。(申命記 21 章 15-17 節、参照:創世記 48 章 22 節, サムエル上 1 章 5 節, 列王紀下 2 章 9 節, ヨブ 42 章 10 節, イザヤ 61章, 詩篇 89 篇 27 節, コロサイ 1 章 18 節, ヘブル 1 章 6 節参照)、「すべての被造物の中で最初に生まれた者」(コロサイ1 章 15 節)として非常にふさわしく、それによって彼は本当に「多くの兄弟の中で最初に生まれた者」(ローマ 8 章 29 節)となるのです[42]。

まとめ:7 つの創世記の日と 7 つの千年期の日の比較

---

[41] 復活については、ペテロ・シリーズ＃20 と＃27 をご覧ください。

[42] 千年王国における劇的で前例のない地上の再増殖（黙示録 20 章 8 節後半参照）を考えると、また、第一の復活の教会（黙示録 20 章 5-6 節参照）が、この研究とシリーズで明らかにしてきたように、悪魔に従う者たちと一対一で入れ替わるものであることを考えると、キリストの二倍の分け前として与えられる千年王国の信者の数が、教会＜を形成する人＞の数となると思われます（人口増加の観点からは、千年間の完全な環境は十分すぎる時間です)。この場合、悪魔の天使は、これまで見てきたように、元の選ばれた天使＜堕落しなかった天使達＞の総数の三分の一ですから、教会そのものにさらに補足を加えると、永遠の状態の開始時に＜つまり千年王国の最後には＞、選ばれた天使の数と、救われ復活した人間の数は正確に等しくなります（三分の一に三分の一を加えた数＜つまり二倍に増えた人の数＞は、聖なる天使の三分の二に等しくなります)。

創世記の日	千年紀の日
1. 分離:光と闇(一般)	分離:真実と嘘
2. 分離:水と水の分離により大気が生じる	分離:悪魔の強制からの自由
3. 分離:水から乾いた土地が分離	分離:異教世界から聖なる民分離
満たし:植物で満たされる	満たし:ぶどうの木のイスラエル
4. 満たし:天体を司る	満たし:基準となる国、イスラエル
分離:光と闇の分離(具体的に)	分離: 正と誤の分離
5. 満たし:魚と鳥	満たし:教会の伝道基盤
6. 満たし:地上の動物と家畜	満たし:教会の伝道の拡大
完成:エバによる最初のアダム	完成:教会による最後のアダム
7. 休息:再創造された世界への祝福	休息:再生された世界への祝福

上の図に示すように、二組の日順は、1-2 日、3-4 日、5-6 日(いずれも 7 日目を除く)の 3 つの組に細分化されています。創世記の最初の 6 日間と最初の 6 千年紀の 6 日間は、組としてでも単独でも、究極の目標に向かって、分離(肉体的にも霊的にも良いものと悪いもの)と満たし(物質世界と神の家族をそれぞれ補充する)が本質的に進行していることを示しています: 創世記の場合は、人類が地球に住めるようになり、至福千年の場合は、人の子が戻ってくるときに、人の子のために神の家族が満員になることです。いずれの場合も、7 日目は最高の栄光であり、最初のアダムと最後のアダムがそれぞれ支配した楽園状態での休息と祝福の記念の時です。このように、創世記の 7 つの再創造の日は、神の民が悪魔の世界から徐々に分離され、サタンとその追随者に代わって、神の子イエス・キリストを信じることによって、徐々に数を増やして神のリストに入るという、神の人類史の計画のモデルとなっています(出エジプト 32 章 32-33 節, 詩篇 69 篇 28 節; ダニエル 12 章 1 節; ピリピ 4 章 3 節; 黙示録 3 章 5 節, 13 章 8 節, 17 章 8 節, 20 章 12-15 節, 21 章 27 節)。

神は元々、瞬く間に全宇宙を創造されました(創世記 1 章 1 節、本連載第 2 回参照)。ですから、神が単に地球を居住可能な状態に戻すためだけに、比較的長い 6 日間の文字通りの日を使ったのは(その後、7 日目の記念日の休息があります)、＜日数が＞必要だったためではないことは確かです(神は全能であり、空間や時間に左右されることはありません)[43]。それ故、私たちは神の7日間にかけての地球の再創造は意味がない訳でもなく、間違いでもないと結論付けなければいけません。実際、上述した

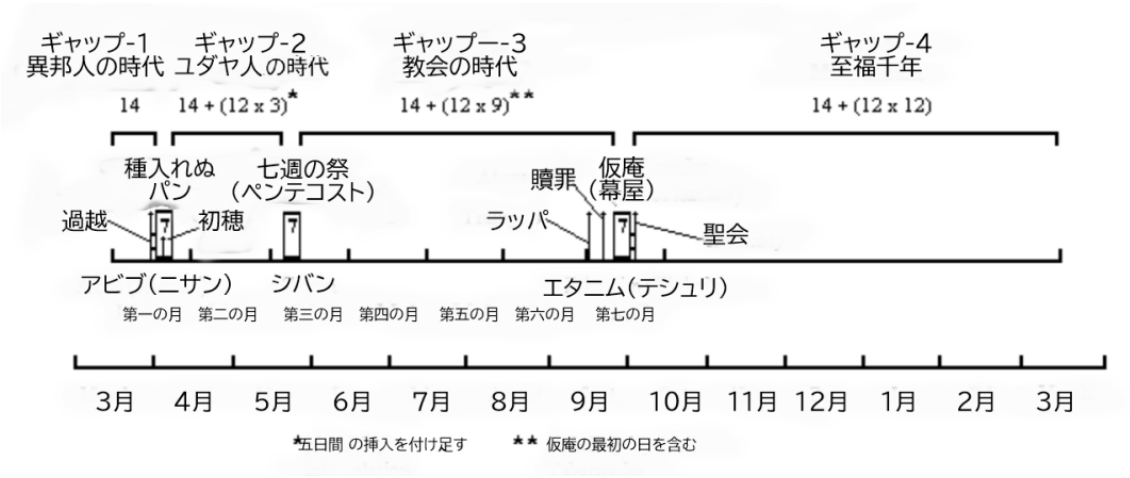
[43] 聖書の基礎知識パート 1 をご覧ください: 神学:神の研究」をご覧ください。

ように、創世記の 7 日間は大きな象徴的意味を持っています。それは、イエス・キリストのために植え（異邦人時代）、育て（ユダヤ人時代）、収穫する（教会時代）という、神の人類史の計画の青写真を示しているからです（至福千年では 2 回目の記念すべき大収穫があります）。神が結婚を規定したように（その制度は、キリストと教会の結婚という歴史の包括的な目的のために、人類に継続的で同期的な例えを提供してくれています）、神が 7 日間で地球を再創造し、その結果として私たちの生活を支配する週 7 日のパターンを通して、神は人類の歴史における本質的な目的であるキリストのための教会の召しを思い出し、考えるための継続的通時的＜＝時間の経過とともに変化する現象＞記念を私たちに与えました。 毎日と毎週という、私たちの生活を構成する基本的な時間の単位は、完璧で必然的な神の時代の計画を思い出させてくれます。 なぜなら、毎日と毎週は、イエス・キリストというお方とその働きを中心とした教会の進展的で体系的な形成という、人間の歴史における神の御計画の、神によって構築された例えの役割を果たすからです。

c. ユダヤの祭儀暦

神が人類の歴史を七つの千年期からなる時代に構築したことの第三の証拠は、神がモーセの律法の中でイスラエルに定めた祭りのパターンに見出すことができます。ユダヤ教の儀式暦は、人間の手によって作られたものではなく、神ご自身が仲介者であるモーセを通してイスラエルに与えたものです（ガラテヤ 3 章 19 節）。したがって、創世記の七日間が人類の歴史全体に対する神の青写真であるように、モーセの律法の定める日付と祭りの一年を通しての行事が、神の歴史的イベントの順序を予示していることは驚くべきことではありません。ユダヤ教の儀式暦（七ヶ月目から始まるイスラエルの市民暦とは区別され、ほぼ我々＜米国＞の会計年度と同じ）は、アビブ（またはニッサン）の月、我々の暦では三月から四月にかけて始まります。この儀式暦は、祭事だけでなく、祭事と祭事の間にある大きな間隔が、人類史における神の計画の全体的な進展を反映します。ユダヤ暦は、基本的に三つの祭りの集まりで区切られた四つの「ギャップ（間隙）」（祭と祭りとの間の期間）で構成されており、祭りとギャップの両方が、イエス・キリストとその教会の召しにおける神の壮大な計画について具体的な情報を与えています [44]。

[44] 祭りの象徴については、特に M.アンガー（Unger's Commentary on the Old Testament, v.2, 173-177）参照。NIV スタディ・バイブル Kenneth Barker, pp.176-177 には、祝祭に関する重要な情報を記した非常に役立つ表があります。



ユダヤ暦 （図表）

I. ギャップ 1:異邦人の時代: 14 日間:アビブ 1 日からアビブ 14 日まで。ユダヤの宗教的な一年が過越の日に始まるのではなく、過越が第一月の二週目の後に行われることは重要です。この 14 日間という期間は、二つの千年期間を象徴しているのです。これらは、週の基本的な期間を年単位から見るのと、週単位で「日」を見るのと同様の象徴的機能を果たしています（参照:イザヤ 63 章 4 節。「日」と「年」は共に千年期間を指しています）。つまり、異邦人の時代を表すこの最初の 14 日間＜二週＞は、創世記の一週の一日が千年を表すように、二つの千年期間＜2 千年間＞の一組を表しているのです。

1) 過越の祭り（出エジプト 12 章 1-14 節、レビ記 23 章 5 節、民数記 9 章 1-14 節、28 章 16 節、申命 16 章 1-7 節）: 続く三つのギャップの前に、そのギャップに象徴される時代の始まりがあり、同時に象徴する祭り（または祭り群）が行われます。異邦人の時代を表す最初の二週間の前には、祭りはありません。その時代は、これまで見てきたように、信仰を引き継ぐ系統を守ることに主眼が置かれており、キリストの体を満たすための十分な数の人を召すことにではなかったからです。しかし、異邦人の時代に続く次の三つの時代は、いずれも神の家族が数の面で大きく成長することになり、モーセに与えられた祭りの暦（こよみ）は、それらを表す一年の中のそれぞれのギャップに、適切な象徴としての始まりを記念する祭を先行して執り行うようになっています。つまり、過越の祭りはユダヤ人の時代を象徴するものであると同時に、ユダヤ人の時代を象徴する暦のギャップ期間に先立つものでもあるのです。この二重の象徴の本質的な理由は（以下で詳しく説明します）、祭り群が象徴する時代の全体的な比喩を提供する一方で、＜祭りと祭りの間の＞ギャップ期間は、1）創世記の一週間が＜七つの＞千年期間の象徴を一年を通しての象徴的祭儀と特に関連付け（それぞれのギャップ期間に七日間の二組＜二週間＞が使われ、それぞれ＜の七日間＞が一千年期間を表す）、

2)また重要なことに、三つの満たしの時代ごとに神の家族に入る信者の比率を(最後の三組＜満たしの期間としての三つ期間＞に追加の 12 日の組を使い:後述を参照)示しているからです。イスラエルの時代を象徴する祭りの集まりが、メシアの犠牲を象徴するものであることは、重要かつ適切なことです。厳密には、次に取り上げる「種入れぬパンの祭り」が、イスラエルの時代を象徴しています。ユダヤ教の儀式暦の最初の祭日である過越の祭りは、救い主の死を豊かに象徴する祭りとしてよく知られています。生贄の血はキリストの血の象徴であり、過越の子羊、骨が折られない、しみや傷のない初子の子羊は、神の完全な初子の子羊＜イエス＞の象徴です(詩篇 34 章 20 節、ヨハネ 1 章 36節、19 章 36 節、1 ペテロ 1 章 19 節、黙示録 5 章 6 節)。十字架の形をした戸柱に血を振りかけることは、彼が私たちのために死んでくださった、その死を象徴し、この血の印によって死の天使から解放されることは、彼の犠牲によって死から命へと解放されることを象徴しています(第一コリント5章7節)。

実際、過越の祭りほど、イエス・キリストの死を象徴する祭りはないでしょう。特に、十字架刑の象徴であり、金曜日に行われる過越の祭りに続いて、日曜日には、神が復活させるすべての人の初穂として、主イエスが復活することを示す初穂の祭りが行われるという事実を上記の議論に加えて考えると、そのことがよくわかります(下記参照)。したがって、過越の祭りの象徴は、翌日から始まる七日間の種入れぬパンの祭り(初穂の祭りはその 2 日目、アビブの月の 16 日)に引き継がれます。そして、イスラエルの時代を代表する種入れぬパンの祭りと同様に、過越の祭りもユダヤの時代にとって重要なシンボルを持っています。それは、メシアがこの世のために死んだことを示すだけでなく、その尊い犠牲に対する信仰の生き方を明確に示すものだからです。ユダヤの時代を象徴する一週間の祭りの前日に行われる過越の祭は、イスラエルが来たるべきメシアとその犠牲への期待、希望、信仰によって成り立っていることを示すものです。第二に、過越の祭りがどのように行われるかは、この犠牲によって神の救いの申し出に応える信仰生活を物語っています。犠牲となった子羊を食べることは、信仰の象徴であり(ヨハネ 6 章 35-58 節)、完全に食します(差し控えることのない信仰の行為)。苦菜と一緒に、種を入れないパンを食し、そして急いで出発する準備をして立ち上がる。これらの要素は、確かにイスラエルのエジプトからの解放を語っていますが [45]、そのイスラエルのこの世での経験は、イエス・キリストに救いを求めて神に立ち返った古今東西のすべての人々の霊的な経験を象徴しているのです: 奴隷制と厳しい支配のエジプトは悪魔の世界を象徴し、苦菜はこの世が提供するすべてのものの満足できない性質を暗示しています。急いで焼いたパンと準備の姿勢は、神の贈り物を完全かつ急いで受け入れる必要があることを物語っています。

[45] M.F.アンガーの『聖書辞典』p.362 のこのトピックに関する重要な論考を参照。

2) 種なしパンの祭り（出エジプト 12 章 15-20 節、13 章 3-10 節、23 章 15 節、34 章 18 節、レビ記 23 章 6-8 節、民数記 28 章 17-25 節、申命記 16 章 3-8 節、16 章 16 節）: 種入れぬパンの祭りは、七日間続く三つの祭りのうちの最初の祭りで、七週の祭りと幕屋＜仮庵＞の祭りがそれぞれ教会時代と千年王国を表すように、イスラエルの時代を表しています。今まで創世記の一週に関して学んできたように、またダニエルの七十週（ダニエル9章 20–27 節）においてもそうですが、儀式が執り行われる週は、神の啓示の特徴として、基本的で象徴的な単位として用いられています。また、安息の年（出エジプト 23 章 10-11 節、レビ 25 章 1-7 節）、七週＜七×週（7）＝49＞年の最後の週の七年目に続くヨベルの年＜すなわち 50 年目＞（レビ 25 章 8-55 節、27 章 17-24 節、民数記 36 章 4 節）が定められていることにも見てとれます。七日間にわたる三つの祭りは、それぞれの時代を象徴していますが、その三つの祭りのうち、最初の祭りである「種入れぬパンの祭り」では、種を入れずに作られたパンが象徴しているとよく言われている二つの主要な点は次のとおりです： 1）パン種は＜聖書においては＞通常、汚れと罪を表すので（マタイ16章6–12 節、マルコ8章 15 節、ルカ 12 章 1 節、1 コリント 5 章 6–9 節、ガラテヤ 5 章 9 節）、混じりけのないパンは罪なきメシアの象徴をうまく表しています。したがって、このパンを七日間食べ続けることは、常に主を信じ、悪の汚れから離れ、神の言われる「わたしが聖であるように聖であれ」（レビ 11 章 44-45 節、1 ペテ 1 章 16 節）というイスラエルへの呼びかけです。 2）種入れぬパンはまた、苦難と圧迫を象徴します（すなわち、申命 16 章 3 節の「悩みのパン」）。このパンを祭りの間中食べることは、イスラエルがその歴史を通して求められているように、神に従う生き方は簡単なことではないけれども、絶対に必要な選択である、という事実に注意を促すものです。この世では神に従えば艱難に遭うでしょう、しかし、メシヤをとおして神はこの世に勝ったのです（ヨハネ 16章33節）。

3) 初穂の祭り（レビ 23 章 9-14 節）: 初穂の祭りは、種入れぬパンの祭りの中間＜過越祭の後の最初の安息日の翌日、日曜日＞に行われますが、そのタイミングが非常に重要なのは、この祭りがメシアの復活の日を明示しているからです。実際に私たちの主は、金曜日の過越祭＜十字架での死＞の後の日曜日に復活されました。ですから、初穂の祭りの象徴がキリストの復活を意味することは、驚くことではありません。コリント人への手紙第一の中でパウロは、イエスを「私たちの初穂」と二度述べていますが、これはイエスを信じるすべての人の復活に先立つ肉体の復活において、イエスがその初めとなられるという意味です（1 コリント 15 章 20 節と 15 章 23 節）。この祭りの中心となる象徴的儀式、＜初穂の＞大麦の束を＜主に向かって＞揺り動かすという動作は、明らかに復活したキリスト、すなわちキリストの再臨に伴う豊かな収穫の初穂を意味するものです（1 コリント 15 章 35-44 節）[46]。

[46] L.S.チェーファー『組織神学』第 7 巻、153-154 頁参照。

II. ギャップ 2:イスラエルの時代:14 日＋36(12×3)日。第二のギャップはユダヤ人の時代を表すもので、それにはいくつかの数え方があります。アビブの月の 16 日(キリストの復活を象徴する初穂の祭りの日)からシヴァンの月の 6 日-7 日の七週の祭りまで(レビ 23 章 11 節後半と 23 章 15-16 節参照)、あるいは種入れぬパンの祭りが終わってから閏(うるう)5 日間(後述で説明)をそこに加えて同じ日(七週の祭りの日)まで、といった具合にです。いずれの場合も、その期間は 50 日間であり、新約聖書ではこの 50 日目に行われる七週の祭りを、ギリシャ語の「50」に由来する「ペンテコステ」と呼んでいます。ユダヤ教の宗教暦は 30 日周期の太陰暦に基づいているため、太陽暦と調和させるためには、一年におよそ 5 日を追加する必要があります。こうしたことは、モーセの時代の古い慣習を示す記録(聖書など)にはありませんが、その後の慣習のいかんにかかわらず、1) このギャップの期間は(ギャップ後の祭日がペンテコステと呼ばれていたので)50 日と考えられていました。また、2) 6、7 年ごとの閏年に一ヶ月分追加する＜つまり閏年は 13 ヶ月とする＞よりも、毎年、年の初めの月に 5 日間を追加するほうが(特に農業に依存している社会では、季節と暦が大きくずれてしまわないほうが)、都合がよかったのは事実です;[47] そして 3) 初穂の祭りの日のあとに、種入れぬパンの祭りが残り 5 日間続きますが、これはユダヤ暦を太陽暦に合わせるために閏月に追加される 5 日間の日数に合致します。初穂の祭りと七週の祭り(50 日後に行われる完全な収穫祭であり、ユダヤ人の時代の終了を意味する)の間には密接な関係があることも、この解釈を支持する理由になっています。両祭りは収穫祭であり、初穂の祭りはキリストの復活を表し、七週の祭りはキリストの教会の召し(あるいは「収穫」)を象徴しているので、ちょうど七週の祭りはユダヤ時代の終わりを示しているように、初穂の祭りは始まりを象徴しています(このことは前述した 5 日間を理解することでわかります)。この二つの祭りを隔てる 50 日という期間には、もう一つ意味があります。この期間は、七週に一日を加えたものとして計算され(レビ 23 章 15-16 節、申命記 16 章 9 節)[48]、＜七週の週は7を意味するので＞7(七)×7(週)という完全な数に、さらに一つの期間＜一週(7 日間)＞が加えられることを示します。その最後の期間が、ダニエルの＜預言の＞七十週目(ダニエル 9 章 25-27 節)であり、後で述べますが、それは教会時代の終わりの七年間である(教会時代と共有する)艱難時代なのです。

4) 七週の祭りまたはペンテコステ＜日本語聖書では五旬節＞(出エジプト 23 章 16 節、34 章 22 節、レビ 23 章 15-21 節、民数記 28 章 26-31 節 、申命 16 章 9-12 節、

[47] The Interpreter's Dictionary of the Bible, in loc. 祭りは、歴代誌下 30 章に基づいて、アビブ月／ニサン月の後にインターカレーション＜閏月の日数の追加＞が行われた可能性を示唆しています(そうなると、第 2 のギャップ期間に位置することになります)。
[48]アンガー『アンガー旧約聖書注解』v.2、p.173f.を参照。Unger's Commentary on the Old Testament

16 章 16 節): この収穫祭(小麦の収穫)は教会時代を象徴し、キリストの教会が満ち、前例のない数の信者が豊かに収穫されることを予表しています。これと関連する収穫と作物の比喩は聖書の中にたくさんあります。成長する種(マルコ 4 章 26-29 節)、種をまく人(マタイ 13 章、マルコ 4 章、ルカ 8 章)、麦と毒麦のたとえ(マタイ 13 章 24-30 節、37-43 節)はすべて、同じ本質的な類似性を使っています:主を信じ、成長する人々は神の収穫物です(参照:マタイ 7 章 16-20 節、ヨハネ4章 35-38 節、1コリント3章6-8節、15 章 35-44 節、黙示録 14 章 14-16 節)。[49] 教会時代の信者の恵みは、数字の上でも、これまでで最も豊かです:

> あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ四か月[50]あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている(すなわち、応じる人々を神の家族に連れてくること)。まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。(ヨハネ 4 章 35-36 節)(参照:マタイ 9 章 37-38 節、ルカ 10 章 2 節)

教会時代には、数の上では異邦人が優勢ですが、ユダヤ人は、これまで見てきたように、教会の柱であり、今の時代のすべての世代で「恵みの選びによって残された者」として含まれています(ローマ 11 章 5 節)。このユダヤ人と異邦人の二重性は、七週の祭りの儀式において、二頭の雄牛(民数記 28 章 27 節)、二頭の雄羊(レビ 23 章 18 節)、二頭の子羊(レビ 23 章 19 節)、二つのパン(レビ 23 章 17 節)を捧げることによって象徴され、この最後の要素は週の祭り特有のものです。

III. ギャップ 3:教会時代:14 日+108 日(12×9)。7週の祭りが終わってから、仮庵の祭りが始まるまでの期間は、教会の時代を表しています。祭りのサイクルに大きな空白があることは、ユダヤ人の時代が中断されたことを意味します(マタイ 21 章 33-44 節、22 章 1-14 節、マルコ 13 章 10 節、ルカ 20 章 16 節、エペソ 2 章 14-22 節参照。7 週の祭りが終わってから、仮庵の祭りが始まるシヴァン月の 6 日までの日数を集計すると、107 日しかなく見えます。包括的な数え方(7 週の祭りの時間を最初の安息日の翌日の朝から計算するように命じられているため{ユダヤ人の標準的な計算方法では夕方から夕方までとなっています。レビ記 23 章 11、15、16 節})レビ記の「安息日の後の朝」という規定により、週の祭りはシバンの 6 日と 7 日の両方で祝われるようにな

---

[49] 最後に述べた麦と毒麦の場合も、たとえは同じですが(作物は信者を表す)、このたとえは、教会時代の信者ではなく、キリストの千年王国の信者に関係しています。
[50] 四か月は、教会時代(二千年)と千年王国の二つ分の長さの期間(下記参照)を象徴しています。

ったことからもわかるように、締めくくりの日を 1 日ではなく、両方に含めることで、さらに 1 日増えるのです。このギャップの中で、トランペットの祭りと贖罪の日が行われることは重要であり、これらが表す艱難期の時代は、イスラエルと教会の時代が共同で共有する時代であることを示しています(以下でこの問題を考察します)。

5) ラッパ[ロシュ・ハシャナ]の祭り(レビ 23 章 23-25 節、民数記 29 章 1-6 節)。ラッパの祭りは宗教暦では第 7 月の 1 日で、市民暦においてのみ「元旦」となります(上記で言及したように私たちの会計年度と似て宗教暦と 6 ヶ月の差があります)。この祭りの主な象徴であるラッパの音は、警告を象徴しています。この象徴性は、危機の瞬間にラッパを鳴らすことが主要な警報として機能する、多くの聖典の類似点から容易に理解できます(例:民数記 10 章 1-9 節、ヨシュア 6 章 20 節、エレミヤ 4 章 19-21 節、6 章 1 節、ホセア 5 章 8-9 節、アモス 3 章 6 節、ゼパニヤ 1 章 15-17 節、1 コリント 14 章 8 節)。さらに、黙示録 8 章 6～11 章 19 節の 7 つの警告のラッパは、この祭りの主要なシンボルを例示しているだけではなく、その予言的なシンボルの成就です。7 年間の艱難期の第一段階をもたらす、世界に対する神の警告的な裁きを表しているからです。このように、ラッパの祭りは、7 年間の艱難期の始まりを象徴しており、そこで鳴らされる大音響は、迫り来る裁きに対する神の、世界への警告を表しているのです[51]。

6) 贖罪の日(ヨーム・キップール)(レビ 16 章 1-34 節、23 章 26-32 節、民数 29 章 7-11 節): 第七の月の 10 日に行われる贖罪の日は、一般に「大艱難」と呼ばれる艱難時代の後半の始まりを象徴しています(ダニエル 12 章 1 節、マタイ 24 章 21 節、マルコ 13 章 19 節、レビ 7:14)。贖罪の日の犠牲の儀式は、キリストが私たちに代わって効力のある犠牲を捧げたこと、特に、キリストが天に昇り、私たちの罪に対する父の怒りをキリストの血によって宥(なだ)めたことを予表していることは、新約聖書、特にヘブル書において、詳しく説明され、よく知られていることです(ヘブル 9 章 1-28 節、マタイ 27 章 51 節、ヘブル 4 章 14 節、6 章 19-20 節、黙示録 11 章 19 節)。このことは、この祭りの終末論的象徴の観点からすると重要です。贖罪の日は、教会の時代を表すユダヤ暦のギャップ期間終了のわずか3日半前に行われ、ユダヤ人にとってこの日は、来るべき神の大いなる裁きを迎えることを意味します。純粋に歴史的観点から見ると、父なる神がキリストの犠牲を受け入れ、キリストが昇天したことは、ユダヤの時代が中断し、教会の時代が始まった時点となります。しかし、象徴的には、キリストが地球を裁くために再臨する、その戸口までイスラエルを連れてきていることを表しています。この時期は、一方ではモーセとエリヤの働き(マラキ4章 5-6 節、マタイ 11 章 12-14 節、17

[51] この祭りの終末論的な意義は、現代のユダヤ人にも理解されています。ミシュナーによれば、この日に世界は裁かれ、「世界のすべての住民は羊の群れのように主の御前を通り過ぎる」(Rosh-hashanah, 1.2)。

章 3-12 節、黙示録 11 章 3-13 節)、他方では十四万四千人のユダヤ人殉教者があり(黙示録 7:1-8、14:1-5、マタイ 10:5-42)、イスラエルにとって大きな自己省察の時期となります。そして主の再臨が起こり、全世界の信じていなかったユダヤ人らの全面的な悔い改めという頂点に達するのです(ゼカリヤ 12 章 10-14 節、黙示録 1 章 7 節、ヨエル 2 章 30-32 節、マタイ 24 章 30 節)。[52] この文脈において、この日にすべてのイスラエルに命じられた「心を悩ます＜口語訳では「身を悩ます」、新改訳では「自らを戒める」＞ことは最も適切で(レビ 23 章 27 節,29 節,32 節; 民数記 29 章 7 節、すべて KJV で最も明確)、神の結果としての清めは、キリストの再臨における神のイスラエルの赦しを象徴するものとしてふさわしいものです(レビ記 16 章 30 節、イザヤ 4 章 2-6 節、59 章 20-21 節; エレミヤ 31 章 34 節, 50 章 20 節; エゼキエル 20 章 33-38 節, 36 章 24-38 節; ヨエル 2 章 30-32 節; ゼカリヤ 12 章 10 節, 3 章 1 節; マラキ 3 章 2-4 節; ローマ 11 章 26 節を参照)。また、この祭りの時期も非常に重要で、ラッパの祭りの 10 日後、仮庵の祭りの3日半前です(レビ 23 章 32 節: 計算方法については上記 4)を参照)。

ラッパの祝日に続いて贖罪の日に先立つ 8 日間は、艱難時代の前半を表し、神は一連の七つのラッパの審判を通して、地上の住民に悔い改めなければ神の怒りに直面するよう警告されます(黙示録 8 章 6 節-11 章 19 節)。ラッパの音はそれぞれ「一日」または六ヶ月に相当し、さらに追加されているもう一日は、その前に天上で「半時間」沈黙した期間、つまり艱難が実際に始まるまでの六ヶ月間の悔い改めのための猶予期間を予表しています(黙示録 8 章 1-2 節)。贖罪の日と仮庵の祭りの間の四日間は、艱難時代の後半、すなわち「大艱難」と呼ばれる期間を表し、その後にキリストが再臨して千年王国を確立します(ダニエル 7 章 25 節,12 章 7 節; 黙示録 11 章 2 節, 黙示録 12 章 14 節,13 章 5 節を参照)。この四日というのは預言的な解釈からすると、実際的には三日半を意味しています。なぜなら、最後の半日(ユダヤ暦では朝から夕まで)は、キリストが世界を裁くために再臨する直前の、日が暗くなる「特異な日」を表しているからです(ゼカリヤ 14 章 6-7 節; イザヤ 13 章 9-13 節, 34 章 4 節, 60 章 1-2 節; エゼキエル 32 章 7-10 節; ヨエル 2 章 2 節, 2 章 10 節, 2 章 31 節, 3 章 15 節; ゼパニヤ 1 章 15-18 節; マタイ 24 章 29 節; マルコ 13 章 24-25 節; 使徒行伝 2 章 17-21 節; 黙示録 6 章 12-13 節, 16 章 10 節)[53] 。贖罪の祭りの日の前後で、実際のそれぞれ六ヶ月の期間を年の数によって表現しているのは、大艱難時代の世界の苦難が激化することを象徴的に示すものです。最後に、ラッパの祭りの日と贖罪の日の

[52] モーセとエリヤの働きと 144,000 人のユダヤ人の証人の働きは、艱難の前半にユダヤ人の間にすでに大きなリバイバルをもたらすことになりますが、イスラエルの大多数はキリストの再臨までそのような影響を受けません (黙示録 12 章 6 節, 12 章 13-17 節参照)。
[53] 裁きの象徴としての暗闇については、本シリーズ第 2 部の II.2.d 節を参照。

両方がイスラエルにとって特別な意味を持ちながら、それらが教会時代のギャップ期間に起こるという事実は、預言の他の箇所から分かっていること、すなわち、艱難と呼ばれる七年間の最後の恐ろしい期間において、キリストの体である教会にユダヤ人のリーダーシップが再び確立されるということを思い起こさせてくれます。

7) 仮庵・幕屋(スコット)の祭り(出エジプト 23 章 16 節, 34 章 22 節, レビ 23 章 33-43 節, 民数記 29 章 12-34 節、申命記 16 章 13-16 節): 贖罪の日の後の三日半(大艱難期を表す)、さらにプラス半日(メシアの再臨に先立つ超自然的な暗闇の期間を表す)を経て、第七の月の 15 日に、仮庵の祭りとして知られる七日間の祝祭が行われます。この祭りは、キリストの再臨の直後に始まる千年王国支配を象徴しています。また、「収穫(集合の意味もあり)」を祝う祭り(出エジプト 23 章 16 節)としても知られる仮庵の祭りは、メシアの管理の下でユダヤ人が自分の土地に回復することを予表し、それは作物を倉に集めるという行為に象徴されます(イザヤ 66 章 20 節, イザヤ 11 章 11-16 節, 14 章 2 節, 43 章 5-6 節, 49 章 19-26 節, 54 章 7 節, 60 章 4 節, 9 節、エレミヤ 31 章 10 節, 32 章 37 節; ゼカリヤ 8 章 23 節; マタイ 23 章 37 節; ルカ 13 章 34 節)。このイスラエルの集合は、祭りの初日の聖会によって記念されます(レビ 23 章 35 節; 民数記 29 章 12 節)。この祭りの喜びの雰囲気は(申命 16 章 14-15 節)、贖罪の日のそれとは対照的で、(贖罪の日が予表していた裁きに比べれば、この祝祭は)イスラエルに対する神の約束の成就を象徴する祝祭として催されます。この祭りの参加者が祭りの期間七日間泊まる仮庵や幕屋は、ユダヤ人が住み慣れたエジプトを出て、荒野で仮の住居を建てて生活したこと、そしてついに約束の地に入った時のこと(ネヘミヤ 8 章 17 節後半; 詩篇 78 篇 55 節[NIV ではない]参照)、また、バビロン捕囚後の帰還(ネヘミヤ 8 章 17 節前半)(神がメシアの再臨の際に神の民を世界から呼び戻してイスラエルの地に再定住させることを象徴していること:レビ記 23 章 43 節; ホセア 12 章 9 節; ゼカリヤ 14 章 16-19 節参照)を思い起こさせます。また約束の地に入った最初の時(ネヘミヤ 8 章 17 節後半; 詩篇 78 篇 55 節(NIV ではない)参照)、バビロン捕囚後の帰還の時(ネヘミヤ 8 章 17 節前半)もそうです。

8) 聖会 (レビ記 23 章 36 節;民数記 29 章 35-38 節も参照): 最後に、厳密には仮庵の祭りの一部ではありませんが、仮庵の祭りの直後に、「8 日目」の聖なる集会があります。このユダヤ教の儀式暦の最後の行事は、千年王国を予表する祭りの終わりに行われます。したがって、人類の歴史の七つの千年期の終わりに起ることを象徴しています。これは「閉会の集い」(ヘブル語עצרת, 'atsareth')であり、最終を意味するだけではなく、神が永遠に人類と共にいてくださるようになることを象徴しています(列王紀上 8 章 2 節には、この祭りの時にソロモンの神殿を奉献し、結果として奉献したばかりの神殿が神の栄光で満たされるという記述があります: 列王紀上 8 章 10-11 節)。したがっ

て、聖会は、歴史の終わりに現在の天地が去り、新しいエルサレムが天から降りてきて、神と神を愛するすべての人々の永遠の住まいとなるときにもたらされる永遠の状態、父の王国を表しています(黙示録 21 章,22 章)[54]。

IV.ギャップ 4:千年王国:＜聖なる集会から一年の最後(過ぎ越しの祭り前日)まで＞14 日＋144(12×12)日: ユダヤ教の儀式暦の最後の行事である仮庵の祭りの終わりに行われる聖なる集会に続いて、メシアの千年王国を予表する、最後にして最長のギャップがあります。このギャップが七番目の月に始まるのは偶然ではなく、人類史上最後の七番目の千年王国を象徴する(そしてその情報を提供する)ためと思われます。

一週間にわたり行われる三つの祭りの象徴性: 前述のとおり、一週間の祭り＜七つの祭りの中で、7 日間行われる種入れぬパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭りの三つの祭りのこと＞はそれぞれユダヤ時代、教会時代、千年王国を象徴しています[55]。この三つはユダヤの儀式暦の中で、それらが象徴する時代と同じ順序で配置されています。さらに、三つの祝祭の直後には、祝祭が象徴するのと同じ時代を象徴するギャップ期間があります。一週間行われる三つの祭りは、「主の定めの祭であって、あなたがたがふれ示して聖会とし、主に火祭を…ささげなければならない」 (レビ記 23 章 37 節)とされているものです。このレビ記の記述は、一週間の三つの祭りの歴史的象徴に当てはめると、悪魔の影響下にある人達が、それについて何を考え何を言おうとも、人類の歴史のこれらの部分は、神の呼びかけを聞く人々を「集める」ための、いわば神の「祭り」であり、神の神聖な集会、すなわちイエス・キリストの犠牲に基づいて、神への神聖な供え物を捧げるためのものであることを示しています(ローマ 15 章 16 節; 第一コリント 5 章 7-8 節)。

四つのギャップとその 12 日間のグループの象徴: 人類史の最後の三つの時代を象徴しているのは、一週間行われる三つの祭事＜種入れぬパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭り＞だけではありません。その祭りの後に続くユダヤの儀式暦のギャップの期間も、それぞれの時代を象徴しています。七日間にわたる＜三つの＞一週間の祭りは、それぞれ歴史の四つの主要な区分の特徴を概念的に象徴しており、そのため同じ割合(それぞれ、七日づつ)になっており、完全に意図的にそうなっています。一方、これ

---

[54] アンガー『解説』p.225。

[55] 異邦人の時代には祭りが存在しないという事実は、この暦が作られた時点ですでに歴史的にかなり過去の時代であったことを考えれば、驚くべきことではありません。ユダヤ人の時代に先立つ二つの千年期間に異邦人信者が人類一族の信仰の系統を維持し、例外的で重要な人物（例えば、アダム、アベル、セス、エノク、ノアなど。創世記 4 章 26 節参照）をもたらしましたが、人類史の最初の時代は、数的には、信者の重要な「集会」は生み出しませんでした。

らの祝祭に続く空白期間は一様ではなく、意図的にそうなっています。というのも、この空白期間は、その時代に関する重要な情報を提供するために設けられているからです。具体的には、ユダヤ人の時代、異邦人の時代、千年王国において、それぞれ呼び出された信者の割合がわかるようになっています。三つのギャップ期間は、それぞれ 14 日間と 12 日間の異なる倍数の合計で構成されています。一週間行われる祭りはその時代の概念全体を象徴して表していたように、(＜創造日数二日＝二千年を＞ひとつのまとまりの単位としての)14 日間の象徴は時間的なもので、この場合、各週(七日)は千年という期間を表しています。至福千年を表すギャップ期間にも、同じように 14 日間が含まれています(ただし、＜創造の安息日一日の＞一千年です)。このことは、以下のように説明できます:

1) 至福千年は、キリストの二倍の部分の時代です(本節では「七日目」の項＜「9.七日で表される人類の年代記」の f.「七日目」＞で述べました:イザヤ 61 章 7 節参照)。

2) 千年王国は、悪魔の直接的な支配がない唯一の時代であり、対照的に、神の子の支配から大きな益を得ることができる時代です。そのため、救われる人の数が倍増し、それまでの人類史と同数の人間が救われるという事実が示すように、二重の祝福の時代です(すぐ下を参照)。

3) 千年王国は、イスラエルの時代(異邦人がユダヤ人の宗教的行事に参加することは比較的まれで、そこから締め出されていた)、教会の時代(ユダヤ人は、最後の時の前夜まで続くと預言された「心の硬化」に従って、数字的には小さいけれども決定的に重要な残りの信徒を形成していた)と対照的に、ユダヤ人と異邦人が神の計画に完全に参加し奉仕するようになります: ローマ 11 章 5 節, 11 章 25-27 節)。

これらの 14 日間を、それぞれの 3 つの空白(ギャップ2, 3, 4)期間の日数から差し引くと、様々な 12 の倍数の日数となります: ユダヤ時代は 12×3、教会時代は 12×9、千年王国は 12×12 です(上記の考察と本項冒頭の表を参照)。

イスラエル: 神の完璧な基準

12 はもちろん、全体が満ちるほどの完全性の数であり、この原則は、救われた人類全体が最終的に組織化される際のイスラエル部族の(そしてそれに満ちる)数から、最も顕著に見て取ることができます:

1) イスラエルは究極の尺度である: 申命記 32 章 8 節によると、諸国の境界は「イスラエルの子らの数にしたがって」神によって定められ、その数は主が人類史を計画する際の基準となっています。
2) イスラエルは究極の根源である: 十字架の後、ユダヤ人と異邦人はキリストにおいて一つになりましたが(ガラテヤ 3 章 28 節; エペソ 2 章 11-22 節; コロサイ 3 章 11 節)、異邦人が接ぎ木されるのはイスラエルの根に対してであり、その逆ではありません(ローマ 11 章 18 節)。
3) イスラエルは究極の土台である: 預言者たち(モーセ、ダビデ、エリヤ、エリシャなど)、聖書のすべての著者たち(上記参照)、すべての使徒たち、究極の伝道者たち(すなわち、黙示録 7 章の 144,000 人)、そして最後にして最も重要なメシアも、すべてイスラエルからです(エペソ 2 章 20 節、第一ペテロ 2 章 6 節、黙示録 21 章 14 節を参照)。
4) イスラエルは究極のゴールである: 私たちは皆、永遠のイスラエルの首都である新エルサレムに住む日を待ち望んでいます。この場所は、12 の門にイスラエルの 12 部族の名が記され、その壁の 12 の土台に小羊のユダヤ人 12 使徒の名が記されています(黙示録 21 章 12-14 節)。
5) イスラエルは究極の組織である(イザヤ 14 章 1 節; エレミヤ 51 章 19 節; エゼキエル 47 章 22-23 節): イスラエルの部族再編成が最終的に行われることは、12 使徒が(明らかに部族間で均等に分配されていない事実によって示されている: ヤコブとヨハネは兄弟であり、ペテロとアンデレも兄弟である)12 部族を裁きます(マタイ 19 章 28 節; ルカ 22 章 28-30 節; イザヤ 66 章 21 節; ヘブル 7 章 14 節も参照)。イスラエルでは、宝石や石が部族分けを示すのに重要であったことを考えると(出エジプト 28 章 17-20 節; 39 章 10-13 節; ヨシュア 4 章 2-24 節; このシリーズの第 4 部では天使の長老について述べています)、黙示録 2 章 17 節の「新しい名前」が刻まれた「白い石」の約束は、個人の認識と報酬に関する意味に加え、すべての信者の部族分けを示すものと考えるべきです(参照: イザヤ 66 章 21 節; ゼカリヤ 3 章 9 節)。私たちは皆、神にとっての貴石であり(ゼカリヤ 9 章 16 節; 第一ペテロ 2 章 5 節)、アブラハムの霊的種としてイスラエルの一員であり、神の御子、岩であるイエス・キリスト(マタイ 7 章 24-25 節, 16 章 18 節; ローマ 9 章 32-33 節; 第一コリント 10 章 4 節; 第一ペテロ 2 章 4-8 節)の体の一部であることを含め、キリストのすべてを共有しています(エペソ 3 章 6 節; ローマ 2 章 29 節, 8 章 16-17 節, 8 章 32 節; 第一コリント 12 章 2 節; ガラテヤ 3 章 29 節; ピリピ 3 章 3 節; 第二ペテロ 1 章 4 節)。

だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であって、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々からは、無割礼の者と呼ばれており、またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国

籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であった。ところが、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって**近いものとなった**のである（つまり、イスラエルとともにキリストに入り、したがって、キリストによってイスラエルに入ったのです）。キリストはわたしたちの平和であって、二つのもの[ユダヤ人と異邦人]を一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて[この]平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、[神と人との間の]敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、[最初の来臨の際]こられた上で、[神から]遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあって、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと**同じ国籍の者であり、神の家族**なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、（エペソ 2 章 11-21 節）

割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである（例えば、キリストにあって一つになったユダヤ人と異邦人の信者：第二コリント 5 章 17 節; エペソ 2 章 14 節）。この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、**神の**イスラエル(すなわち、神の選民、救われた人間の家族全体）の上にあるように。（ガラテヤ 6 章 15-16 節）

異邦人の時代からアブラハムに引き継がれた信仰の種から生まれ、イスラエルのぶどうの木に芽生え、教会の時代に豊かな実を結ぶ神の家族は、このように一体なのです。そして、この植物の株はユダヤ人であるため、復活の際には、神の人間家族が最終的にイスラエルの 12 部族に配置されることは驚くべきことではありません。人類史の三つの実を結ぶ時代のそれぞれで、信者がさらに、上述の12 隊に編成されるのは、この同じ究極的な部族編成を反映したものと理解されるでしょう。さらに、ユダヤ教の宗教暦における三つの時代の長さも、それぞれの時代が生み出す救われる人数の相対的な割合を物語っています： ユダヤの時代の二千年間には 3、教会の時代にはその 3 倍の 9、そして千年王国にはユダヤの時代と教会の時代を合わせた 12 が、それぞ

れ収穫されます。聖書の中で、ユダヤ人が神の計画の中で際立っていること、そして千年王国時代の日数計算では、その時代の信者がこれまでの信者の数と同じになることを考えると、千年王国ではこれまでの異邦人とユダヤ人の信者の割合が、逆になる可能性は少なくありません。この議論はエルサレムと千年王国イスラエルが、キリストの地上王国の中心地となることを考慮すると、より説得力のあるものとなります。これらの経緯の後に人類の歴史が終わるとき、キリストの教会では、信仰によって救われた生まれながらのユダヤ人と、信仰によって神の家族に入れられた異邦人とが、正確に均衡することになります。

この異邦人とユダヤ人の間の数の均衡は、神の家族の人数と天使の数の間でも同じであることが明らかです。なぜなら、これまで見てきたように、キリストの再臨によって完成する教会は、自らの意志によって失われた神の家族の数（すなわち、サタンとそれに従った天使たち：本シリーズの第 1 部を参照）と等しくなるからです。悪魔の軍勢は天使の三分の一から構成されているので（黙示録 12 章 4 節）、千年王国（その時代の 12 日間の 12 グループ）の間に救われた人間の数を倍にすると、救われた人間の総数が選ばれた天使の総数と完全に等しくなる（すなわち、全天使のうちから失われた三分の一に一致する教会の人数を倍にすると、救われた人間の数は天使の種類の残り三分の二に一致する）ことになるのです。したがって、神の家族の最終的な組織は、次のようになると思われます：一方では、24 人の長老に代表される選ばれた天使の6氏族の数は、救われ復活した人間の 12 部族の数と等しくなり、人間は 24 の部族に組織されて、それらの天使と人間の両者は神なる人イエス・キリストによって支配されるという形になります。

d. イレナイオスの証言：

神の時代計画における 7 千年王国時代の解釈に対する最後の支持は、初期の教会史から得られます。イレナイオスは、新約聖書の終末論的な教えを伝える最後の聖書以外の証人であり、そのような見解が世俗化した教会によって封殺される前に、詩篇 90 篇 4 節と第二ペテロ 3 章 8 節の重要な箇所をこのように理解していたことを明確に示しています。Adversus Omnes Haereses 5.28.3 では、千年王国時代の解釈は事実として述べられています。

e. 科学と聖書の問題 ：

少なくともここ数世紀の間、科学的理論を聖書に適用することは、神の言葉の真理を受け入れようとする多くの人々につまずきを与えてきました。私たちの主は、そのようなつまずきが生じることは避けがたいことであり、また、そのようなつまずきをもたらす

人々は悲惨な結果を必ず刈り取ることになると言われました（マタイ 18 章 7-9 節）。クリスチャンとして、目に見えるものにではなくキリストに信仰をおくことを公言する信者として（第二コリント 4 章 18 節, 5 章 7 節; ヘブル 11 章 27 節）、私たちは人間の証言よりも神を信頼すべきです。その証言がどんなに説得力があり反論できないように見えてもです。私たちは、まず次のことを理解しなければなりません。私たちは加速度的に変化する世界に生きていること、そして科学とは、神の創造物の物質面の真理の探究に過ぎず、極めて不完全な試みであり、神が造られた無限の宇宙をおぼろげに、限定された理解しか与えてくれないということを。なぜなら、新しい科学的発見があるたびに、それまで科学が知らなかった幾何級数的な無知が明らかになるからです。科学的な知識が増えれば増えるほど、その課題は無限で、世俗的な手段で宇宙を究極的かつ包括的に理解することは、無駄であることを認識することになります。悲しいことに、神の創造の究極的な不可解さに気づいて謙虚になるべきであるのに、人は傲慢になりがちだったことが歴史からわかります。科学技術の進歩が、人類の歴史上、一人の人間も墓場に行かないようにさせることもできませんでしたし、一人の人間にも永遠の命を与えていないにもかかわらず、科学は多くの人にとって宗教のような存在になっています。

クリスチャンとして、私たちは世俗社会がこの新しいバベルの塔を価値あるものとし、神なしで人類を天国の高みに至らせようとしていることに驚きを感じざるを得ません。しかし、物質宗教の党派が、現在の科学的解釈によって聖書の教えが何らかの形で間違っていたと主張したり、信者の仲間が危険な思い込みをするたびに、私たちは怒りを持つべきです。神は物質的な存在ではありません。神は霊的な存在です。神は物質を発明し、創造しました。神が一瞬にして創造した大宇宙について、現在科学がもたらしている不完全な理解と、その基礎となる霊的現実との間には、想像すらできないほどの大きな溝があります。

それゆえ、世間が何を言おうとも神を信じると公言する私たちは、その背後にある現実を否定する物質主義的な力によって、神の言葉が何らかの攻撃を受ける可能性がある場合、神の御言葉のほうをとることが正しいだけでなく、賢明です。聖書を信じることです。そうすれば、あなたは決して失望することはないでしょう。しかし、もしあなたが、世間が言うことを理由に（たとえ「優れた科学的証拠」に基づいても）、その御言葉と教えを疑うなら、あなたは本当に悪い取引をしたことになります。なぜなら、あなたが心に蒔くことを許したこの疑念は、あなたの魂の奥底に潜り込み、あなたの信仰の土台を根底から崩してしまうかもしれないからです。

聖書と、聖書に書かれている出来事や事実に対する科学的な解説との間に明らかな矛盾がある場合、聖書が本当に言っていることが正しいのだ、という真理の原則を取り上げてみましょう。聖書は科学のテキストではありませんが、正しく翻訳され、（神学的、歴史的な問題については）解釈された聖書に書かれていることはすべて、絶対に真実なのです。矛盾がある場合、定義上、科学か私たちの解釈のどちらかが少なくとも部分的に間違っているのです。例えば、数世紀にわたって科学が多くの人々の信仰を揺るがしたにもかかわらず、かつて科学が宣言したことのほとんどすべてが「修正」され、実際、日々修正されていることは皮肉なことです。不完全な人間である私たちの知識や理解は、ほとんどの場合、不完全なものであり、知識や理解におけるごく小さな隙間が、物事の捉え方に決定的な違いをもたらすことはないと考えるのは重大な誤りです。このことは、聖書にある年代＜や出来事＞に関する情報についても言えることです。聖書に記録されている出来事、例えばイエス・キリストの処女懐胎と復活は、明らかに超自然的であり、同時にキリスト教徒とみなされる人の信仰にとって明らかに重要であるため、悪の弟子たちは普通、即座にこれらの点に関する直接的な攻撃を避けるものです。それは、一見些細な点に疑念を抱かせることさえできれば、やがて聖書のあらゆる点に疑念を抱かせることができるからです。

この悪魔的な戦略の好例は、聖書の年代に関する世俗的な反論に他なりません。年代や歴史的出来事に対する疑念は、考古学という「科学」の文脈で浮上することが多いのですが、この「科学」は大げさに言えば不正確です（真面目な歴史家ならよくご存じでしょう）。ある特定の場所で掘り出された土器は、結局のところ、この事実以外には何も教えてくれません。年代や起源、オリジナリティに関する推測はもちろん、そこから歴史的な結論を導き出そうとする試みも、主観的で解釈の幅があります。確かに、考古学的な発見には誰もが興味を持ち、感謝するものです、しかし、考古学者の独断と偏見によって、発見された資料が歴史的な記録に組み込まれてしまうことが、最も大きな問題を引き起こしています。大まかには、優れた文献史料は、考古学的情報を慎重に吟味し、慎重に適用することで補うことができますが、考古学的データのみ、あるいはその大部分によって歴史的スキーマを構築することは、まったくの愚行です。このことは、聖書に含まれる歴史的・年代的記録に対する考古学的な異論がある場合にも当てはまります。

聖書はこれまで書かれた中で最も人気のある書物であり、信仰に基づく教えと神の霊感を受けたという（真実の）主張と相まって、悪魔がこの信仰の柱を弱体化させようとするのは明らかですが、それとは別に、考古学的な「修正」の格好の攻撃対象であったことでしょう。聖典の場合（特に旧約聖書の多くの部分）、考古学によって疑問視されている歴史的記録は良好（実際には完璧）であることがわかります。つまり、古代史の

研究者が最も恐れる、考古学的な発見に基づいて信頼できる文献を「訂正」する、という状況です。過去 1 世紀半の間に、考古学的発見をもとにした推測的な解釈によって、不正確とされた聖書の正当性が証明された、数々の事例をここで列挙することは時間的に不可能です。しかし、説明のために、年代の問題について少し時間を割く価値があるでしょう。というのも、考古学が一般大衆に「科学的」な根拠を持つことを、ある程度納得させることができた分野があるとすれば、それは現代の年代測定法の分野です。このような方法論は数多く存在し、年を追うごとに増えています。そして、これらの方法論は、どれも絶対的な客観性を持っており、ほとんど議論の余地のない証拠であるかのように描かれるのが常です。しかし、実際には、それらはすべて、ある重大で誤った仮定、すなわち、今日の地球が昨日の地球と本質的に同じであるという仮定からきているのです。

その仮定とは真反対に、私たちクリスチャンは、聖書から、再創造された地球は科学が認めるよりもずっと若く、わずか 6000 年前に闇の裁きから取り戻されたものであることを知っています（本連載の第 2 部を参照）。この「斉一性」という重大な誤認識に付随する重要な問題は、実時間で観測できた現象を、理論上の長い過去時間に遡って投影してしまうことです。このような根拠薄弱な理論がもたらす問題は、いわゆる科学的な年代測定法のすべてに見られますが、現在の測定法の中で最もよく知られている炭素 14 年代測定法を例にとってみても、この問題は明らかです。ヴォス氏＜Howard Frederic Vos＞によれば、炭素 14 年代測定法は、三つの基本的な仮定に基づいています：1）放射性炭素 14 は生物が死ぬと取り込まれなくなること、2）その後一定の割合で劣化すること、3）炭素 12 はずっと安定したレベルにあること（したがって比較測定ツールとして使用できる）[56]、（タイムカプセルに入って時間を進め、特定のサンプルの進行を確認できない、つまり実験室で結果を証明できないという単純なことからも）2 番目と 3 番目の仮定は証明できないということは、あまりにも明らかなことです。また、年代がほぼ判明している試料から炭素 14 の劣化線をグラフ化するだけでも十分ではありません。なぜなら、サンプルの年代を正しく推測したとしても、予測できない理由でグラフが湾曲することもあれば（最近の株式市場を観察しているとよくわかる）、重大な出来事が起こったときに、グラフが急変することもあるからです。このように、炭素 14 による年代測定は、考古学的な年代測定も含めて、進化論と同じように理論的なものでしかないのです。そして、進化論と同じように、神の解説がない限り、生命の起源を探ることが、いかに誤った道を辿ることになるかということです。しかし、聖書には人類の世俗的な記録よりも信頼できる記録があるのですから、明らかに間違っていることに固執するのは、非常に愚かなことです。聖書には、およそ 6,000 年も前に地球上のすべての物理的生命が（しかも、「その種にしたがって」）再創造されたことがはっきりと記されているからです。炭素 14 年代測定法（およびそのようなシステム）を嘲笑うような出来

[56] H.F.ヴォス『聖書の国の考古学 Archaeology in Bible Lands』（シカゴ 1977 年） 45.

事といえば、世界規模の大洪水です。これは、「科学的」な年代測定の前提を覆すような、大変な規模の出来事です。ヴォス氏が指摘するように、炭素 14 による年代測定が紀元前 2000 年を越えて遡っていくとますます信頼できなくなるのは、間違いなくこのためです[57]。もちろん、創世記は国家機密ではないので、現在の方法論に固執する人々は、十分に考慮すれば自分たちの研究に妥当性をもたらすかもしれない、この宇宙を変える出来事を盲目的に否定していることになります。間違ってはいけません。私たちがここで問題にしているのは、サンプルでも、装置でも、テスト方法でもないのです。むしろ、反聖書派の科学者たちが、聖書の有効性を否定するために、聖書の重要な証言を盲目的に無視してその結果を見ている近視眼的な解釈のレンズのことなのです。そして、これは聖書の年表を批判するための公平な根拠とはなりえないのです。

大洪水は、再創造されたばかりの地球に一体何をもたらしたのでしょうか。聖書は歴史地理学の教科書ではありませんが、聖書から多くの重要な事実を得ることができ、現在の世俗的な解釈のパラダイムがいかに不十分であるかを説明することができます。地球全体を覆うほどの水（その深さは、地球の最高峰の山々を 20 フィートも上回るほどです。創世記 7 章 20 節参照）が生み出す圧力が、どれほどのものであったかを推し測ることは困難です。 しかし、その影響は大規模で（第二ペテロ 3 章 5-6 節参照）、間違いなく地球の磁場（炭素 14 を含む多くの年代測定技術が最終的に磁場が安定しているという仮定に基づいている）に大きな変化をもたらしたことでしょう。 しかし、それ以外にも多くのことがあります。洪水以前は、地球上でそれ以降とは全く異なる生物学的な体制が確立されていたのです。洪水以前、人間の寿命は 1000 年に近いものでしたが（創世記 5 章参照）、洪水後は一般的に 120 年が上限で（創世記 6 章 3 節： 申命記 34 章 7 節にあるモーセの件も参照のこと; アブラハム、イサク、ヤコブ、また歴代志下 24 章 15 節の大祭司エホヤダは例外です）、通常の範囲は 70-80 歳（詩篇 90 篇 10 節）です。洪水以前、地球は季節の変化のない均一で温和な気候でした（創世記 2 章 4-6 節と創世記 7 章 4 節を比較のこと）。しかし、その後、現在私たちが慣れ親しんでいる季節が始まりました。洪水前、地球は濃い霧に覆われていました＜大気の上に水蒸気層が厚く存在していた＞が（創世記 2 章 6 節）、洪水後は、直射日光とそれに付随するすべての影響を受けることになりました（創世記 8 章 22 節）。洪水以前は、バクテリアの活動は現在よりずっと少ないものでした。これは、ワインの発酵が洪水後の文明にとって全く新しい出来事であったことからも明らかです（創世記 9 章 20-21 節）。洪水以前には虹はありませんでしたが（創世記 9 章 12-17 節）、大気の状態や分光学的な条件は確実に変化したのです。

[57] 前掲書、46

地球の重力場、自転軸、大気や気候の条件、宇宙放射線のレベル、さらには基本的な生物活動まで、このような大規模な変化の累積効果は、考古学的な年代測定技術に組み入れて完全に把握することはおろか、モデル化することもかなり困難でしょう。地球の磁場、宇宙線の活動、バクテリアの分解過程、あるいは当たり前と思われている季節のパターンのわずかな変化でさえ、考古学が重きを置いているどんな「科学的」年代測定システムにおいても、まったく異なる結果を生み出すことでしょう。聖書に明確に記されている大洪水前の世界と大洪水後の世界の違いが、現代の考古学で見過ごされていることを考えれば、なおさらです。現代の年代測定技術の結果が、しばしば聖書の明白で一貫した記述と対立するのも不思議ではありません。この時点で、考古学的な年代測定が、聖書の年代測定に純粋に興味を持つ人々にとって、ほとんど役に立たないことも明らかでしょう。このようないわゆる科学的システムの信奉者は、彼らの先史時代の計算のすべてを劇的に変えてしまうような聖書の証言を、盲目的に拒絶しているのです。

> まず次のことを知るべきである。終りの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、「主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない」と言うであろう。すなわち、彼らはこのことを認めようとはしない。古い昔に天が存在し、地は神の言によって、[下の]水がもとになり、また、水[の中を通ること]によって成ったのであるが、その時の世界(すなわち、ノアの時代の世界)は、[再び]御言により[上と下の]水でおおわれて滅んでしまった。しかし、今の天と地とは、同じ(神の)御言によって保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである。(第二ペテロ 3 章 3-7 節)

> [このようなタイプの人達]は、常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない。ちょうど、(パロお抱え御用魔術師ら、いわゆる「科学者」である)ヤンネとヤンブレとがモーセに逆らったように、こうした人々も真理に逆らうのである。彼らは知性の腐った、信仰の失格者である。しかし、彼らはそのまま進んでいけるはずがない。彼らの愚かさは、あのふたりの場合と同じように、多くの人に知れて来るであろう。(第二テモテ 3 章 7-9 節)

信仰によって、わたしたちは、この世界（すなわち物質世界）が神の言葉で造られたのであり、したがって、**見えるものは現れているものから出てきたのでない**ことを、悟るのである。（ヘブル 11 章 3 節）

f. 聖書における年表

聖書の年代測定法を説明する前に、聖書には絶対的な年代測定法がないことに注意することが重要です。つまり、「紀元前」や「紀元後」という表記はありません。実際、現在の年表のシステムは、紀元 525 年頃、スキタイの修道士ディオニシウス・エクシグウス（Dionysius Exiguus）がローマ教皇ヨハネ 1 世の命令で発明したに過ぎません。それまでは古代ローマの計算方法（A.U.C.）が主流でした。しかし、オリンピアードや摂政年など、人類が時代を刻むために採用してきた数え切れないほどの方式は、人類史全体に適用しようとすると、どれも問題や不具合があります。

聖書の年代データの収集と解釈、そして体系化された結果を現代の暦法に適用しようとしたのは、古代ではエウセビウス（Eusebius）、現代ではウッシャー（Ussher）であり、この問題に取り組む者は、必然的にこの二人の仕事を土台にすることになると言ってよいでしょう [58]。ウッシャーの徹底した研究によると、アダムの創造は紀元前 4004 年、アブラハムのカナン入国は紀元前 1921 年であり、この日付は、ここで進められている千年王国時代の解釈と非常に近いものです。さらに、アダムのが創造された時から彼の堕落までの期間を仮定し（この仮定は聖書と矛盾するものではありません）、アブラハムの割礼をユダヤ時代の始まりと仮定すると、キリストからアブラハムまで、またアブラハムからアダムの堕落までの 2 千年は、まさに正確に近いと言えるでしょう。しかし、この解釈を支持するために必要な年代測定の具体的なポイントに入る前に、聖書の年代測定の基本原則について議論することが重要です：

1) 創造主である神は、時間を発明し、創造し、そして支配しておられます（ヨシュア記 10 章 13-14 節参照）。[59] 今まで起こったこと、これから起こることはすべて、神によってすでに定められています（詩篇 56 篇 8 節, 139 篇 16 節; エレミヤ 33 章 25 節; ローマ 8 章 28-30 節; エペソ 1 章 11 節; 第一ペテロ 1 章 2 節 ）。したがって、神は決して時間に左右されることはなく、むしろ時間は完全に神に左右されるのです。したがって、ここで議論されている七千年王国時代の日システムの正確さは、すべて神の特権によ

[58] エウセビオス Eusebius『年代記 Chronica.』。 ウッシャー『Annales Veteris et Novi Testamenti』（2 部、1650-1659 年）。 また、私は Jack Finegan の Handbook of Biblical Chronology (Princeton 1964)や Harold W. Hoehner の Chronological Aspects of the Life of Christ (Grand Rapids 1977)からも多大な恩恵を受けています。
[59] 聖書の基礎知識パート 1 をご覧ください： 神学： 神について

るものです。主は常に、時間を変更、修正、追加する自由をお持ちです(ギベオンの戦いで日没時間を＜およそ一日＞延ばされたように:ヨシュア記 10 章)。同じ意味で、人類史の七日間＜著者は七千年の歴史のことを指している＞のように、主が確立した時間的区分のシステムを守ることも自由なのです。

2) 聖書には多くの年代データが含まれています。聖書に含まれるすべての情報と同様に、私たちはこの情報が神によって意図的に含まれたものであり、重要であると考えなければなりません。聖書の中の年代データは、理由があってそこにあるはずです。したがって、この情報が必ずしも現在の年代測定システムと比較しやすい形で提供されていないからといって、その重要性や関連性が低下するわけではありません。

3) 聖書の年代データを私たちの年代を数える方法に合わせる問題は、私たちの問題であって、聖書の問題ではありません。こうした年代を数えることはもともと難しいものですが、今の数え方は、聖書が書かれたずっと後になって始まったものです。聖書のデータを現在の暦に合わせることは、私たちが対処しなければならない解釈の問題であり、決して聖書の記述の正確さを否定するものではありません。

4) そのため、私たちの年代測定方法に日付を合わせることは、紀元・紀元前のずれ、聖書時代の包括的な数え方、月と年の正確な長さ、年の開始時間、聖書における複数の計算方法の使用など、多くのシステム上の問題に直面します(より重要な複雑さの例を挙げればきりがありません)。

5) しかし、このようなデータの理解や解釈に関する問題がある一方で、聖書の年代情報は絶対的に正確であるだけでなく、極めて正確であることに注目する必要があります(出エジプト記 12 章 40-42 節参照:出エジプトはイスラエルの到着＜イスラエル人がエジプトに移住して＞から「正確に 430 年後に」行われました)。

6) また、私たちは聖書が記録する年代的な事実を知り、理解することを意図されていることも明らかです(マタイ 16 章 3 節, 24 章 32-35 節;第一テサロニケ 5 章 1-3 節)。

7) 私たちはこの原則の要約を、最初に述べたことをもって終えます。神は時間の支配者です。つまり、いつでも、どのようにでも、「時と季節を変える」ことができるのも、神様の権限です(ダニエル 2 章 21 節)。神は、人間の年表のシステムや、その進行に関する人間の期待に従うよう拘束されることはありません。神は、聖書の預言的啓示を通して、ご自分を縛ることを選択されたときだけ縛られるのです。

9. 人類史の 7 日間の具体的な年表

このように、聖書による人類史の年表の作成は、1)解釈学的問題、2)実践的問題、という二つの深い問題に直面しています。第二の問題(実のところ数多くの問題)は、聖書のデータを分析し、それを人類史の時間軸に当てはめることです。これらの問題については、以下で扱っていきます。第一の問題は、解釈学的あるいは解釈の問題なのですが、そもそも本当にそのような試みが有益で、実用的で、聖書的であるかどうかということです。この問題は、ある聖句(特にマタイ 24 章 36 節; マルコ 13 章 32 節; 使徒行伝 1 章 7 節)が、現代の釈義者たちによって、このような試みを阻止するためによく使われていることから、より繊細なものとなります。このような傾向は、明らかに誤った方法で「終末を予測」しようとした最近の多くの試みを考えれば、確かに理解できることです[60]。確かに、預言は現在教会で機能していない賜物です。しかし、聖書の解釈は別の問題であり、**七つの千年時代**の日を解釈して、艱難期が始まる可能性を導き出すことは、聖書の応用であって「予言」ではないということを、この時点で強調しておかなければなりません。読者の皆さんが、この予測の基礎となる理論がどのような分析に基

---

[60] マタイ24章36節やマルコ13章32節の「**その日、その時は、だれも知らない**」というのは、その出来事が起こる正確な日や時間を知らなくても、その出来事が間近に迫っていることがわかるかもしれないということを示しているにすぎません。結局のところ、このコメントはイチジクの木のたとえの直後にあり、私たちは聖典的に重要な出来事に注意を払い、これらの事柄について聖書が述べていることを無視しないようにと、主からはっきりした言葉で言われているのです(マタイ24章32-35節; マルコ13章28-31節参照)。使徒行伝1章7節はしばしば「あなたがたが知る限りではない」と誤訳されますが、「**時や季節を決めるのはあなたがたではない**」と表現すべきです。ギリシア語の動詞ギグノスコ*gignosko*は、特にここでのようにアオリスト<ギリシャ語の動詞の変化>の場合、一般的に「決める」という意味を持ちます(参照:ルカ16章4節; ヘブル3章10節)。主はすぐに「**父がご自分の権威によって定めておられる**」と付け加えているので<日本語の訳では、この文句がすぐ前に来ています-使徒行伝1章7節前半>、文脈はこちらの改訳を強く支持しています。つまり、イエスの言わんとするところは、これらの事柄を決定されたのは父であり、あなたがたの願望によって決定されるものではないということです。というのも、主の弟子たちは、その前の6節の質問を通して、主がただちに御国を建ててくださるようにという願いをはっきりと表明したばかりだったからです。ですから、7節での主の叱責は、御父の予定表について全く無知であることを称賛しているのではなく、むしろ、このような問題において重要なのは御心であって、彼らの意思ではないことを彼らに思い起こさせるものです。この声明は、ペンテコステで聖霊が授けられる前に使徒たちに与えられたという事実も考慮しなければなりません。聖霊は、イエスがすでに明らかにしていたように、彼らに起こる事柄の順も含めて「**きたるべきこと**」(ヨハネ16章13節; 第二ペテロ1章16-21節参照)を教えてくれる霊的存在です。彼らは後に「**きたるべきこと**」を理解するようになるので、7節は8節と合わせて理解する必要があります:「**しかし、聖霊があなたがたの上に下る時、あなたがたは力を受け…**」これは以前に約束された御霊のさらなる啓示(終末の時に関する情報を除いてはいません)を明確に含む声明です。ですから、その数年後、パウロはテサロニケの信徒たちに使徒行伝1章7節と正反対のこと(と、よく勘違いされているのですが)、「**兄弟たちよ。その時期と場合とについては、書きおくる必要はない。あなたがた自身がよく知っている…**」(第一テサロニケ5章1節)と言うことができるのです。

づいているかを調べ、自分なりの結論を出して頂くことが最善です。聖書の真理を発見し、それをできるだけ明瞭に描写し、神の勧告を何一つ差し控えないことは、これまでも、そしてこれからも、このミニストリーの指針です(使徒行伝 20 章 20 節; 20 章 27 節)。

> それから一つの譬を話された、「いちじくの木を、またすべての木を見なさい。[このように]はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。このようにあなたがたも、[5 節から 28 節までの]これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。(ルカ 21 章 29-31 節)

私たちは、来るべき試練の時に備えて出来事を見守る際に、聖書が示す具体的な時系列の指針を活用すべきなのです。確かに、理由があってそれらのものはそこに書かれてあるのです。この原則を受け入れるなら、問題となるのは、解釈の正確さです。

これから述べる情報のうちで、最も議論を呼びそうなもの、すなわち、艱難期の開始予定日は、以下の推定に基づいています(これらはすべて、この研究の文脈で扱われます):

＊七日間(七千年期間)の解釈は、聖書で教えられており、理解し適用することを意図しています。
＊教会時代は、二つの千年期間、つまり 2000 年間続く。
＊教会時代は、キリストの十字架と復活の後に始まった。
＊これらの出来事は、紀元 33 年に起った。
＊艱難時代は、教会時代とユダヤ時代の両方に属するので、艱難時代の開始を計算する際には、2000 年の合計から差し引かれる。
＊第七の封印が解かれるときの天の沈黙の半時(黙示録 8 章 1 節)は、半年間の猶予期間を意味し、開始時期が春から秋に移ることを意味している。
＊聖書は、この時間軸が短くなったり長くなったりすることは示唆されていないので、このスケジュールの変更は予想されない。

以上の点はすべて真実であり、その根拠となる分析が以下に示されます。上記のいずれかを逸脱すれば、全体の構想に変化をもたらすことは明らかです。また、すでに述べたように、以下に示す構想を変更することは、全能者の力と権限の範囲内であることは確かです。例えば、艱難期の終末は、明らかにされていない時間の分だけ縮められます(マルコ 13 章 20 節)。しかし、マルコ 13 章 20 節は、この研究での説を否定

するどころか、むしろ、聖書の年代情報に注意を払うことの重要性を裏付けています。なぜなら、「期間が短くされる」のであれば、そもそも天には明らかに時刻表が存在したことを意味するからです。第二に、マルコ 13 章 20 節は、この期間の短縮が数日からせいぜい数週間のことであることを示しています（つまり、以下に示す一般的な時間軸を変更するほどではありません）。これは、ダニエル書とヨハネの黙示録に示された、非常に具体的な日数と月数の集計と一致しているのは確かです（ダニエル 7 章 25 節, 8 章 14 節, 12 章 7 節, 12 章 11-12 節; ヨハネの黙示録 11 章 2-3 節,12 章 6 節, 12 章 14 節, 13 章 5 節）。

現実的な観点からも、七千年の期間の正確な年表を構築することはとても難しいことです。古代の年代論（特に聖書の年代論）を研究したことのある人なら、この問題がいかに重大なものであるか、おわかりになるでしょう。しかし、千年期間の仮説に基づき、かなりしっかりとした年表を作成することは可能であり、この作業は困難ですが、艱難期を間近に感じて生きる私たちにとって、それが間近になっているということを知ることは有益以外の何物でもありません。このような考えを念頭に置いて、現在の構想を提供します：

a. キリストの生涯：世界の歴史の中で最も重要な時期、救い主イエス・キリストの生涯から始めます。聖書はこの時代を「時代の結合期」と呼んでいます（ヘブル 9 章 26 節; ローマ 5 章 6 節; ガラテヤ 4 章 4 節; 第一テモテ 2 章 6 節; テトス 1 章 3 節; ヘブル 1 章 1-2 節; 第一ペテロ 1 章 20 節参照）。その通り、キリストの誕生はユダヤ時代の延期を意味しており（マタイ 11 章 12 節; マルコ 1 章 15 節; ルカ 12 章 49 節～参照）、その死、復活、昇天は教会時代の切迫した開始を告げるものです（使徒行伝 1 章 4-5 節; マタイ 27 章 51 節; マルコ 7 章 27 節; ヨハネ 2 章 4 節, 7 章 8 節; ヘブル 9 章 10 節参照）。したがって、この時点から、七千年の日の具体的な年代を調査する必要があるのです。

(i.) キリストの誕生： まず、ルカ 3 章 1 節から、「テベリオ在位の第十五年に」（すなわち、紀元 28 年 8 月 19 日から紀元 29 年 8 月 18 日の間）、ヨハネが洗礼を施し始めたことがわかります [61]。ルカは、イエスの年齢が公けに宣教を始められた時が「年お

[61] 皇帝テベリオの生涯は比較的よく記録されており、この日付は彼の単独支配の 15 年目に当たることは間違いありません。それ以前の日付（すなわち 26/27 年）の支持者は、他の古代文化における摂政政権の座への即位年代を参考にして、アウグストゥスとテベリオの「共同統治」の期間も含めた年代にすべきだと主張しているだけで、アウグストゥスとテベリオが互いに敵対していたこと、（タキトゥスによってよく記録されている）テベリオの即位はまだ解明されていないこと、ユリウス-クラウディウス朝の共同統治の年代の開始がいつであるかを見極めることは、これが他に類を見ない概

よそ三十」だったと述べているので(ルカ 3 章 23 節)、ヨハネが洗礼を施し始めた時期よりも後の出来事であることから、キリストの誕生は紀元前 1-2 年頃であることに疑いの余地はないでしょう。キリストの誕生日をこれ以上早くすると、キリストは「年およそ三十」ではなく「二十代」になってしまいます。さらに、この表現は、ルカが正確さを求める傾向があることを考えると、最も適切な解釈であり(間違いなく唯一の解釈と言えるでしょう:ルカ 3 章 23 節できちんと年を述べていることを参照のこと)、キリストはまだ 30 歳の誕生日を迎えていませんでしたが、もうすぐ 30 歳になる、つまり 29 歳で、同じ暦年に 30 歳になる予定であったという意味にとるのが最も適切です[62]。したがって、12 月をキリストの誕生月と認めるならば、キリストは紀元前 2 年に生まれたことになり(現在私たちが使用しているキリスト中心暦(ローマ教皇ヨハネⅠ世の命によりディオニシウス・エクシグウス<Dionysius Exiguus>によって紀元後約 525 年に制定では)、1 年だけ早い紀元前 1 年に生まれたことになっています。[63] キリストの誕生に関する年代的な詳細や議論をすべて詳述することは、この研究の範囲では不可能ですが、紀元前 2 年という日付は、福音書の中で唯一明確な二つの年代的言及(すなわち、ルカ 3 章 1 節とルカ 3 章 23 節)に基づくことに加えて、他の三つの重要な要素によって推奨されています。第一に、キリストの働きが三年間と合致することができる(十字架刑の日付について論じるときに見るように、ヨハネの福音書の年代的な詳細によって裏付けられる)ことです。第二に、十字架刑の日付を西暦 33 年とすることができます。これは、独自に導き出した日付の中で、最も可能性が高いものです(下記参照)。そして第三に、ルカが言及した普遍的な国勢調査(ルカ 2 章 1-3 節)と最も正確に一致するのです。

(ii.) 住民登録: ここで明らかにすべき最初の二つの点は、ルカ 2 章 1-3 節で述べられている世界的な住民登録は、クレニオ<Quirinius「キリニウス」のこと-新改訳・新共

念であることを考えると、<皇帝テベリオ在位の第十五年というのは>紀元 28 年から 29 年にかけてとするのが最善と思われます。

[62] これは重要なことです。なぜなら、30 歳は一般的に神への奉仕に必要な成熟した年齢だったからです(民数記 4 章 3 節, 23 節, 30 節, 35 節, 39 節, 43 節, 47 節; 歴代誌上 23 章 3 節 参照)。ちなみに、ルカ 1 章 26 節から明らかなように、ヨハネはイエスより 6 ヶ月年上であったので、イエスが宣教を始めたとき「年およそ三十(でもまだ三十になっていなかった)」でした(ヨハネの宣教が主の宣教より 1 年前に始まったという点については後述します)。

[63] 紀元前 1 年ではなく、紀元前 2 年としたのは、キリストの誕生をヘロデの死より前に置く必要があるためです(参照:Matt.2:1-19)。ヘロデの死がこれほど遅くなることはあり得ないと多くの人が考えていますが、ヘロデの死がこれより早くなることを示す唯一の資料が、フラウィウス・ヨセフスという、やや薄っぺらな歴史家のものであることに注意することが重要です。さらに、この点に関するヨセフスの記述が誤って解釈されている可能性も十分にあります。W.E. Filmer, "The Chronology of the Reign of Herod the Great", Journal of Theological Studies 17 (1966) 283-298 を参照すると、彼はヘロデの死亡時期として紀元前 1 年の 1 月を提唱しています。この日付は、紀元前 2 年 12 月のキリストの誕生、マタイ 2 章 1-9 節の出来事、そしてその直後のヘロデの死に対して十分な時間を残しています。

同訳＞の住民登録ではないということ、そして第二に、ルカは実際にこの二つを同一視していないということです。紀元 6 年から 11 年までローマ帝国のシリア総督であったクレニオが住民登録をさせたということです。(Josephus,B.J.＜Bellum Judaicum=ヨセフス著「ユダヤ戦記」＞2.118; 2.433; 7.253; A.J.＜Antiquitates Judaicae=同著者による「ユダヤ古代史」＞18.4-10; 18.23-25; 20.102 参照)[64]。したがって、聖書の英語版では、ルカのギリシャ語を誤訳してしまうのが常となっていますが、この二つの別々の人口調査が同じものであると見なしているのは残念なことです。正しく訳すと、ルカ 2 章 2 節は「これはクレニオがシリアを統治する前に行われた住民登録であった」です[65]。

ルカにとって、キリストの誕生時に行われた国勢調査と、後にクレニオが行った国勢調査との違いを指摘することは重要でした。というのも、七年後に行われたクレニオの住民登録の方が、武力抵抗も伴いよく知られていて、これはルカ 2 章 2 節で説明されているその前の住民登録とよく混同されてしまうからです(皮肉にも、現代の解釈者はほとんど皆、この混同を避けることができませんでした)。ローマ帝国は、軍事力だけでなく、官僚的な組織力によって勝ち取られたものでした。当然のことながら、(特に課税のための)正確な人口調査のデータは、その行政・財政運営に不可欠なものでした[66]。アウグストゥスは、その良く知られている業績の一覧である「神君アウグストゥスの業績録(res gestae)」で、国勢調査に関する仕事にかなりの紙面を割いています(CIL v.3, in loc., para.8)。世俗史家たちは、上記のアウグストゥスの発言から判断して、帝国全体の定期的な人口調査がなされていたとすることに対しては(不当にも)懐疑的です。実際、紀元前 9-8 年にアウグストゥスが行ったローマ市民の人口調査は、同じ時期にローマ帝国のエジプトで行われた人口調査の証拠と類似しているものです[67]。このエジプトの国勢調査の周期的頻度は主にパピルスの記録からわかることですが、この事は重要です。なぜなら(エジプト以外の帝国の他の地域で、記録が残されていなかったのは)、パピルスは一般に極めて乾燥した気候の場所においてしか保存できて

---

[64]キリニウスの国勢調査については、特に E. Schürer の The History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ (Edinburgh 1973) v.1, 399-427 を参照。Schürer の結論は狂信的であり世俗的で間違っていますが、彼が提供する詳細と参考文献は貴重です。

[65] 最初のフレーズにギリシャ語の定冠詞がないことは「国勢調査」が述部にあることを意味します（すなわち、「これは.....なされた国勢調査であった」)。標準訳の第二の問題は、ルカによる主格を支配する最上級の形 prote を一般に誤解して訳していることです（すなわち、「総督の『最初に』起こった」、総督の前にという意味です)。この用法は、ヨハネ 1 章 15 節と 1 章 30 節にある洗礼者ヨハネのイエスに関する記述に類似しています：「彼は『わたしよりも先に』おられた」（すなわち、私の前に)。

[66] キュレネ勅令が陪審員の割り当てに国勢調査の分類を用いたことを参照（SEG 9.8.1)。

[67] 特にオクシリンコス・パピルスに関してのグレンフェルとハントの対話 Grenfell and Hunt's discussion of the P.Oxy II 254, pp.207-214 を参照。

いないからです。人口調査の記録など、平凡な記録は、歴史的に重要な文書を保存するために相当な努力を必要とした気候の地域では、保管の対象にはなり得ません。つまり、資料が残っていないために、わからないことがたくさん生じてしまうのです。しかし、紀元前 9-8 年と紀元後 6-7 年の人口調査に加え、アウグストゥスとテベリオ政権下の紀元後 13－14 年の人口調査の事実を加えると、七年周期というパターンが浮かび上がり、紀元前 2－1 年は＜もし人口調査がなされなかったとするなら＞この繰り返しの中で唯一の空白時となってしまいます。[68] アウグストゥスが、特定の地方だけでなく、ローマの支配下にあるすべての領土に対して、聖書の記録にあるように、ローマの住民登録の手続き（上記の res gestae に引用）を体系的に適用し始めたのは、突貫工事というよりも、慎重に組織することを好んだ彼の性格に合っているように思えます：

> そのころ、**全世界**（すなわち全ローマ帝国）**の人口調査**＜他の訳では「住民登録」＞**をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。**（ルカ 2 章 1 節）

ローマ帝国の地方の住民登録の特徴として、完全には及びませんが私たちのデータからわかることは、その**前年の**登録したものがその年の登録とされることです。[69] このため、住民登録はおよそ2暦年にわたるもので、1 年目は登録年、2 年目は記録年となります。現在の米国の公式に記録された年の翌年の 4 月 15 日までに所得税を申告するのとは異なり、ローマ帝国の制度では、国勢調査は、評価可能な富と法的地位の「素早い査定」であり、1 年目に査定（および公式に登録）され、その後、帝国政権は、当該州の全住民が提出した情報を確認、検証、必要に応じて修正、記録するのに、さらに 1 年間をかけることになります。少なくとも、現存する証拠はそれを強く示唆しています。さらに、最後の事実として、ヨセフとマリアが紀元前 2－1 年の国勢調査の法的要件を満たすためにベツレヘムに旅立った可能性を組み合わせると、キリストは（住民の公式記録の年である紀元前 1 年ではなく）登録の年である紀元前 2 年に生まれたという上記の命題に再びたどり着くことになります。

(iii.) キリストの十字架上の死： 洗礼者ヨハネの宣教は、紀元 28 年 8 月 19 日（テベリオ在位第 15 年の初め）以降に始まったことを思い出してください。そして、ヨハネの宣教の真の開始時期が紀元 28 年 9 月から 10 月だとする時間軸には、多くの理由があります。第一に、テベリオ在位の第 15 年という正確な開始時期から、ある程度の時間の経過を見込んでいることです（もし開始時期が時間的にほぼ一致するのであれば、ルカは在位第 15 年「に」ではなく、「の始まりに/初めに」という言葉を使っていたことで

---

[68] 実際、この時期（すなわち紀元前 1～2 年）にはガリア地方でも国勢調査が行われていました。Oxford Classical Dictionary (2nd ed.) s.v. "census "参照。
[69] グレンフェルとハント、前掲書、208f.

しょう)。第二に、この推定には、イエスの地上での働きが始まる前の、ヨハネの働きの開始と人に広く知られるようになるのに見積もられる、およそ一年という期間を含みます(この可能性は、以下で扱うヨハネの福音書による年代記によって確認できます)。第三に、上述の日付にすると、両者の宣教の開始時期と終了時期に象徴的な意味を持たせることになります。両者は贖罪の日(神の怒りに直面して悔い改める必要性が最も明確に表現されていている祭り)に始まり、過越の祭り(メシアの苦しみが、彼を受け入れるすべての人のために神の義の要求に応じていることを最も鮮明に示す祭り)に死去して終了したことになります。

第四に、推定されるこの時間枠は、二つの働きの長さという観点からも象徴的に重要さを持ちます。三年半という期間の働きは、艱難期における二人の証人であるモーセとエリヤの働きと正確に同じ長さです(彼らはそれぞれイエスとヨハネの預言的な型です: 申命記 18 章 15-19 節; イザヤ 40 章 3-5 節; ゼカリヤ 4 章 11-14 節; マラキ 4 章 4-6 節; マタイ 16 章 14 節, 17 章 3-13 節; マルコ 9 章 4-13 節; ルカ 9 章 29-33 節; ヨハネ 1 章 25 節; ユダ 1 章 9 節; 黙示録 11 章 1-14 節)。[70] これら二組の宣教期間における年代的な相違の主要な点は、艱難期における二人の証人の証しが同時期に行われるのに対して、ヨハネとイエスの宣教は重なるものの、開始と終了に一年のずれがあるという点です。世の救い主の地上での働きとその前任者の働きには、明らかに(そして計り知れない)質の違いがあることは別にして、この重なりにはいくつかの重要な目的があります。ヨハネはメシアの到来を告げ知らせるために最初に来たものの、メシアが登場した後、ヨハネの働きは衰え、イエスの働きは盛んになりました(これは神の御意志によるものです: ヨハネ 3 章 30 節)。両者の働きが同時期になされたことによる重要な効果の一つは、人々からの注目の的になって働きが麻痺させられることから保護されたことです。イエスはヨハネの死後、彼の最後の年には激しい注目を浴びることになりました。[71] 有名になることは、この世の歴史の中で多くの人が見出してきたように、それは重荷であり、イエスはしばしばこの現象の負の副作用と闘わなければなりませんでした(有名さはしばしば主の働きに対して妨げとなるものでした: マタイ 8 章 4 節, 9 章 30-31 節, 12 章 16 節, 14 章 13-14 節; マルコ 1 章 43-45 節, 3 章 20 節, 8 章 26 節, 9 章 30 節; ルカ 4 章 42-44 節, 5 章 15-16 節, 5 章 19 節; ヨハネ 4 章 1-3 節)。一方、ヨハネの死は、宣教の最終年の始まりを告げるものであり、激しい反

---

70 モーセがキリストの型であったからといって、モーセが唯一無二の神-人のレベルになるわけではありません。ダビデもキリストの型でしたが同様です。ダビデは(聖霊の働きによって)自分の子について、「主は私の主に仰せられた」(詩篇 110 篇 1 節; マタイ 22 章 41-46 節参照)と語っています。

71 ヨハネ自身は、イエスのバプテスマの直後に投獄されましたが(マタイ 4 章 12 節)、ヨハネの弟子たちはヨハネの権威の下で活動を続けました(マタイ 9 章 14 節, 11 章 7 節; マルコ 2 章 18 節; ルカ 5 章 33 節, 7 章 18 節; ヨハネ 4 章 1-2 節参照)。

対や脚光を浴びる劇的な出来事が起こった年であり、主の十字架刑に至る一連の出来事をもたらすものでした[72]。

最後に、そしておそらく最も重要なことは、上記の推定される時間枠は、イエスの洗礼、したがってイエスの地上での働きの同時開始を、ルカが示した時点（ルカ 3 章 23 節）、すなわち「およそ」（ギリシャ語の「ホセイ *hosei*」）30 歳の時に正確に確定することです。実際、キリストの誕生日を伝統的な 12 月下旬とするならば、洗礼を受けた時、30 歳の誕生日まであと数週間だったことになり、この初めの段階と荒野での誘惑の後、おそらくちょうど 30 歳になったことになります（マタイ 4 章 1-2 節, 4 章 12-17 節）。このように、ルカの記述は完全に正確であっただけでなく、キリストは、祭司が奉仕するよう求められていたまさにその年齢で、私たちの大祭司として地上での務めを開始したことになるのです[73]。

さらに、上記の分析はすべて、主の十字架上の犠牲的死とその後の復活について、私たちが提案した紀元 33 年の日付と一致するものです。というのも、西暦 33 年の過ぎ越しの祭りだけでも、最も正当な日付を導き出すことができるだけでなく[74]、上記の分析でキリストの宣教の開始点に 3 年半の長さを加えたときに到達する日付でもあります（すなわち、西暦 33 年の過ぎ越しの祭りは、上記のキリストの宣教開始推定日の西暦 29 年の 9-10 月から三年半後になります）。

キリストの地上での働きが 3 年を超えていたことは、福音書（特にヨハネの福音書）に＜祭事が＞記載されていることを見れば明らかです。

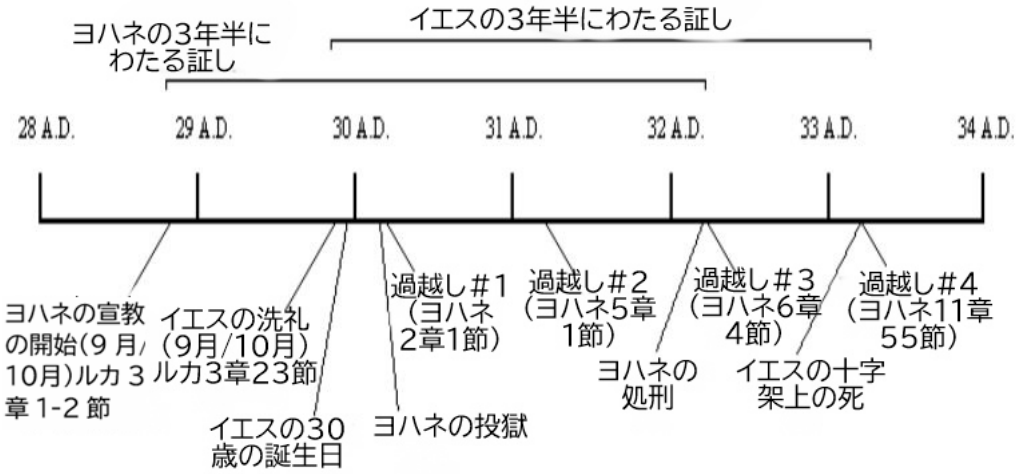
バプテスマのヨハネとイエスの働きについての比較年表

---

[72] 実際、以下の年表を読めば明らかなように、4 つの福音書に記録されている出来事や奇跡のほとんどは、キリストの地上宣教の 3 年半の期間のうち、最後の 1 年に関連しています。

[73] 30 歳が服務可能年齢であることについては、前述の註 62 を参照してください。NIV スタディ・バイブルは、一つの可能性として 25 歳という年齢を一度、提唱しています（民数記 8 章 24 節）が、見習い期間を反映しているのではないかと指摘しています（民数記 4 章 3 節）。

[74] 特に Hoehner, chapter 5 (n. 58 supra)参照ください。



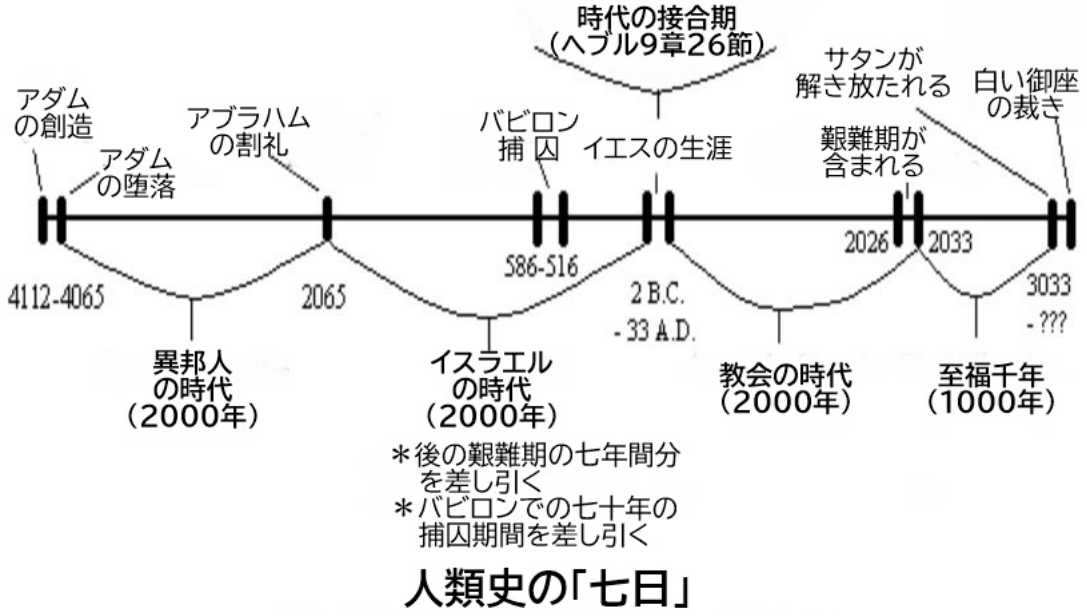
バプテスマと荒野での誘惑の後、イエスの地上での公の証しは過越の祭りの前に始まり(ヨハネ 2 章 13 節)、さらに二つの過越の祭りにまたがり(ヨハネ 2 章 13 節と 5 章 1 節)[75]、また十字架に付けられて終わりを迎えたのも過越の祭りの時でした(ヨハネ 11 章 55 節)。このことから、主の宣教期間は 3 年半であり、(バプテスマを受けたのが紀元 29 年の 9 月から 10 月であることから計算すると)十字架刑は紀元 33 年の 3 月から 4 月であることがわかります。結論から言うと、ヨハネの宣教は紀元 28 年 9-10 月頃に始まり、紀元 32 年 3-4 月の死で終わり、イエスの宣教はちょうどヨハネよりも 1 年後にずれて紀元 29 年 9-10 月に始まり、紀元 33 年 3-4 月の死(と復活)で終わったことになります。

冒頭で述べたように、キリストの地上生涯の期間は、神の人類史の年代設計の中心的な役割を担っています。それは「時の満ちる」(ガラテヤ 4 章 4 節)ことであり、「時代の接合＜ギリシャ語で『スンテレイア』:完結とも訳される、二つが一つになる意、英語では consummation と訳され、結婚の初夜で二人が一つになるという意味があります＞」(ヘブル 9 章 26 節後半; ヘブル 1 章 2 節参照)です。七つの千年期時代の進行における 33 年間の幕間＜まくあい＞であり、ユダヤ時代の終了(マルコ 1 章 15 節)[76]と教会時代の開始(マタイ 21 章 43 節; マルコ 12 章 9 節; ルカ 20 章 16 節)を示すものです。この 33 年というのは、(来たるべき御子の予型である)ダビデがエルサレムで統治していた期間＜列王記上2章 11 節＞と全く同じで、いわば人類史の残りの部分が軸となる恵みの期間です。というのは、これは、イエス・キリストが世に与えられていた期間だったということです。しかし世はイエス・キリストを拒みました。

---

[75] ヨハネ 5 章 1 節にある「ユダヤ人の祭り」とは、6 章 4 節で「ユダヤ人の祭りである過越の祭り」という同様の表現が使われていることからも明らかなように、過越の祭りのことです。
[76] ユダヤ時代の最後の 7 年間については、以下をご覧ください。

したがって、年代的には、キリストの誕生は、神の歴史的時間の経過を逆算するための重要な起点であり、一方キリストの死と復活は、その後の歴史の進展を計算するための基点となるものです。紀元前 2 年と紀元 33 年を、それぞれこの二つの重要な出来事の礎＜いしずえ＞の日付とした上で、次に、前者、後者からそれぞれ算出して、人類史の七千年時代に関して、キリストが誕生した年をユダヤ時代の終わり、キリストが十字架に架けられた年を教会時代の始まりの起点として、聖書の記録が指し示す特定の日付をできるだけ正確に探ることをこれから目標としていくことになります。[77]



b. 4-3 日目、および 2-1 日目: 上の年表にあるように、異邦人の時代、ユダヤ人の時代、教会の時代は、すべて二つの千年期間を一組＜すなわち二千年間＞として構成しています。紀元前 2 年のキリストの誕生から逆算すると、聖書の記録は、（上の図で指摘しているような）いくつかの点を考慮すると、アダムの堕落までの 4 千年（ユダヤ人の時代と異邦人の時代という二組の二千年時代）を正確に再現していることになります:

[77] ユダヤ時代の残りの 7 年間（ダニエル書の「第 70 週」）と教会時代の最後の 7 年間（ここでは「艱難期の重なり」と呼ばれます）との関連については、以下を参照してください。

1) イスラエルの時代はまだ 7 年ある(すなわち、ダニエル書の第 70 週、別名艱難時代＜70 週の最後の 1 週、つまり 7 年間＞:ダニエル 9 章 27 節)。したがって、二つの千年期間のイスラエルの時代には、1993 年間だけとなります。

2) バビロン捕囚(紀元前 586-516 年)の 70 年の期間は、神の真理を伝える機構としてのイスラエルの機能が停止していたため、ユダヤ時代の 2000 年にはカウントされません。

この二つの注意点を念頭に置いて、聖書の証拠をアダムの創造まで遡ることが可能です。以下のリストは、重要な聖書の引用をもとに、紀元前 2 年のキリストの誕生から一歩ずつ年代を遡っていくものです。

－ユダヤ人の時代(紀元前 2065 年～紀元前 2 年[78])－。

1. 紀元前 1444 年(出エジプト): ソロモン王の治世 4 年目(紀元前 964 年頃)が出エジプトの 480 年後(紀元前 1444 年頃:すなわち、964＋480＝1444)であるとする列王記上 6 章 1 節の記述に基づいて、(紀元前 2 年からだと)1442 年遡って 1444 年の出エジプトとする[79]。

2. 紀元前 1874 年(ヤコブ、エジプトへ):紀元前 1444 年からさらに 430 年遡り、ヤコブがエジプトに到着した時点。出エジプト記 12 章 40 節(ヤコブ到着後、イスラエルはエジプトにちょうど 430 年滞在したとある)に基づき、紀元前 1874 年に到達することになる。

3. 紀元前 2004 年(ヤコブの誕生):紀元前 1874 年からさらに 130 年遡り、ヤコブの誕生となる。創世記 47 章 9 節で、ヤコブがエジプトに到着したときパロに 130 歳であることを伝えていることによる。

---

78 これは、バビロン捕囚の 70 年間はカウントされないので差し引き、将来の先に起こる艱難時代の 7 年間を加えると、2000 年の期間です。

79「…＜列王記上の6章1節のソロモンが主の宮に着手した年は＞節目の年として最も一般的に受け入れられている年代(紀元前 966/967 年)も、近似値に過ぎません。ローランド・K・ハリソン『旧約聖書入門』(グランドラピッズ 1969 年)184-185 を参照。Introduction to the Old Testament (Grand Rapids 1969) 184-185.。

4. 紀元前 2064 年(イサクの誕生):紀元前 2004 年からさらに 60 年後退してイサクの誕生。創世記 25 章 26 節で、イサクが 60 歳の時にヤコブが誕生したことが記されていることに基づく。

5. 紀元前 2065 年(アブラハムの割礼):紀元前 2064 年から 1 年遡り、ユダヤ時代の始まりとなるアブラハムの割礼(創世記 17-18 章: ローマ 4 章 9-12 節参照)。紀元前 2065 年からキリスト誕生の紀元前 2 年までが 2063 年間、ここからバビロン捕囚の 70 年間を差し引くと、1993 年間がユダヤ時代の 2 千年の全期間となります(これには、ダニエル書の第 70 週の 7 年間、つまり将来の艱難期分が加えられています)。

- 異邦人の時代(紀元前 4065 年～紀元前 2065 年)-。

6. 紀元前 2164 年(アブラハムの誕生):創世記 17 章 24 節に基づき、2065 年からアブラハムの誕生まで 99 年遡る。

7. 紀元前 2456 年(大洪水):創世記 11 章 10-26 節に基づき、アブラハムからセムに至るまでの年数を追加して、紀元前 2164 年から大洪水まで 292 年遡る。

8. 紀元前 3056 年(ノアの誕生):創世記 7 章 6 節; 7 章 11～8 章 14 節に基づいて、セムからノアまでの年数を加えて、紀元前 2456 年からノアの誕生まで 600 年遡る[80]。

9.紀元前 4112 年(アダムの創造): 創世記 5 章 3-29 節に基づき、ノアからアダムまでの年数を加えて紀元前 3056 年からアダムの創造まで 1056 年遡る。

紀元前 2065 年から紀元前 4065 年までの「異邦人の時代」をちょうど 2000 年として、4112 年から後者の数字を引くと、アダムが罪を犯して園から追放されたのは、年代的に 47 歳の時である。(正しくは、アダムが創造された時はすでに成人であり、それから 47 年後にエデンの園を追放された:4112 - 4065 = 47)。

---

[80] 創世記 7 章 6 節には、洪水が起こった時ノアは 600 歳であったと書かれていますが、同じ章の 11 節には、洪水は彼の 600 年目に始まったと書かれています(彼はまだ 600 歳になっていなかったことを示唆しています)。しかし、この明らかな矛盾に対する答えは、洪水の期間が長かったため(創世記 7 章 11 節と 7 章
24 節-8 章 5 節を比較)、ノアは箱舟の中にいる間に 600 歳になったということです(創世記 8 章 13 節)。

c. 5 日目と 6 日目：主の十字架と復活の年である西暦 33 年から 2 つの完全な千年の期間を進めると、主の再臨と千年王国支配の始まりの年である西暦 2033 年になります。この合計から 7 年を引くと、7 年間の艱難時代の開始は西暦 2026 年となります。主の十字架と復活は春の過越祭の時期に行われましたが、艱難時代は秋に行われる祭りの周期から始まります（上記 II.7.3 項参照＜ーユダヤ暦図表とその説明の部分＞）。6 ヶ月目の休止期間（西暦 2026 年の春と秋の間）は、「半時ばかりの静けさ」（黙示録 8 章 1 節）を構成し、その大きな「試練の時」が始まる前の最後の猶予期間となります（黙示録 3 章 10 節）。

d. 三組の日の分岐点：上記のように、異邦人時代、ユダヤ人時代、教会時代は、それぞれ二つの千年期間の時代から構成されていますが、二つが一つに一体化したものです。したがって、これら 3 組の二つの千年期間（すなわち、1 日目-2 日目； 3 日目-4 日目； 5 日目-6 日目）には、二つの千年期間をはっきりと分離し、区別するための明確な出来事がないことは、予想外のことではありません。この三組において二つの千年期の間に明確な区切りがないという現象は、7 日計画の他の区分（すなわち、異邦人時代の開始としてのアダムの堕落、ユダヤ人時代の開始としてのアブラハムの割礼、ユダヤ人時代の［一時］終結としてのキリストの誕生、教会時代の開始としてのキリストの死と復活、教会時代［およびユダヤ人時代：すぐ下を参照］の終結としてのキリストの再臨）を分ける非常に明確な区分とは明らかに対照的です。

このように、三組において二つの千年期の間に比較的に重要な区切りがないことは、（それぞれの組が本質的に不可分の連続した全体の一部であるという事実に加えて）三つの組の、組と組の間の区切りが本当に極めて重要であることを考慮すれば、より理解できることです：

アダムの堕落：メシアの最初の約束（創世記 3 章 15 節,3 章 21 節）。
アブラハムの割礼：子孫についての明確な約束（創世記 17 章 1-27 節）
キリストの誕生：ことばが肉となる（ヨハネ 1 章 14 節）
キリストの死と復活：救いの約束の成就（第2コリント 1 章 19-20 節）
キリストの再臨：復活と王国（黙示録 20 章 4-6 節）

しかし、三つの組のそれぞれの千年期間の中に正確な分岐点は存在しないものの、（本節の冒頭でその違いを説明したとおり：II.7）それぞれの日のほぼ中間地点に、それぞれの千年期間の特徴の変化を示す移行期があることは事実です：

1)　第 1 日目と第 2 日目：異邦人の時代の年代的な中間点（紀元前 3065 年）のすぐ後に、ノアが誕生しました（3056 年）。ノアの誕生は、いくつかの理由で重要です。第一に、大洪水の結果、地球が受ける様々な変化を告げる特別な預言がありました（創世記 5 章 29 節）。第二に、大洪水は異邦人時代の第二千年期（の約 600 年後くつまり 3065-600＝およそ 2465 年ごろに起こりましたが、ノアの時代は、この時代の第一千年期とは異なるものでした。それは人口が大幅に増加する時代の始まりでした。この時代は、悪魔が天使の種を混入して真の人間の血統を抹消しようとした、人類に対する最も恐ろしい悪魔の攻撃の一つを特徴とする時代でもありました（すぐ下のセクション III を参照）。この悪魔の策略に当時の人類は進んで参加し、洪水の時にはノアとその近親者以外には、真の＜人間の血統を持つ＞人類はほとんど残っていませんでした。このように、悪魔の激しい攻撃、それに対するノアの英雄的な抵抗、そして箱舟の建造という前代未聞の証しが行われた時代は、アダムが倒れてから 1000 年後の状況とは、範囲も広がり、明らかに対照的な時代でした。さらに、ノアとその家族を除いて、キリストと真の人類の血統であるアダムの直系は、洪水の年までにすべて死に絶えていたのです（アダム 3187 年、エノク 3125 年、セス 3070 年、エノシュ 2972 年、カイナン 2877 年、マハラエル 2822 年、ヤレド 2690 年、ラメク 2461 年、メトセラ 2456 年は、まさに洪水の年です）。このように、ノアはエデン後の世代の人であり、また洪水後の最初の世代でもあります。したがって、時代を二つに分ける確固とした分岐点とはならないもののノアの誕生は、異邦人の時代を構成する 2 つの千年の期間の真ん中ほど＜紀元前 4065～紀元前 2065 年のほぼ中間 3056 年＞になるので、二つの千年の境界点を成していると言えるでしょう。

2) 3 日目と 4 日目：年代を正確に確定するのは難しいですが、イスラエルの時代＜紀元前 2065 年～紀元前 2 年の二つの千年期間＞の年代的中間点である紀元前 1065 年は、ほぼ王政の始まりに当たります[81]。主によって最初に油注がれたサウルは、神の目に適う者にはなりませんでしたが（サムエル記上 13 章 14 節, 15 章 28 節）、その後、神の御心に適うダビデに託され（サムエル記上 16 章 7 節; 使徒行伝 13 章 22 節）、神の偉大な御子、主イエスキリストが将来、率いることになる神権のモデルとなりました（詩篇 110 篇）。政治的にも預言的にも、イスラエル王国の樹立は極めて重要な出来事です。したがって、これもまた、厳密な分岐点ではありませんが、王政の確立に、ユダヤ時代の二つの千年期の区切りを見出すことができると思います。

[81] 列王記上 2 章 11 節と使徒行伝 13 章 21 節（そして、修正によって、サムエル記上 13 章 1 節から「42」と読めば）の情報を比較すると、サウルが王に任命されたのは紀元前 1050 年頃と推測できます（ダビデの 40 年の統治とサウルの 42 年の統治をソロモンの召天（紀元前 968 年）に加えます）。サウルはそのちょうど中間点で約 15 歳だったことになります。

3) 5 日目と 6 日目: 同様に、＜33 年～2033 年の二つの千年年期間の＞教会時代は、その始まり（キリストの死と復活）にも終わり（キリストの再臨）にも、神学的意義に迫る真の区切りはありません。しかし、それ以前の異邦人時代とユダヤ人時代と同様に、教会時代の二つの千年期の間は、重要な相違点によって区別され、その相違点を反映する出来事があり、年代的に中間地点である紀元 1033 年頃に起こった出来事によって分割されています。11 世紀は、さまざまな意味で教会時代の転換点でした。それは十字軍（極端な政治的「キリスト教」）、帝政ローマ教皇庁の始まりでした。また、修道会とスコラ学の集大成、異端審問といくつかの教派に対する迫害の始まり、そして最終的に東方教会と西方教会の分裂をもたらしました。これらの出来事は、紛れもなく初代教会の終焉を意味し、その代わりに、二番目の千年紀を通じて真の信仰と霊的成長を阻害する組織的な偽キリスト教が形成されていきました。興味深いことに、教会時代の中間点である西暦 1033 年に、第 9 代ベネディクトがわずか 12 歳で教皇となり、後にその職を銀貨数千ポンドで売却したことは、当時の組織的な「キリスト教」が完全に破綻したことを示すにふさわしい記録です。教会時代の最初の千年間は、より厳格で一枚岩の形態で、これはある意味では必要でしたが、第二の千年間は、それらから解放され（上に指摘したように、聖書を普及させ、それを正しく教えるために人を教育する手段を開発するため）、神の言葉を知ることができるようになり、間違った教条主義によって致命的に妨げられることなく、世界のあらゆる場所に拡大したのです（最初の千年期の終わり頃には、聖書に書かれていない教えを強制的に遵守させることがますます顕著となり、宗教改革につながる背景となりました）。

e.艱難期との重なり: 7 日目（至福千年）に移る前に、最後の問題に取り組む必要があります。 神の御計画の年代についての聖書釈義には、7 年間の艱難をイスラエルの時代だけに当てはめるという一般的な誤謬があります。 このような解釈によると、艱難は教会時代にいわば「後付け」された形で、教会時代が終わった直後に起こるというものです。 この誤った見解は、教会の艱難前の「携挙」という誤った概念に影響されているだけでなく [82]、イスラエルと教会を真っ二つに分ける誤った考え方の一部でもあります [83]。 私達が見てきたように、実際にはイスラエルは、異邦人という枝が繋がっている木なのです。教会時代の異邦人信者は、増え続けるユダヤ人信者とともに、教会時代の真の終わりを示す出来事であるキリストの再臨まで、キリストへの信仰を貫き通します。しかし、この時代の最後の 7 年間は、世界がまだ見たことのないような激しい苦難の時代となります。艱難期と呼ばれるこの期間は、警告と裁きの 7 年間となります。 それは

[82] 信者の生ける復活（または携挙）は、キリストの再臨の時に起こるのであって、艱難の前に起こるのではありません（この教理の詳細についてはペテロ#27 を参照）。
[83] 前述したように（第二節「イスラエルの独自性」）、キリストの教会はアダムとエバから再臨の時に主が戻られる時までのすべての信者から構成されており、キリストの集まりが満ちる時代である教会時代に信じた者だけではありません。

また、イスラエルの（部分的な）再覚醒の時であり、神の家族の中でイスラエルの指導的役割が再び主張され始める時でもあります（二人の証人、モーセとエリヤ、144,000人の働きを参照）[84]。艱難の 7 年間は、教会時代（その最後の 7 年間）とユダヤ人時代（その最後の 7 年間：ダニエルの 70 週目）の両方に属しています。このように、ユダヤ時代と教会時代は、キリストの生涯によって最初は分けられますが（キリストの誕生は、前者の一時的な終わりと後者の始まりを意味します）、最終的にはキリストの再臨に先立つ時代で結び付けられ、終末論的な出来事が強まり、主の再臨で頂点に達するというように、歴史のクライマックスで両時代が合流するのです。このような時代の重なりは、例えば、ユダヤ教の儀式カレンダーにあるトランペット祭と贖罪祭が教会時代のギャップ期間に含まれていることを説明しています（つまり、艱難が教会時代の中で起こるからです：上記の第二節要約 3 と図表 3 を参照）。教会時代の中に艱難期が起こることを示す他の証拠として、以下のものがあります：

1) キリストの体を構成する異邦人の完成は、再臨に（すなわち、艱難期の終わりに：ローマ 11 章 25-26 節）おけるイスラエルの心の変化と一致していること。

2) 「異邦人の時代＜英文では複数の times＞（つまり、1000 年の期間の複数＜として 2000 年＞：ルカ 21 章 24 節）」と表現されている現在の時代の終焉は、エルサレムが「踏みにじられる」のが終わる時（つまり、キリストの再臨は艱難の終わり）という事実。

3) 現在の教会時代の反キリスト型の欺瞞者らの傾向は、艱難の中で反キリストが現れることによってのみ頂点に達するという事実（第一ヨハネ 2 章 18 節）。

4) 預言されている（そしてすでに観察可能な）教会の背教の傾向は、艱難においてのみ成就するという事実（黙示録 3 章 14-20 節と第二テサロニケ 2 章 3 節を比較）。

5) 教会時代は、現実的かつ聖典的に「終わりの時」の一部であり（第一コリント 10 章 11 節; ヘブル 1 章 2 節; 第一ペテロ 1 章 20 節; 第一ヨハネ 2 章 18 節）、「終わりの日」の決定的な期間である艱難から除外されるのであれば、この原則はほとんど意味をなさないこと。

6) 最後に、おそらく最も重要なことは、クリスチャンとしての私たちの希望の多くは、大

[84] ヨハネの黙示録やその他の箇所における艱難時代の出来事の象徴や描写も、イスラエルが支配的な役割を担っていることを描いています（黙示録 12 章に登場する「女イスラエル」や、旧約聖書全体を通して艱難時代の言及とイスラエルの回復が密接に関連していること、特にイザヤ書 25-27 章と 34-35 章を参照）。

艱難期の終わりに起こる主の再臨を心待ちにすることにあるという事実です(1 テサロニケ 4 章 13-18 節; テトス 2 章 13 節、詳細に関してペテロ#27 参照ください)。

艱難期が教会時代の中に重なるように含めることによって、私たちの時代は、それが到来したときと同じ奇跡的な方法で、すなわち、大きなサタンの反対と卓越した神の備えと現れによって終わるのです(ヨエル 2 章 28-32 節参照、この箇所はペンテコステと再臨に先立つ出来事に同じように適用されます:使徒行伝 2 章 16 節、21 節を参照してください。イザヤ 32 章 15 節, 44 章 3 節; エレミヤ 31 章 33-34 節; エゼキエル 36 章 24-27 節, 37 章 9 節; ゼカリヤ 12 章 10 節も参照のこと)。

最後に、この二つの時代の重なりの原則を、私たちが構築している年表に当てはめると、艱難期の開始を見出すためには、教会時代の 2 千年からこの＜ダニエルの第七十週目の＞7 年間を引かなければなりません。前述の半時の沈黙が半年間の猶予期間であることを考慮すると(黙示録 8 章 1-2 節)、艱難時代の開始は 2026 年秋となる可能性が高いと思われます。

f. 7 日目:至福千年時代: 至福千年時代は、ある意味で人類史の 7 日間の頂点であり、悪の元凶であるサタンがこの世から一時的に取り除かれ(黙示録 21 章 1-3 節)、神の子、御自身が地上を支配し(黙示録 11 章 15 節)、罪深い人類が経験できる最も完璧に近い祝福の時です。至福千年時代は、キリストの再臨後、(短期間の浄化期間を経て)ほとんどすぐに始まります: ダニエル 12 章 11-12 節; エゼキエル 20 章 34-38 節; ゼカリヤ 13 章 8-9 節; マタイ 3 章 10-12 節, 25 章 31-46 節; ルカ 3 章 9-17 節; 第二テサロニケ 1 章 7-8 節参照)、そして 1000 年(約 2033-3033)続きます。その千年が経過すると、悪魔は解放され、＜神に反抗する＞人間の反乱と迅速な神の裁きが短期間で起ります(黙示録 20 章 3 節, 20 章 7-10 節)。聖書は、この歴史の追記の長さについて沈黙しています(ただし、「短い」＜NKJV では a little while　すこしの間＞:黙示録 20 章 3 節,黙示録 20 章 7-10 節)。しかし、その終わりには、私たちの知る世界は存在しなくなり、私たちは永遠の家、新しい天と新しい地(義だけが住む場所)に永遠に住まうことを知っています(第二ペテロ 3 章 10-13 節; 黙示録 21 章 1-4 節: 参照:イザヤ 60 章 21 節参照)。この「新しい日」には終わりがなく、神を選んだ私たちは、神と御子と共に永遠に生きるという計り知れない特権を得ることになります(黙示録 22 章 3-5 節)。「主の日」が土曜日の安息日(歴史の 7 日間構造における 7 番目の千年王国)から日曜日に移行することは、決して終わることのないこの「新しい日」を示し、想起させるものです(黙示録 1 章 10 節)。

要約： 神を認めない者の目には見えませんが、人間の歴史は完全に神の計画に従うものであり、全歴史の要点は神の御子イエス・キリストと、彼を受け入れ、彼に従うことを望むすべての人々の救いです。

> 私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた、永遠＜原語では「アイオン＝長い時代」＞のご計画によるものです。（エペソ 3 章 11 節 新改訳Ⅳ）

> 御旨の奥義を、自らあらかじめ[キリストにあって]定められた計画に従って、わたしたちに示して下さったのである。それは、時の満ちるに及んで実現される[真理を時代ごとに明らかにしていく]ご計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。（エペソ1章 9-10 節）

裁き、回復、置き換えの第一段階（本連載で十分に紹介した）において、神は地上（サタンの反逆の場）を裁き、回復させ、人類の創造を通して、悪魔とその従者を、神を選択する人間に置き換えるという歴史的プロセスを開始されたのです。サタンがアダムとエバを誘惑したことは、このプロセスを逆転させるどころか、救い主を人類史の中心に（神から見て）直接登場させることになりました。悪魔は今後、信仰の継承者の系統、メシアの系統、そしてあらゆる信仰生活に対抗しますが、キリストの到来と、私たちのための効力ある犠牲によって実現される神の御計画の進行を阻止することはできないでしょう。この驚異的な勝利は、神の計画の最終的な実行において、次の二つの段階である裁き、回復、置き換えの礎となりました。しかし、裁き、回復、置き換えの第 2 段階と第 3 段階を取り上げる前に、まず、サタンの「対抗計画」、つまり、上記の議論に概説された、神の計画の歴史的行進に反対するサタンの対抗戦略を検討する必要があります。

III. サタンの対抗戦略

このシリーズでは、今まで、サタンの世界システム、すなわち、悪魔が自らの目的のために、人類を支配しようとする際に用いる戦術的な教義と方法論を研究してきました。これからは、神の計画を挫折させようとして、サタンがどんな対抗戦略策を大規模に用いているか（そしてこれから用いようとしているか）について調べていきます。

イエス・キリストという約束された人物における神の救済計画（上記 II 節で扱った）は、完全にサタンに不意打ちを食らわしました。そして、救いに与ることができるという約束の下で、サタンとその従者たちが最終的に処分されることになる神の御計画は、人類の歴史において否が応でも推し進められてきたのです。堕落天使らがその強さゆえにできないことを、罪深い状態にある人間が、その弱さによって救い主から与えられる恵みに応えて憐み深い神のもとに立ち返るようになるのは、ただ時間の問題でした。この必然的な進展に直面したサタンの唯一の選択肢は、イエス・キリスト御自身とそのみ業を受け入れる人類を救済しようとする神のご計画に対して、あらゆる可能な方法と手段をもって反対することでした。イエス・キリストによる贖いが人類史における神の御計画を要約して表しているように、キリストへの信仰に反対することは、悪魔の世界システムの存在目的であるだけでなく（このシリーズの第 4 部を参照）、神の壮大な御計画が実行されるにあたっての、サタンの基本的な反応なのです。

これまで見てきたように、エデン後の人類の歴史以来、悪魔はこれといった戦略を持てないでいました。単なる被造物であり、人類の益にとって何の役割も持たない悪魔がとる戦略があるとすれば、ただ神のなされることに対して反対することしかありません。つまり、神の計画を阻止しようとすること以外には、彼自身のしっかりとした計画はないのです。アダムとエバを誘惑し、神の御計画を食い止めようとして(女から出る子孫によって救いがもたらされるという神の約束を予知することはできずに)阻止された悪魔は、今や、阻止不可能な人類のための神の究極的な御計画に、ただ対抗するしかないという状態にあるのです。悪魔とその勢力は、それが無駄なことであるにもかかわらず、昔から今に至るまで、極めて精力的に人類を神から遠ざけようとしてきました。人間−特に信仰を持つ人間−は、常に重要な「攻撃の的」でした。しかし、（本シリーズの第 4 部　サタン世界システムの目的　で取り上げたように）人類全体を欺き、滅ぼすためにあらゆる手段を用いるというのは、悪魔の変わらない方針なのですが、これから取り上げる主題は、人類が神の御計画にとって重要であるゆえに、サタンにとっても必然的に重要となる、人類の歴史における特定の「主要ターゲット」に対する集中戦略に関してです。

1. 洪水以前のサタンによる人間の純血に対する攻撃（ネピリム）

前にも述べたように、悪魔とその天使は、その優位な能力でもって人類を対処するだけであれば、人類はもちろんのこと、地球上のすべての生物を消し去ることができたはずです。しかしサタンは、神の主権によって、この最も直接的な攻撃を阻まれたため、最初の反撃として、人類の完全な抹殺とほぼ同等の効果をもたらすもの、すなわち、人類を汚染し堕落させて、もはや真の人間でなくさせる方法を選びました。

この最初のサタンの反撃の背景は、創世記 6 章に記されているエデン後のセツの子孫（ノアとその家族を除いて、大洪水の前にすべて死に絶えた：すぐ上のセクション II「分岐点」参照）の世代の信仰者の衰退期です。サタンはエデンの後、人類は死すべき状況になったけれども、ゆくゆくは人類（そして神を信じる者たち）の増殖が、やがて自分とその信者＜堕天使＞に取って代わるのに必要な数を生み出すことになるという約束が、確実であるということがわかるまでは待ちの姿勢でいたのかもしれません。悪魔は、もし人類の血に不純物を混入させることができれば、そしてその不純物が全人類に及ぶ時、正当な後継者となる真の人間性を持つ者がいなくなり、究極の宿敵である女の子孫がこの世に誕生することもできなくなるだろうと、狡猾に推測していたのでしょう。悪魔がこのために取った手段は、彼に従う者＜堕天使＞達に人間の女性と同棲させることでした（そして＜ノアたち＞八人の例外を除いて達成したのです）。

ここで、このようなことを付け足さなければならないことは遺憾ですが、必要があるので少し述べさせていただきます。洪水、ヨナとクジラ（文字通りには「大きな魚」）、紅海が二つに分かれることといった超自然的な活動に関する聖書の記述は、何らかの理由で他の聖書の記述よりも、聖書の読者のある種の感性を傷つける部分の一つのようです。ここの箇所が、どうしてそんなにも明白でないものになってしまうのでしょう。聖書は超自然的な書物であり、事実上すべての節に、究極の霊的、超自然的、非物質的な、宇宙の神の御手が、私たちの物質世界に反映されているというのに。創世記 6 章に描かれている出来事は、実際に起こったことです。なぜなら、聖書はそのことを明確に伝えているからです。（そうではないと熱心に説明しているごく一部の人達がいますが）この章の本文は、事実について非常に明確に述べています。また、もし疑問があるとすれば、この問題を多かれ少なかれ直接的に論じている新約聖書の箇所がいくつかあり、創世記 6 章をここで示唆されている以外の方法で解釈することはほとんど不可能です（1 第一ペテロ 3 章 19-20 節; 2 第二ペテロ 2 章 4-9 節; ユダ 5-7 節）。したがって、創世記 6 章の「天使の同棲」解釈は、初代教会で支持されただけでなく、それに反論するには、霊感を受けた新約聖書の著者のうち二人が「間違っていた」か「おとぎ話にふけっていた」と見なすことになる立場に立つことになります。

創世記 6 章 1-2 節 天使の同棲

> 人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生れた時、神の子たち（すなわち、堕天使たち）は人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとった。（創世記 6 章 1-2 節）

＜さて、人が大地の面に増え始め、娘たちが彼らに生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、それぞれ自分が選んだ者を妻とした。（創世記6章 1-2 節 新改訳Ⅳ）＞

テーマに戻ると、創世記 6 章の出来事の時間軸は、前述のように、異邦人時代の第二千年の日のおよそ三分の一、つまり、エデンの後の世代の最後の時期です。この時代は、上記の箇所からわかるように、人口が急速に増加し、新しい住人は、堕落（とアダムとエバへの預言）から何年も何世代も経った時代です。また、セツ直系以外の霊性が希薄な世代であり、このことが悪魔に攻撃の機会を与えることになりました。

まず、ここに出てくる「神の子たち」という言葉は、間違いなく天使を指しています。これは、この章の冒頭で述べたような超自然的なものの存在に対する偏見から、明確な意味を受け入れたくない人々が、この箇所に別の訳を施そうと巧みに試みたにもかかわらず、そうなっています。というのも、人類に娘たちだけが生まれてきたと解することはできません。ここで述べられている人口増加のためには、当然ながら男女の両方が生まれてくることが必要です。ですから、そうではなく、娘たちは、次に述べる「神の子」（＝堕天使）の関心を引く対象として見られることになったのです。なぜなら、私たち人間の基となる子孫を産むのは女性であり（処女懐胎を考えてください）、この悪魔の戦略の当然の標的だったからです。さらに説得力があるのは、聖書の他のあらゆる箇所で、「神の子たち＜ベネ・ハエロヒム＞」という表現とその派生語が、人間ではなく天使を指しているという事実です（ヨブ記 1 章 6 節, 2 章 1 節, 38 章 7 節 [無冠詞]; 詩篇 29 篇 1 節[詩篇 103 篇 20 節,148 篇 2 節参照]、詩篇 89 篇 6 節 ベネ・エリム *beney-'elim*）。最後に、前述したように、創世記 6 章の出来事について言及している新約聖書の箇所が三つあり、三つとも堕天使とここに書かれている活動とを明確に結びつけています：

その霊においてキリストは、＜牢獄に＞捕らわれている（天使の）霊たちのところに行って＜勝利を＞宣言されました。[これらの天使は]かつてノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して（裁きを遅らせて）待っておられたときに従わなかった霊たちにです。（第一ペテロ 3 章 19 節, 20 節前半　新改訳Ⅳ）

神は、罪を犯した御使いたちを放置せず、地獄（タルタロス；　すなわちアビス＝底知れぬ所）に投げ入れ、暗闇の縄目につないで、さばきの日まで閉じ込められました。
また、かつての世界を放置せず、不敬虔な者たちの世界に洪水をもたらし、義を宣べ伝えたノアたち八人を保護されました。

また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、不敬虔な者たちに起こることの実例とされました。
そして、不道徳な者たちの放縦なふるまいによって悩まされていた正しい人、ロトを救い出されました。
この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。
主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。
特に、汚れた欲望のまま肉に従って歩み、[神の]権威を侮る者たちに対して、主はそうされます。(第二ペテロ 2 章 4 節～10 節前半 新改訳Ⅳ)

あなたがたはすべてのことをよく知っていますが、思い起こしてほしいのです。イエスは民[全員]をエジプトの地から救い出しましたが、その後、信じなかった者たちを滅ぼされました。
またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下(すなわちアビス)に閉じ込められました。
その御使いたちと同じように、ソドムやゴモラ、および周辺の町々も、淫行にふけって不自然な肉欲を追い求めたため、永遠の火の刑罰を受けて見せしめにされています。(ユダ 5～7 節　新改訳Ⅳ)

新約聖書の三つの箇所はすべて、大洪水直前の堕天使の不法なふるまいにより、(奈落の底に)閉じ込められたことに言及しているのに注意してください。さらに、二番目、三番目の二つの箇所(第二ペテロ 2 章 4-10 節とユダ 5-7節)は、このふるまいを、ソドムとゴモラで行われた行為と同等の非道さ(ただし、その具体的内容は明らかに同一ではない)であるとし、不法な性行為と明確に結び付けています。最後に、三番目の箇所(ユダ 5-7節)は、堕天使と自らの意思で婚姻を求めた人間の女性との関係は、天使がおるべき領域を無断で放棄したことを示すものである(これらの罪を犯した者達に厳しい裁きが下された一つの理由である)、と極めて具体的に述べているのです。
創世記 6 章の天使的解釈に対する第一の反論、すなわちいわゆる「異常である」からという反論は、この広範囲の研究によって取り除けられたことを望みます。というのも、天使が人間の女性と同棲することは、何の説明もないなら、奇妙であると同時に、あり得ないと思われるかもしれないことはわかります。しかし、あらゆる方法で神の計画に抵抗する悪魔の戦略があることを考えるなら、人類を汚染する(それによって事実上

破壊する)ために、悪魔のより無謀な従者たちに加担させることには、特別な冷たい論理が横たわっています。この作戦が成功すれば、汚れのない純血な人間の種である約束のメシアの誕生は(すべての人間が天使の一部となれば)不可能になるということです。

(本章の冒頭で引用した)創世記 6 章 1-2 節は、これらの出来事の明白な背景を明かしていません。人類の急速な拡大は、神とその自然法則を認めること(ましてや従うこと)に関して、より無頓着にさせました。これは確かです。なぜなら、この地上で初めて(しかし、最後ではない)見られた人間の行動の堕落のひどさは、大洪水が唯一受け入れられる救済策となるほどの神の怒りを招くもととなったからです(創世記 6 章 5-8 節; 6 章 11-13 節; 以下参照)。こうした状態は、アダムとエバを堕落させることに成功して以来の大きな戦略的機会をサタンに与えることになりました。サタンは、人間を直接的に破壊することを禁じられ(そうでなければ、とっくにこの明白な解決策をとっていたでしょう)、人間を虐殺して絶滅させようとする試みも頓挫したので(カインがアベルを殺した後、神が殺人を禁止したため)、今度は、増え広がった霊的に弱い人々の間に、いわば致命的な疾患をもたらすという興味深い可能性を見出すことになったのです。もし、(強制的に人類を滅ぼすに至る)疾患を人類にもたらすことが許されないのであれば、そのような病気にかかる機会を提供し(あとは人間の自由意志によって)選ばせることで、やりおおせると考えたのです。彼の従者の一部の者達と同棲する機会を提供することは、魅力的なパン種の一つであり、やがては塊全体に影響を与えることになるのです。私たちの周りで激化する目に見えない争いの中で、人間の自由意志を尊重するという原則に留まらなければならないのなら、最初の出会いを＜魅惑的なものにして＞自発的にさせればよいのです。この計画の極悪非道なところは、この種は一度植えられたならすぐに広がってしまうということです。最初、ほとんどの人々はこのような忌まわしい関わりを拒否するかもしれませんが、「優秀な」子孫を残すため、このような申し出を受け入れる、あるいは自ら求める者も出てくることでしょう。そして、たとえこのような申し出を拒否したとしても、その「勝利」は人類にとっては一時的なもので、それを受け入れれば永久的な「損失」となるような状況が考えられます。天使の種が人間の遺伝子に取り入れられると、遅かれ早かれ、すべての人間の家族が感染し、(常に選択によって)その感染は広がり、ついにはメシアのための純粋な血統を保つ可能性はなくなるということです。

このような＜サタンにとって＞魅力的な可能性とは裏腹に、この計画には問題がありました。よく知られている、それに対する神の対処です。すなわち、世界規模の大洪水によって、すべての人間を絶滅させたことです。しかし、サタンが企てた人類汚染計画に参加した天使たちに対する神の対処は、あまり知られていませんが、同様に畏れの念を抱かせるものです。この出来事の後、人間と同棲する罪を犯したすべての堕天使は、最悪の厳しい罰(最終的な刑の執行においても)を受けることになります。「自分の

おるべき所を捨てた」罰として、光のない奈落の底に落とされるのです（第一ペテロ 3 章 19 節; 第二ペテロ 2 章 4 節; ユダ 1 章 6 節）。これは、光の創造物にとっては、堕落した状態であっても恐ろしいことでした。この恐ろしい予感のゆえに、ガダラ人＜口語訳ではゲラサ人＞に取り憑いた「レギオン」の悪霊どもは、この恐ろしい場所に閉じ込めないようにとキリストに必死に懇願したのです（ルカ 8 章 31 節、ユダ 6 節参照、黙示録 9 章 1-11 節, 9 章 13-16 節, 20 章 1-3 節, 20 章 7 節）[85]。

したがって、人間がその結果がどうなるかを十分に認識した上で不正な性行為を行ったように、堕天使の中には、全能の神からの迅速かつ確実な裁きが待っていることが明らかであるにもかかわらず、（明らかに）悪魔によってこの行動を取るように誘導されたと推測されます。サタンは、どう考えても（今でもコスモス＜秩序と調和のある宇宙の意＞に悪魔の「軍団」が放たれている）、自分の信奉者全員にこのような無謀な行動をとらせることはできなかったし、おそらく自分の最高の部下にもそうさせたくはなかったことでしょう。しかし、ここに記されている出来事は、彼が「自分達のおるべき場所を捨てた」結果、自分達に降りかかることになる危険も厭わない幹部を見つけることができたことを示します。このシリーズの第 1 部で堕天使が肉体を欲していることをすでに指摘しましたが（第 1 部、IV.3.b）、今回の出来事はこの原則に付随するものと見ることができるでしょう。創世記 6 章 2 節に記されている、選択（すなわち「自分が選んだ」）は、この結論を裏付けています。また、重要なのは、この聖句には強制力がないという事実で、この結婚は女性たちの自発的なものであり、さらには当時の結婚に家長が関与していたことを考えると、その父親たちの自発的なものであったこともわかります。

創世記 6:3 聖霊の抑制

> 主は言われた。「わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない＜英文では「いつまでも争うことはしない」＞。人は肉にすぎないのだから。[これは肉の道だから]」こうして、人の一生は百二十年となった。（創世記6章3節　新共同訳）

上記の節に見られる神の嘆かわしい言葉は、創世記 6 章 1-2 節に記述された＜天使と人間の＞異類婚姻のすぐ後に続くものです（前の二つの節が、創世記 1 章 28 節で神が命じられたような普通の生み、増えることに関するものであるなら、意味が成り立ちません）。第3節は、二重の非常に厳しい裁きを示唆しています。わずか 120 年（当時の寿命では短い）で、神は＜洪水前の＞人類に終止符を打たれるというのです。そして、来たるべき洪水後の世界で生き残る人々＜ノアたち＞の子孫においても、それまで人間が経験してきた長寿（場合によっては千年近く）がわずか 120 年にまで縮め

[85] このシリーズの第 4 部をご覧ください。

られ、以前の非常に長かった寿命の年数に近づくことはほとんどなく、それを超えることもまれなものとなりました[86]。しかし、このような悲惨な裁きの中にあっても、神の慈悲深さは明らかに見てとれます。というのも、この 120 年という期間は、地上に残された一つの信仰者家族（ノアの家族）にとって、神が選んだ救済の手段である箱舟を完成させるために必要な時間を与える重要な猶予期間であったからです。私たちの神のこのような忍耐によって、私たちは救い出されるのです（1 第一ペテロ 3 章 20 節; イザヤ 48 章 9 節; ローマ 2 章 4 節; 第二ペテロ 3 章 9 節, 3 章 15 節参照）。

創世記 6 章 4 節：ネピリム族＜口語訳ではネピリム、新改訳や新共同訳ではネフィリム＞

> そのころ、またその後にも（つまり、洪水前の 120 年の猶予期間が始まる前も後も）、地にネピリムがいた。これは神の子たちが人の娘たちのところにはいって、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士（ネピリム）であり、有名な人々であった。（創世記 6 章 4 節）

七十人訳の「巨人」と言う訳は明らかに受け入れがたいため、現在では、ヘブル語のネピリム（nephiliym: נפים）の音訳がそのまま標準的に用いられています（NASB と NIV を参照）。しかし、七十人訳で用いられている訳は、ギリシャ神話に使われている対応語なので、これらの「生き物」は（ギリシャ神話の巨人がそうであったように）完全な人間ではないととれることは明らかで、少なくともその点は確実です。創世記 6 章 4 節まで来ると、ネピリムを完全に人間であるとする解釈は多くの困難にぶつかってしまいます。上の聖句では、ネピリムが「神の子」の子孫であるという事実が、ネピリムの異常な性質と直接関係しています。この「神の子」が普通の人間であるならば、この記述はほとんど意味を成しません。ナフィル（ヘブル語：נפיל、ネピリムは複数形）という言葉の語源もまた、啓発的です。語源であるナファルは「落ちる」という意味であり、名詞形成の qatiyl はここでは受動的な意味を持ちます（通常「鎖につながれた者」あるいは「囚われ人」の意味である`asiyr, אסיר を参照）。ネピリムは、a) 純粋な人間から「堕落」し、b) 堕落した天使の子孫であり、c) 霊的な意味でも堕落し、神との関係を望む気配はな

[86] この寿命の短縮は、洪水後（創世記 11 章 10-26 節の系図を参照）、洪水期以後の気候条件（上記Ⅱ.7.5 節で説明）の影響による衰弱が始まるにつれて、段階的に行われることになります。モーセは、ノアの息子たち以来、この節目を迎えた数少ない人間の一人であり（申命記 34 章 7 節）、人間の典型的な寿命は 70～80 年であると記しています（詩篇 90 篇 10 節）。

い者達で、これらから導き出される結論は、120 年に及ぶ神の寛大な審判延期に彼らは応じなかった（ノアとその家族だけが箱船に入った）ということです [87]。

創世記 6 章 5-7 節：神の判断

> 主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、[ご自分がそうなさったことに]心を痛め、「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる」と言われた。（創世記 6 章 5-7 節）

現代においても、アダムからの子孫である私たちの死すべき体に宿る罪のために、人類は普遍的に悪に向かっています [88]。しかし、ここに描かれた悪の強烈さ、つまり他の何ものも比類しないほどの悪、想像を絶する悪は、その濃厚さと極悪さの両面において明らかに前例のない事態です。この地上を支配することとなった悪への強烈な傾倒は、この時点で人類の大多数が＜堕天使と＞混じってしまっていたためであることに疑いの余地はありません。彼らは天使の先祖の遺伝子を得ることになり、（今日もその才能と身丈と共に名声を享受していますが）[89]、彼らの反抗的で頑なな性質については [90]、本シリーズの最初の章の天使についての研究において学びました。

また、先史時代の地球上の状況に対して、人間の見方と神の見解の間には大きな違いがあることに注目することも重要です。人類がネピリムのような類まれな能力（肉体

---

[87] 民数記 13 章 33 節の「ネピリム」の記述を正しく理解するためには、全体をよく理解することが大切です。カナンのアモリ人を「ネピリム」と名付けたのは、その土地を調べるために派遣された臆病な斥候に由来します。彼らの落胆と信仰のない証言によって、全会衆が罪に陥り、約束の地を受け継ぐことなく荒野で死に絶えることになります。恐怖のあまり、この臆病者たちは、同胞がこの地を攻撃するのを思いとどまらせるために、想像しうる最も威圧的な名前に固執しました。彼らが見た住民がネピリムであったというのは、比喩的な誇張であり（今日、背の高い人を「巨人」と呼ぶのに似ています）、ちょうど彼らが「私たちは彼らにはいなごに見えた」（申命記 2 章 10-11 節；申命記 2 章 20-21 節参照）と宣言しているのも同じです。このアモリ人は背の高い人であったかもしれませんが（アモス 2 章 9 節参照）、真のネピリムではありません。

[88] ペテロ・シリーズ#15 を参照ください

[89] 超自然的な神話の究極的な起源は、これらの人間ではないネピリムについての人間の記憶にある可能性が高いです。ギリシア神話の文脈では、ゼウスとオリンポスの神々がタイタンどもに取って代わり、彼らをタルタロスに幽閉したことは興味深いことです。このテーマは、サタンの反逆（すなわち、神に取って代わること）の望みと、大洪水前の堕天使（と彼らに対する神の罰）の物語を混同しているのかもしれません。結局のところ、サタンの意図とその望みを真実として描写するのは、すべてのサタン的偽宗教とプロパガンダの典型なのです。

[90] 特に『悪魔の反乱』第 1 部「サタンの反乱と堕落」の I.3.d 節を参照。

的なものであれ、そうでないものであれ）に感銘を受け、魅了されるのに対し、神はその心、すなわち、御自身と神の真理に対する個人の態度に関心を持たれるということです。大洪水前の「超人」たちは、人間の伝説的な存在であり、今日でも人類の想像力をかき立てる存在かもしれません。この半人間は、現代人の想像を絶する才能を持ち、現代の地球人からすれば、尊敬と憧れの対象であっても、神の見解は全く逆で、地表から消し去らなければならない存在なのです。

人類が選んだ方向に対する神の深い後悔と悲しみがここで表現されていますが、これは決して、神がこれらの出来事に「驚かされた」という意味ではありません（歴史はすべて神と神の決定に依存しているからです）。これらの出来事は、私たちが理解できる言葉で語られています。たとえ私たちが神と神の愛の真の深さを理解することを望めないとしても、これらの表現から、神の人類に対する慈悲深い目的と、その慈悲を受け入れないことを喜ばず、一人も滅びることを望まれないということがわかります（第一テモテ 2 章 4 節）。

> ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対して***ながく忍耐して***おられるのである。（第二ペテロ 3 章 9 節）

上記の斜体句の「忍耐（makrothumeo）」は、第一ペテロ 3 章 20 節で、大洪水前の 120 年の猶予期間中の神の忍耐を示すために使った動詞＜忍耐して makrothumia＞と同じギリシャ語源です（第一ペテロ 3 章 20 節）。

このような強烈で難解な悪に直面しても、神は当時の世界に究極の裁きを下す前に、すべての純粋な人間に悔い改めの機会を与えるという特別なことをされていたのです。本当に私たちの神は、畏るべき存在です。恵まれない人々に対しては計り知れない慈悲を垂れ、共に邪悪なことをたくらみ神を拒む人々に対しては、逃れようのない破滅の裁きをもたらします。

> それとも、[あなたがたに与えられている]神の慈愛があなたを悔改めに導く[機会となる]ことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。（ローマ 2 章 4 節）

> また、わたしたちの主の寛容＜新改訳では「忍耐」＞は[あなたがたの]救のためであると思いなさい。このことは、わたしたちの愛する兄弟パウロが、彼に与えられた知恵によって、あなたがたに書きおくったとおりである。（第二ペテロ 3 章 15 節）

神の偉大な忍耐、神の偉大な備え、神の偉大な愛、当時の人類が神に立ち返ることへの願いは、結果的には軽んじられ、そのため神の恐ろしい裁きに直面せざるを得なくなりました。並々ならぬ忍耐と備えにもかかわらず、人類が救いようのないほど堕落してしまったことが、誰の目にも明らかになった後、大洪水が始まったのです。その裁きは、もちろん、汚染された人類だけでなく、その他の生き物もすべて絶滅させられ、汚染の跡形も残らない、完全なものでした。しかし、神は正しい者を悪い者と共に消し去ることはされません。神に立ち返った一人の人の義（神に立ち返る者に神が与えられる義：創世記 15 章 6 節）により、それが私たち全人類の割れ目に＜洪水によって人類が絶滅してしまう危機に＞立つことになったのです。

創世記 6 章 8-10 節：ノア

> しかし、ノアは【主】の心にかなっていた。これはノアの歴史である。ノアは正しい人で、彼の世代の中にあって全き人であった（すなわち純血な人間であった）。ノアは神とともに歩んだ。ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤフェテを生んだ。（創世記 6 章 8-10 節　新改訳Ⅳ）

神とはどんな関係も持ちたくないというその時代の人々とは対照的に、ノアは神との関係を積極的に追求し、神を求め、神を見つけ、神に従い、そして最終的には今よく知られているように、特別な方法で神に仕えるようになったのです。このように、神がなそうとされるすべてのことに応じるという姿勢が、ノアに神の好意をもたらし、＜神の好意はノアにとって＞地上の何よりも貴重な宝となったのです（そして、今も同じように求めるべきものです）。ノアは＜堕天使との＞混血ではありませでした（彼の純血は、ヘブル語の tamiym hayah bdhorothayv「彼の世代において完全＜全き人＞であった」という言葉から汲み取れます）。この事実は、天使的な種と混じる誘惑に屈しなかったノアの両親とその先祖の誉れを物語っています。しかし、ノアは、文脈からわかるように、悪が激化し、天使によってほぼ全人類が穢されたため、混じることを避けることが以前にも増して困難になっていた時期に、彼自身の権利として、この悲惨な道を断ち切ったのです。神はノアの断固とした不動の姿勢を称え、同じように純粋な人間の血を引く妻を用意し、洪水前の最後の 120 年間に生まれた三人の男の子で祝福されました（創世記 5 章 32 節と創世記 7 章 6 節を比較してください）。このような「頑固な世間離れ」によって、ノアがどれ程周りから嘲笑され、仲間はずれにされ、脅迫されたかは想像に難くありません。しかし、本当に神を求め、神に従う者にとっては、他の選択肢は考えられないことであり、人々の行為は明らかに神の自然法則（レビ記 19 章 19 節；申命記 22 章 9 節参照）に反していたのです。当時の誘惑に負けず、神が導かれるとお

りに従い続けたことで、ノアは、神が彼に用意された役割、すなわち、＜洪水という断絶において＞全人類のための橋渡しをすることができたのです。

そして、私たち人類の祖先となる者達（ノアとその妻、三人の息子と三人の妻）を肉体的に救出するために、神は箱舟を選ばれました。しかし、箱舟を造ったのはノアであり、その事実は、神の目には、どんな木造建築物よりもはるかに重要でした。もちろん、神はこの一家を奇跡的な方法で水から救い出すこともできたでしょう。しかし、神はノアの信仰と忠実さを利用することを選ばれました。ノアは、自分と家族だけでなく、世界中の動物が乗れる船を、洪水が起こる前の 120 年の猶予期間中に作り上げたのです。この素晴らしい建造物は、当時から後世の人々に至るまで注目を集めていますが、この物語の本当に素晴らしいところは、ノアがこの不可能と思われる仕事を、毎日、何十年も続け、神から与えられた任務に忠実であったということです。主の命への忠実な献身に対しての反対やあからさまに落胆させることなど、よく想像もできませんが、しかし、最終的に神は、「義の宣伝者」ノア（第二ペテロ 2 章 5 節）とその神の証しの業を、最も劇的な方法で立証されたのです。

ノアといえば、箱舟を連想させます。しかし、聖書では、創世記の洪水に関する記述において、ノアについて頻繁に言及されているにもかかわらず、箱舟についてはあまり議論の的にはされていないという事実は興味深くまた重要なことです。（イザヤ 54 章 9 節; エゼキエル 14 章 13 節と 20 節; ヘブル 11 章 7 節; マタイ 24 章 37-38 節; ルカ 17 章 26-27 節; 第二ペテロ 2 章 5 節; 例外は、具体的なことについては触れられていない 第一ペテロ 3 章 20 節と ヘブル 11 章 7 節くらいで、ここではノアが神の命令に対して、恭しく応答してそれを建造したことに焦点が当てられているだけです）。この理由は極めて明らかです： 箱舟や「動物が二匹ずつ」などは人間が感動する箇所ですが、神が感動されたのはノアの心、ノアの忠実さなのです。このような＜ノアの忠実な＞性格が証明された結果、ノアは来るべき洪水からだけでなく、大洪水を必然的なものとした倒錯した世代からも解放する手段として、あの最も有名な船を造ることになったのです（第一ペテロ 3 章 20 節：彼らは水を通して救われた[すなわち、水を安全に通り、その世代の脅威から解放された]）。

創世記 6 章 11-13 節： 神の裁きと神の救い

> 時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその[いのちの]道を乱したからである。そこで神はノアに言われた、「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう。（創世記 6 章 11-13 節）

天使の種が混じり人間の遺伝子に浸透するに伴って、人類の思考全体に絶えず悪が生じ、その結果、先史時代の文明の破滅をもたらすことになる致命的な副作用が生じていました：すなわち、「邪悪な暴力」（ヘブル語で *chamas*: חמס）がはびこっていたのです。脅迫されるということは、ほぼ確実にあったことで、純粋な人間が急速に崩壊していたため、ノアは自分自身とその家族を純粋な状態に保とうとしていましたが、これは注目すべきであり、称賛に価することです。このはびこる暴力が自由意志の原則を本質的に危うくし、当時の混合民族は（ノアの箱舟の建設によって差し迫った裁きの証しは与えられていたものの）地には神への拒絶が広まり、聖書はそれが全地に及んでいたことを痛々しく表現していますが、神は、彼らとその世界がそれに相応しい完全な破壊を下すことにされたのです（創世記 7 章 17～24 節）。こうして、サタンの最初の大規模な反撃は、猛攻撃を受けて終わりを告げることになりました。この猛攻撃は、細いけれども断ち切られることのない絆で結ばれた、たった一つの家族が神と共にあってその目的を達成することによってなし遂げたのです。この天使の直接的な人間への干渉は、その華麗な装飾を除けば、本質的には人間の自由に対する攻撃であり、圧倒的な誘惑に始まり、圧倒的な暴力で終わりました。地球が破壊され、その策略の結果である混血種と、人間の子孫繁栄に直接関与したすべての堕天使は、（彼らはもともと光の存在であったので、彼らにとっては恐怖の場所である暗闇の）底知れぬ所の底に幽閉されることになったのです。

2. 洪水後の人間の自由に対するサタンの攻撃（バベルの塔：創世記 11 章 1-9 節）。

悪魔の第二の主要な反撃は、人間の自由に対する集中攻撃でした。サタンは、人類を（あからさまに）滅ぼす（あるいは遺伝子汚染によって滅ぼす）以外に、人類が神に立ち返るのを阻止する最善の方法は、人間の能力、すなわち自由意志を損なうことであることをよく知っていました（今でもそうです）。バベルの塔事件は、大洪水後、少なくとも 100 年後に起こったものです（ペレグの命名からもわかります：創世記 10 章 25 節と創世記 5 章 32 節, 11 章 10-16 節を参照してください）。この頃、ノアの家族は急速に拡大していました。創世記 10 章と 11 章からわかるように、世界は、大洪水後かつてなかったほどの人口急増が進行していたのです。この事実は、人間の寿命が短くなり、その結果、世代の間隔が短くなったことに少なくとも一因があることは間違いありません（創世記 11 章 10-24 節参照）[91]。

91「彼の代に」＜創世記 10 章 25 節＞という表現は、洪水から百年後に生まれ、209 年生きたペレグの生涯を指すのが最も自然です（創世記 11 章 19 節）。再繁殖の可能性のある数字については、C.F. Keil, in Keil and Deilitzsch's Commentary on the Old Testament v.1, 176-178 を参照し

洪水前の世界(創世記 4 章 17 節, 4 章 21-22 節参照)と同様に、この人口の拡大は、明らかに技術と文明の「進歩」(創世記 10 章 10-12 節の都市化参照)を伴い、神に対する関心と気遣いも全体的に低下する傾向にありました。このようなことは、これまでにもあったことですが、このプロセスが勢いを増して間もなくすると、サタンの次なる大きな反撃が始まります。悪魔は、当時、最高の政治指導者であった二ムロデを鼓舞し、増大した人口を統一する世界統一社会を確立しようとしたのです。このようなことは、多文化が混在する現代ではまだ考えられないことですが、そうなると、人類を神から遠ざけるという悪魔の目的には、非常に有利になります。高度に協力的で、高度に均質化され、高度に中央集権化された社会は、神を信じない方向に一回シフト(転換)させればよいだけです。唯一の真の神への崇拝が反社会的なものとみなされ、違法とされれば、そのような状況下で真の神への崇拝を完全に阻止することは容易な事となるからです。特に、神を選んだ宗教的「反体制派」が避難できるような代替社会が地球上に存在しない場合は、なおさらです。したがって、悪魔が信仰を圧殺するための理想的なシナリオは、地球上のすべての人間の問題を一括管理するトップダウン(上意下達)国家を実現すること以外に考えられません。これが実現すれば、信仰を持つ人々の自由を奪い、この世のすべての信仰を根絶やしにすることが可能となるのです。

ニムロデがこの悪魔的計画においての天才であったことは、創世記 10 章 8-12 節と創世記 11 章 1-9 節のバベルの塔の記述を見れば明らかです。まず、塔はニムロデの最初の都市権力基盤であるシナル平原(すなわち、バビロニア:創世記 10 章 10 節、創世記 11 章 1 節)に建設されています。洪水後 100 年間に全人類が集中したのはこの場所であり、急速に拡大する人類のために政治と都市の構造を造り上げた彼の優れた能力は無視することができません。

第二に、ニムロデは「地の分割」(創世記 10 章 8-12 節)の時に活動した聖書で特記されている唯一の主要な政治家です。ニムロデはクシュを通してのハムの孫であり、ペレグはアルファクサドとエベルを通してのセムの曾孫であり、彼の時代に地が分割されるのを見ました。ほぼ同世代と仮定すると、ニムロデはペレグよりも年上であり、ペレグが生まれる頃には塔の建設を推進する立場にあった可能性があります。そして、当時の最も重要な都市の建設者として、この悪名高い塔の建設のような世界的に協調された動きは、彼の承認と支援なしにはあり得なかったと思われます。

てください。Keil は、かなりの人口の可能性を反映した数字を出しています(広い範囲内で)。控えめな仮定でも、ペレグの死の頃には地球の人口は数千万人に達していた可能性は十分にあります。

第三に、聖書はこの時期、ニムロデの神に対するあからさまな敵対行為を特別視しています:

> クシの子はニムロデであって、このニムロデは世の権力者(すなわち有名で際立った人)となった[洪水後]最初の人である。彼は主の前に＜逆らって(英訳)＞力ある[人を狩る]狩猟者であった。これから「主の前に力ある[人を狩る]狩猟者ニムロデのごとし[ニムロデのようになれ]」ということわざが起った。(創世記 10 章 8-9 節)

ニムロデは、ネピリムが滅ぼされて以来、初めてギボア(gibbor ヘブル語:גבור)と呼ばれるようになりました(創世記 6 章 4 節、この事実は歴代誌上 1 章 10 節の系図においても強調されています)。ギボアという言葉は、肉体的な強さだけでなく、他の分野での名声や卓越性という意味でも「強大」であることを意味します。ネピリム族は、人間のあらゆる才能や能力を持ち、圧倒的な魅力を持っていました。上記の聖句が、ニムロデの「強さ」の領域、すなわち「神に逆らって(人を)狩る」ことが丁寧に説明されているのはそのためで、ニムロデは単なるギボル・チャイル(ヘブル語旧約聖書で最もよく使われる「勇猛果敢な男」戦士としての才能を持つ人)ではなかったのです。ここでいう「狩り」とは、余興として動物を狩猟することではないことは明らかです。洪水後の神とノアとの契約では、命とキリストの御業の象徴である血は、特定の方法で排出されなければならなかったものの(創世記 9 章 4 節)、動物を食用にすることは認められています(創世記 9 章 3 節)。したがって、文字通りの狩猟が「神に逆らう」(ヘブル語の前置詞リフニーのここでの意味)ことになる理由は何もありません[92]。地球上で増え続ける人口を都市に集中させ、組織するのを成功させたように(最初はバビロン、エレク、アッカド、カルナ、シナルのすべての町々: 創世記 10 章 10 節)、ニムロデの驚くべき才能は、人を説得して自分に従わせ、彼らの心を「狩り」、捕らえるという能力にありました。これは、アブサロムが父ダビデに対する反乱を引き起こす第一歩として、イスラエルの人々の「心を盗んだ」のと似ています(サムエル記下 15 章 6 節、それとは反対に「人をとる漁師」は正しい意味を持ちます:マタイ 4 章 19 節、マルコ 1 章 17 節)。この人の心を罠にかけたことは、以下に示すように明らかに「神に背く」ことであり、そうでない場合は多くありません。また、政治的な大衆運動が関係している場合、その目的と基盤のすべては、その見せかけをはぎ取るなら、完全に反神的であるということは、よくあるものです。

---

[92] 文字通りには「神の面前で」。出エジプト記 20 章 3 節; 申命記 5 章 7 節参照。イザヤ 3 章 8 節 と ナホム 2 章 13 節, 3 章 5 節 での el の同様の用法を見てみてください。
。

第四に、ニムロデという名前は、ヘブル語で「反乱を起**こそう**」という意味です[93]。したがって、ニムロデはこの個人の本来の名前ではなく、（旧約聖書の時代によくあったように）彼の人格の最大の特徴や、彼の経歴における最も重要な出来事を反映するために変更されたと推測することができるでしょう。時代の風潮を表すスローガン「ニムロデ」という言葉が、人物の名前として呼ばれるようになったことは、神に対する最後の反乱であるゴグ・マゴグの反乱（黙示録 20 章 7-9 節）の指導者たちによって発せられるであろうスローガンを連想させるものです：

> なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたち、[地の]もろもろの民はむなしい事をたくらむのか。地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者とに**逆らって**言う、「われらは彼らのかせをこわし、彼らのきずなを解き捨てるであろう〈捨て**よう**：新改訳Ⅳ＞」と。（詩篇2篇 1-3 節）

最後に、創世記 10 章 10-12 節では、ニムロデの経歴が明確に二つの段階に分けられています。第二段階は、シナル平原（洪水後の 100 年間に全人類が集中した場所）ではなく、より北に位置するアッシリアに向けられ、ニムロデの当初の壮大な計画に対する神の不満を反映していると思われます。ニムロデは、全人類を一つに統合する試みに敗れた後、北方でその特別な才能を発揮し続けました。

増え続ける地球上の人口を維持できる単一の世界的な国家を作るという野心的な計画は、卓越した政治的能力を持つ人物だけでは不十分でした。そのためには、洪水後の世界の想像力をかき立てると同時に、集団行動の十分な動機付けとなるような結集点、統一的なシンボルが必要でした。有名な「バベルの塔」の選定において、ニムロデは（疑いなく悪魔の慎重な指導の下に）まさにそのシンボルを選んだのです。この巨大で印象的な建設プロジェクトは、当時の単一文化、単一言語の世界では、皆の話題とならざるを得なかったことでしょう。箱舟と同じように、それは特異なもので、（この時点では）まったく前例がないものでした。しかし、箱舟が迫り来る裁きのしるしとして、また、裁きからの解放の手段として、神から委託されていたのとは異なり、バベルの塔は、神のものではないばかりか、神への反抗そのものであることが明らかです。このことは、いくつかの理由から言えることです。

---

[93] これは qal の一人称複数不完了体であり、しばしばここであげた共同体的な意味で用いられます。Keil and Delitzsch, op.cit., in loc.

まず、ニムロデとその極悪非道な主人＜サタン＞がこのプロジェクトを追求した主な目的は、塔の建設という普遍的な共同作業を、将来、全人類の行動の一致に（強制的に）結びつけることでした。このような統一された総力戦の前例ができ、十分な時間が経過すれば、一枚岩の世界国家の根がしっかりと確立されたことになります（アウグストゥスによるローマ帝国の長い治世の確保に類似）。ニムロデとその部下たちが、この長期の大掛かりな建設プロジェクトを監督し、完全な政治的支配権を獲得するためには、大きな跳躍は必要なかったことでしょう。

第二に、後世の類似建造物（具体的にはジグラット）の用途から、天上崇拝（真の神に代わる悪魔を崇拝すること）が塔の建設に隠された大きな目的であったことは間違いありません（天に届く塔の象徴は、明らかに神々と接触する試みだからです）。政治的な統一がなされた後、新しい集団の象徴的な中心部は、異教の宗教活動に使われることになります。この異教の悪魔崇拝は（後のバビロニアのように）新しい社会での生活の必須部分となり、これが地球上で唯一の社会となるため、すべての真の精神性は永遠に致命的に損なわれることになります。

> （大洪水から 1 世紀以上後）全地は同じ発音、同じ言葉であった。時に人々は東に移り、シナルの地に[好ましい]平野(すなわち、バビロニア)を得て、そこに住んだ。彼らは互に言った、「さあ、れんがを造って、よく焼こう」。こうして彼らは石の代りに、れんがを得、しっくいの代りに、アスファルトを得た。彼らはまた言った、「さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう」。（創世記 11 章 1-4 節）

創世記 11 章 1-4 節には、バベルの塔を建設しようとする「民衆の動き」が具体的に描かれており、ニムロデの説得力を物語る最高の証言となっています。地上の新進気鋭の人々は、(「…を築**こう**」という)ニムロデの言葉と計画を、自分たちのものとして受け入れてしまっています。しかし、明らかに、この一つの目標を目指そうという考えは、人類の頭の中に勝手に湧き上がったものではありません。聖書によると、（塔事件の当時において）都市化の推進に積極的に関与した唯一の人物であるニムロデは、明らかにこの計画を「草の根」レベルで推進する方法を発見し、高名な独裁者ではなく、民意を重視する謙虚な促進者としての役割を果たす立場を取りました（この時以来、このやり口は暴君が権力者になる際の重要な特徴です）。この物語から読み取れる彼の戦略に関するもう一つの興味深い点は、バベル＜の地＞の発見と塔の建設というキャンペーンが、現代の政治的に正しく見える、「善」-「悪」の類似した計画に非常によく似た方法で進められたという事実です。それによって、一部の国民がこの計画を即座に支

持し、さらに消極的な隣人に参加を強要し始めました(「そして彼らは言い始めた、すべての人が友であると」)。これらから、同調圧力は常に政治的説得の重要な要素であることがわかります。さらに、このニムロデの計画は、初めから明らかに反神的な要素を持つ塔建築から始まったわけではありませんでした。

第一に、建設全般における集団行動が確保されている(「レンガを作***ろう ...*** 」)。第二に、古くからの「おとり商法」によって、都市の建設が立派な建設目的として提示され、真の焦点である塔は下位の「余談」として偽装されています。大洪水後の世代は、ニムロデが登場するまでは農村文明でしたが、間違いなく先史時代の都市について聞いており、そのような発明の再現を望むのは当然であったと考えられます(創世記 4 章 17 節)。

都市や都会化というものは、テクノロジーと同様、それ自体が悪というわけではありません。[94] しかし、人生における多くの事柄と同様に、許容されることが必ずしも私たちの霊性に有益であるとは限りません(第一コリント 6 章 12 節, 10 章 23 節)。人生の多くのことは、その性質上、誘惑や神から遠のかせる可能性を高めるものです(そして、私たちのそれぞれの罪の性質のゆえに、これらのことはしばしば人によって異なります)。後でわかるように、バベルの建設は、上記のような理由から、霊的に恐ろしい結果をもたらすことになります。

第三に、バベルの建設計画における塔の重要性について騙されなかった人々、そして、この世界的な取り組みに参加しようという強烈な同調圧力に抵抗できる人格を持つ人々に、ニムロデはこのような建造物を建設する必要性について魅力的な動機と根拠を提供しました。塔がなければ、人類一族の遺産と歴史は失われてしまう。何か特別な手段を講じない限り、別個の民族としての共通のアイデンティティは、時間の経過と、洪水前の文明を知ることすらない人々の急速な成長と分散によって消滅してしまうというものです。ニムロデの訴えは、自分のルーツを守ろうとする人間の一般的な傾向を巧みに利用したもので、世界的な大洪水によって先史時代の文明の痕跡がすべて消え去ってしまったという出来事が、まだ記憶に新しかったことから、この特徴をより利用しやすくなっていたのは間違いありません。

しかし、その時(名もなき少数の信仰者以外の)全ての者達がとった、煽られたことによる熱狂的態度、特に自分たちの記念碑を造るという行為は、神への真の信仰に真っ向から対立するものでした。神は私たちの父であり、私たちの名前は神によって永遠に知られています(イザヤ 56 章 5 節, 62 章 2 節, 65 章 15 節; ルカ 10 章 20 節; 黙示録 2 章 17 節)。私たちは主の書物に記されています(出エジプト 32 章 32-33 節; 詩

[94] サタンが自分の計画を推進するためにテクノロジーを利用することについては、このシリーズの前回をご覧ください。

篇 139 篇 16 節; ダニエル 12 章 1 節; ピリピ 4 章 3 節)。この地上のすべてのものは塵であり、破壊される運命にあります(第一ペテロ 4 章 7 節; 第二ペテロ 3 章 12 節)。したがって、バベルの塔は、将来のすべての世代が神を無視するように影響を与え、強制するための枠組みを提供するだけでなく、本質的に**信仰に敵対**する記念碑であったのであり、「名」をあげることで自分を保とうとする考えは、致命的な虚栄です(参照:ルカ 12 章 25 節)。なぜなら、その明確な目的(すなわち、人間の生命とアイデンティティを永遠に維持すること)は、神だけができることであり、その建設そのものが、神はすることができない、あるいはするつもりがない、と主張する冒涜であったからです。バベルの塔は、神がノアと交わした「二度と人類を絶滅させない」という契約に対する信仰を完全に否定するものであり、約束の素晴らしい虹を、人間が作った汚れた建造物に置き換えてしまったのです。

> 時に主は下って、人の子たちの建てる町と塔とを見て、言われた、「民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事(<zamam ザマーム=目論み)は、もはや何事もとどめ(<batsar バッツァール=阻止する)得ないであろう。さあ、われわれは下って行って、そこで彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう」。こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは(協力して)町を建てるのをやめた。これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼ら[人類]を全地のおもてに散らされた。(創世記 11 章 5-9 節)

神は、当時の人間の共通語を混乱させることによって、世界的な協力と、それが必然的に追求する神をも恐れぬ目的を不可能にされました。この状態は、反キリストが出現して現在構築中の新しいテクノロジー・バベルの塔(すなわち、ニュー・ワールド・テクノ社会)によって、信者に対する世界的な迫害などが再び起こるまで続きます<つまり神の阻止する力が働きます>。なぜなら、神は人間の言葉を混乱させることによって、この最も不快で邪悪な類の「達成」を阻止して下さったので、その結果、神から離れて生命とアイデンティティを維持しようとする目論見に抵抗する人々を、神は救い出されるからです。神は常にご自身のために信者のレムナント(残された者たち)を持たれます(ローマ 9 章 27 節, 11 章 1-5 節)。この場合、この出来事が起こった時代のペレグよりも長生きしたノアとセムが含まれていたはずです[95]。

3. メシアの民族に対するサタンの攻撃(反セミティズム)

[95] ペレグは洪水から 310 年後に死にましたが、ノアとセムはそれよりもそれぞれ 40 年と 90 年長生きしました(ノア:創世記 9 章 28 節、セム:創世記 11 章 10-11 節)。

第三のサタン戦略である反セミティズム(＝反ユダヤ主義)、より正確には、地球上からすべてのユダヤ人を根絶やしにしようとする組織的な計略は、アブラハムの割礼の日から行われており、それは悪魔がこの世からいなくなるまで続くでしょう。この戦略は、三つの段階に分けることができます: 1)キリスト以前、2)キリストの時代、3)キリスト以後です。

キリスト以前については、メシアがイスラエルから出ることが運命づけられていたため、ユダヤ人は悪魔の特別な標的でした。人類を抹殺、堕落させ、完全に支配下に置くことができないのであれば、悪魔にとっては、約束の人＜メシア＞の系統を根絶やしにすれば、神の計画を即、終わらせることになります。この目的を達成するためには、ユダヤ国家とユダヤ民族を完全に消滅させることが唯一の確実な方法であったので、サタンは内外両面におけるイスラエル攻撃に多大な勢力を投入しました。内部では(預言書、特にエレミヤ書を読むだけで、イスラエルが陥れられた偶像崇拝を知ることができるように)イスラエルにあらゆる堕落をもたらすために働きかけ、外部では、イスラエルの破壊を目的として、世界の国々をイスラエルに対抗させるために不断の努力がなされてきました(悪魔が近隣諸国を使ってイスラエルを攻撃の的としてきたことを考えてみてください。ダニエル 10 章 13 節, 10 章 20 節)。

メシアはその地上での生涯を通じて、サタンの破壊的な意図の標的でした。メシアを滅ぼそうとしたヘロデの試み(マタイ 2 章 1-18 節; 悪魔の関与は間違いない: 黙示録 12 章 4 節参照)に始まり、悪魔は、キリストを個人的に集中的に誘惑し(マタイ 4 章 1-11 節; マルコ 1 章 12-13 節; ルカ 4 章 1-13 節)、キリストに敵対しようとし(マタイ 4 章 1-11 節, 16 章 23 節; マルコ 8 章 33 節; ルカ 4 章 29-30 節; ヨハネ 7 章 30 節; 8 章 59 節, 10 章 39 節)、キリストを裏切ること(ルカ 22 章 3 節; ヨハネ 13 章 2 節; 13 章 27 節)に積極的に関与し、父の計画を失敗に終わらせるために、サタンは不断の努力をしました。

キリストの時代に入ってからも、イスラエルは悪魔の破壊的な関心の的であり続けましたが、その理由は前の時代のものとは異なります。サタンは、メシアが**出る**ことになっている民族を根絶やしにすることで、メシアの到来を阻止することはできませんでしたが、メシアが＜再臨によって＞**戻っていく**ところの人々を根絶やしにすることで、再臨を無意味なものにしようと考えています。イスラエルが民族として存続しなければ、神がイスラエルに約束した多くの具体的な約束を果たすことができないからです。その約束の大部分は、キリストの千年王国の支配下においてのみ完全に成就することになって

います(例:民族の再集合:イザヤ 49 章 8-26 節)。イスラエルの王子にとって、支配するイスラエルがなければ、悪魔は神の計画を事実上挫折させることになります。

言うまでもなく、悪魔の努力は、最終的には無力であることを証明しています。しかし、最近、そして現状がよく示すように、悪魔はこの戦略を追求し続けています。しかし、この悪魔に利用されることを許す者は災いです(イザヤ 27 章 7 節)[96]。

> あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしは[真に]のろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」。(創世記 12 章 3 節)

> すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる。これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である」と主は言われる。(イザヤ 54 章 17 節)

> あなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのであるから、あなたがたを捕えていった国々の民に、その栄光にしたがって、わたしをつかわされた万軍の主(父)は、こう仰せられる、「見よ、わたしは彼らの上に手を振る。彼らは自分に仕えた者のとりことなる。その時あなたがたは万軍の主が、わたしをつかわされたことを知る。(ゼカリヤ 2 章 8-9 節)

イスラエルに危害を加え、損害を与える者すべてに対して主が将来報復されるという多くの預言に、いくつもの歴史的な実例が対応しています。神はご自分の民を懲らしめるために他者を用いますが、その道具として用いられた者に対しても、最終決算を求めるという原則は、「主の怒りの杖」(イザヤ 10 章 5 節)であるアッシリアの例にも見ることができ、そのアッシリアについて神は次のように語っておられます。

> 主がシオンの山とエルサレムとになそうとすることを、ことごとくなし遂げられた時、主はアッスリヤ王の無礼な言葉と、その高ぶりとを罰せられる。(イザヤ 10 章 12 節)(参照:イザヤ 10 章 15-19 節)

エジプト、アッシリア、バビロン、そして大小さまざまな国や部族は、旧約聖書の時代、主の民が主から遠く離れてしまったときに、主がその民を痛めつけるために用いられました。しかし、それは、いつも彼らを主のもとに連れ戻すことが目的であって、決し

---

[96] キリスト教の観点からこの問題を包括的に扱うには、R. B. Thieme, Antisemitism (Houston 1974)を参照。

て彼らを完全に滅ぼすために用いられたわけではありません。どの例も、最終的には、怒りの対象であったイスラエルよりも、圧制者の方がはるかに厳しく懲らしめられました。現代においても、ロシア（帝国と共産主義）とナチス・ドイツの例は、反ユダヤ主義の運動の関与がもたらした結果を鮮明に思い起こさせるものです。イエス・キリストに従う者にとって、この教会時代におけるユダヤ人の苦しみは、（神の民を真実に神に立ち返らせるための懲らしめの同じパターンに従って）神の訪問の結果＜イエス・キリストの来られた時に、拒んだゆえ＞かもししれませんが、その＜彼らを苦しませる＞ために利用される者の結果は、実に悲惨な状態になることを考えた方がよいでしょう。主とイスラエルとの間のいざこざは、まさに「家族の問題」であるため、よく言われるように、その問題にかかわらないことは知恵あることです。

旧約聖書のイスラエル国の絶え間ない挫折と偶像崇拝（預言者たちによって絶えず非難されたこと）、そして今日、大部分のイスラエルが陥っている「かたくなさ」（ローマ 11 章 25 節）から判断すると、「すべてのイスラエルはイスラエルではない」（ローマ 9 章 6 節）ことは明らかで、悔い改めと救いを目的とした主の恵み深い懲罰の働きが続くことは予期されることです。しかし、この「特別な関心＜懲らしめ＞」は祝福であり、「父祖たちのゆえに愛されている」（ローマ 11 章 28 節）この民に、主が独自に与えるものであることを決して忘れてはいけません。ユダヤ人の系図が自動的に救いをもたらすわけではありませんが（ローマ 9 章 30-32 節）、この貴重な遺産は、神ご自身による特別な配慮、特別な監視をもたらします（ゼカリヤ 2 章 8-9 節; ローマ 11 章 28 節）。

ですから、「野生のオリーブの木」に属する私たちは、「自然のオリーブの木」に属する人々を尊重し、そのために祈り、この点に関するすべての関係において非常に慎重であるべきなのです。それは、過去にイスラエルの迫害者たちが受けたような裁きを受けないためだけではありません。私たちは、神ご自身の**客観的な憐れみ**の態度を持つべきなのです。イエス・キリストを離れては、だれも神のもとに行くことはできませんが（ヨハネ 14 章 6 節）、それでも神はすべての人が救われることを望んでおられます（第一テモテ 2 章 4 節; 第二ペテロ 3 章 9 節）。このことは、「肉によれば、キリストもまた、彼らから出られた」（ローマ 9 章 5 節）アブラハムの子孫たち、すなわち、主の約束の最初の相続人らに関しては、＜彼らも救われることを神が望んでおられることは＞どれほど真実であるかということです！　もし私たちがクリスチャンとして本当に愛のうちに歩み、すべての隣人に対して自分自身と同じように配慮し、受け入れるすべての人の救いを願い、そのために働くという神の姿勢をとっているならば、こうした姿勢には何の問題もないでしょう。

…ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人（異邦人）にも、…　（ローマ 1 章 16 節, 2 章

9, 10 節）

4. サタンによるキリストの体への攻撃（教会への迫害）

イエス・キリストの復活、昇天、そして神の御座の右に座られて以来、悪魔の最大の攻撃目標は、地上におけるキリストの体である教会です。上記の三つの戦いで敗北した悪魔は、今、急速に成長し続ける教会によって、その主に従う者達に取って代わられるという確実な見通しに直面しているのです。そのため、サタンはどうにかしてその予見される必然を回避しようと、無駄な後衛戦をしているというのが現実なのです。にもかかわらず、悪魔は教会の成長と完成を阻止するために、世界中の真の信者に対して、より激しい反対運動を展開しているのです。これは、信者に反対し、私たちの霊的成長を妨げようとすることであり、また、救われていない人々がイエス・キリストの光に触れることを妨げようとするあらゆる手段を講じているということです。

しかし、この時代の主要な標的となっているのは、真のキリスト教の正統な信仰です。信者が主との密接で純粋な関係を真剣に追求しようとするところでは、どこでも激しい敵対が起こることが予想されます。教会に対する大きな迫害は過去のものだとする考え方がありますが、そうした見方は、中国、北朝鮮、インド、フィリピン、マレーシア、インドネシア、エチオピア、スーダン、エジプト、イランなど（より顕著で有名な例を挙げればきりがありません）で、真のクリスチャンであることや真のクリスチャンとして歩くことが依然として命を危険にさらすことになっているという現状が知らされていないことから来ています。（米国など）直接的な迫害の脅威がない場所でも、（たとえば、大衆文化が、むしばまれ続け、憎悪が掻き立てられることなど）より巧妙なやり口で攻撃がなされています。一つ確かなことは、教会時代が続く限り、他のクリスチャンがそれに続くことを思いとどまらせようとして、悪魔は霊的に成長を遂げているクリスチャンを主要な標的とするということです。

> 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい。あなたがたのよく知っているとおり、全世界にいるあなたがたの兄弟たちも、同じような苦しみの数々に会っているのである。（第一ペテロ 5 章 8-9 節）

5. サタンによる最大の攻撃（艱難時代）

教会時代はサタンにとって苦戦を強いられる後衛戦であるものの、その最後の七年間である艱難時代は、イエス・キリストの再臨に先立つサタンの究極的かつ最も強力な攻撃の時でもあり、この教会時代の最後の戦いにおいて、サタンが放つ怒りを過小評価すべきではありません。

> …地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである。(黙示録 12 章 12 節)

> …しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか。(ルカ 18 章 8 節)

この二番目の引用におけるイエスの質問は、イエスの再臨に先立つ最後の七年間に、信者に対して加えられる圧力の強さを示しています。このことは、艱難時代のサタンの戦略のもう一つの特徴として、他の四大戦略のように焦点を絞るのではなく、この最後の七年間は全地球と全人類が何らかの形で標的となることを意味しています。その「最後の攻撃」である艱難時代には、悪魔は(反キリストの策略に関わる者らも共に)、これまでにない危険を冒し(創世記 3 章 15 節, 6 章 4 節; 第二テサロニケ 2 章 9 節; 黙示録 13 章 3-4 節, 13 章 12 節, 13 章 14 節, 16 章 13-14 節, 17 章 8 節, 17 章 11 節)、神の計画を阻止する最後の試みのために、これまで蓄えたすべての戦力を注ぎ込みます。具体的には、ユダヤ人と地上の全信者共同体の抹殺に着手し、天においても(黙示録 12 章 7 節の「天上の戦争」)、地上においても(黙示録 16 章 14-16 節のハルマゲドン)、神ご自身に対して公然と敵対し始めるでしょう。彼の完全な敗北は当然の結論ですが、彼の猛烈な攻撃のゆえに、艱難時代は人類が経験したことのない最も困難な時代となり、その中で神との慎重な歩みが信者の霊的安全にとって、これまで以上に重要になるという事実は何ら変わりありません[97]。

> とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、[わたしの]聖徒たちの忍耐と信仰とがある。(黙示録 13 章 10 節)

6. サタンの最後の戦い(ゴグ・マゴグの反乱)

---

97 以下にさらに付け加えて艱難期について説明しますが、このシリーズは、艱難期に焦点を当てた「来たる艱難期」シリーズのイントロなので、さらに詳しくは、「来たる艱難期」シリーズ参照のこと<「来たる艱難期」は黙示録 1 章から最後まで順次説明されています>。

悪魔は火の池に永遠に閉じ込められる前に、最後の攻防を繰り広げます。歴史の終わり＜至福千年期の終わり＞に、底知れぬ所＜Abyss:アビス＞から短期間解放されることになりますが、それは、サタンがいかに邪悪な存在であるかが、神によって最終的に明らかにされるためです(黙示録 20 章 7-10 節)。解放されるとすぐに、悪魔は、イエス・キリストの普遍的な支配の下、平和で歴史上最も完全な繁栄を経験している世界の人々を組織化し、油注がれた者に反抗するように仕向けることになります(詩篇 2 篇; マタイ 13 章 26 節; マタイ 22 章 1-14 節; 黙示録 20 章 7-10 節)。この最後の戦いにおいて、悪魔の戦略はかつてないほど明らかになります。悪魔は自分が置き換えられて、治めておられるイエス・キリストを真っ向から失脚させようとします(が、失敗に終わります)。

概要： 神の視点、正しい見方からしたら、サタンの行動はほとんど意味をなさないように見えるかもしれません。なぜなら、サタンはこれらすべての作戦において、神と戦っているからです。そして、神の御計画の中で、最も弱いリンクである罪深い人間への悪魔の攻撃が許容されているにもかかわらず、結局、神がご支配しておられるので、この弱い葦でさえ、折れない鉄の棒になるのです(創世記 18 章 14 節; マタイ 19 章 26 節;ルカ 1 章 37 節,18 章 27 節)。実際、この研究の第二章(「サタンの反乱　第五部第二章」では、神の人類史の全体が、完全な勝利のために設計され、実行されていることが詳細に示されています。悪魔の「狂気」は、私たち人類によく見られるのと同じ種類のものです(それが現実で、残念ながら例外ではありません)。それは、(健全な思考をすべて腐敗させる)傲慢さから生まれた狂気であり、神の現実、神の永遠性、神の力、神の慈悲を見えなくして、自分を神に置き換えようとする狂気です。上に挙げた極悪非道な事柄、全てにおいても、神は永遠に祝福される私たちの主イエス・キリストを通して、常に主導権を握っておられ、彼を通して私たちも究極の勝利に与ることができるのです。

> なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの(キリストへの)信仰こそ、世に勝たしめた**勝利**の力である。(第一ヨハネ 5 章 4 節) (1 節参照)
>
> しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに**勝利**を賜わったのである。(第一コリント 15 章 57 節)
>
> しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において**勝ち得て余りがある**。(ローマ 8 章 37 節)

IV. 起ころうとしていること：裁き、回復、置き換えの第 II 期と第 III 期

このシリーズでは、サタンの神への反抗が始まった当初から、艱難時代の最も決定的な頂点に至るまで、その経過を分析してきました。悪魔の反逆とそれに対する神の対処を追いながらサタンの策略を取り上げるにあたって、次の段階である艱難期に関しては、別個に特別な注目が必要とされます（「来たる大艱難期」シリーズで提供）。事実、現シリーズは、その題名が物語るように、人類史最悪の期間についてのイントロ部ですが、悪魔の反乱に対する神の最終的な対処と人類史の結末の概観を、事前にここで述べておいたほうがよいかもしれません。

これらの研究で示された**神の計画**は、三つの明確な段階を経て機能していると見ることができます。この第 1 段階、第 2 段階、第 3 段階のそれぞれは、「裁き」、「回復」、「置き換え」からなり、本質的には、（サタンの反乱に対する）完全な勝利にいたる神のご計画を戦略的に表しています：

概要

第 I 段階：形成期

永遠の勝利のための土台の「おおかた」が築かれる段階。

- 裁き I：創世記＜1 章 1 節と 2 節の間＞のギャップの裁き： サタンとその天使に審判が下され、悪魔の本拠地であった原初の地球は荒廃し、最初の宇宙は闇に包まれる。
- 回復 I：地球が居住可能な環境に復元される（再創造の 7 日間）。
- 置き換え I：最初のアダムが誕生し、人類の始まりとなる（サタンとその天使にとっては最終的に置き換えられるための始まりとなる）。教会が置き換えのために召し出されることができるように、最後のアダムであるイエス・キリストの十字架上の働きを通して、堕落後の人類の救いに必要な恵みが与えられます。

第 II 段階：完成期

歴史的勝利によって永遠の目的を「さらに」実現していく段階。

- 裁き II：大艱難期： 悪魔の王国と地上で悪魔に仕える者に対する神の裁き。サタンとその使いらは天国から追放され、後に獄に入れられる。
- 回復 II：千年王国：地球は祝福の環境に回復される。

－ 置き換えⅡ：王であるキリストがサタンに代わり、事実上の地上の統治者となる。教会は復活して置き換えがなされる。

第Ⅲ段階： 完結期

勝利の栄冠を、永遠の超越した祝福で飾る「究極の」段階。

－ 裁き Ⅲ：最後の審判： サタンとそれに従う天使は、不信心な人類とともに火の池に移される（大いなる白い玉座の裁きの後）。

－ 回復 Ⅲ: 新しい天、新しい地、新しいエルサレムによって、比類のない永遠の完全な祝福の環境が提供される。

－ 置き換えⅢ: 父なる神の降臨: キリストとともに、地上で永遠に支配される。教会は、至福千年時代の信者の数の二倍によって補完される。

第Ⅰ段階 形成期（注釈: このシリーズの第 2 部および第 3 部で扱われています）

第Ⅱ段階：完成期： 時間的な勝利とともに永遠の目的を「さらに」実現する（段階）。

1. 裁きⅡ：大艱難期 ：

艱難時代は、悪魔とその地上の手先である反キリストによってもたらされる恐怖の支配であるとする意見が多いのですが（実際そうなのですが）、聖書は、その主な目的が、地上（悪魔の王国）とその住民（特に艱難時代には、神に敵対しています）に対する神の裁きであると、かなり明確に示しています：黙示録 6 章 10 節, 8 章 13 節, 11 章 10 節, 13 章 8 節, 13 章 12 節, 16 章 1 節, 17 章 2 節, 17 章 8 節; イザヤ 24 章 5-6 節, 24 章 17-18 節; ミカ 7 章 13 節も参照のこと): [98]

> 見よ、主はこの地をむなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。（イザヤ 24 章 1 節）（イザヤ書 24 章 1 節-27 章 1 節は主に終末を扱っています）

> さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない（つまり、信者を迫害したことに対して報復される）。（イザヤ 26 章 20-21 節）（2 ペテロ 3 節 10 節後

[98] ロバート・H・マウンスが『ヨハネの黙示録』（グランド・ラピッズ、1977 年）194 で指摘しているように、ヨハネの黙示録において「世の住民」とは、本質的に、救われていない人々を指す専門用語です（福音書における「罪人」という言葉の使用を参照）。

半参照)

艱難時代は何よりもまず主が地上を裁く期間であるという原則は、黙示録の七つの最後の災い(黙示録 15 章 8 節～16 章 21 節)からも明確に見ることができます。これらの災いはすべて、地とその罪深い住民に対する神の正しい裁きであり、その内容は、神がイスラエルを迫害したエジプトに対して起こした災い(出エジプト記 7 章 14 節～12 章 30 節)と非常に似ています。黙示録の 15 章と 16 章の災いは、大艱難時代に最高潮に達するであろう神の民への世界的な迫害に対する神の対処であることを考えれば、これは驚くべきことではありません(参照:ダニエル8章 12-13 節, 11 章 33-35 節; マタイ 24 章 8-13 節, 24 章 23-26 節; マルコ 13 章 9-13 節; ルカ 21 章 12-19 節; 黙示録 6 章 9-11 節, 7 章 9-17 節, 12 章 12-17 節, 13 章 10 節, 13 章 11-18 節; 14 章 13 節, 14 章 14-16 節, 15 章 1-4 節, 16 章 5-6 節, 17 章 6 節, 18 章 24 節, 19 章 1-2 節, 20 章 4 節):

> それから、水をつかさどる御使がこう言うのを、聞いた、「今いまし、昔いませる聖なる者よ。このように[七つの鉢の裁きを][地に住む者達に]お定めになったあなたは、正しいかたであります。[あなたの]聖徒と預言者との血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことであります」。(黙示録 16 章 5-6 節)

七年間の艱難時代全体は激化した裁きの時代ですが、その裁きの頂点は、ハルマゲドンの戦いの直前、最中、そしてその後において、神の激しい怒りの全容が明らかにされるときであり、帰還したキリストが、御自身と戦おうとしてサタンが招集した世界のすべての軍隊を抹殺する時です:

1) 七つの鉢の裁き (最後の災い: 出エジプト記 7 章 14 節～12 章 30 節; 黙示録 15 章 1 節～16 章 21 節):

> また一タラント(＝約 34 キログラム)の重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害のゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである。(黙示録 16 章 21 節)

2) 獣の王国の破壊(バビロンは倒れた:イザヤ 13 章 19-22 節, 14 章 21-23 節, 21 章 9 節; 46 章 1 節- 47 章 15 節; 黙示録 14 章 8 節, 16 章 10-11 節, 17 章 16-18 節, 18 章 1-24 節, 19 章 1-2 節):

あなたの見た十の角と獣とは、この淫婦[バビロン]を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。(黙示録 17 章 16 節)

3) 恐ろしいしるしと不思議(天と地が揺さぶられる: イザヤ 24 章 18-20 節, イザヤ 29 章 6 節, 34 章 4 節, 51 章 6 節, 60 章 2 節; エゼキエル 38 章 19 節; ヨエル 2 章 29-30 節, 3 章 14-16 節; ハガイ 2 章 6-7 節, 2 章 21-22 節; マタイ 24 章 29 節; ルカ 21 章 25-26 節; 黙示録 6 章 12-17 節, 16 章 18-20 節):

見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る。天の星とその星座とはその光を放たず、太陽は出ても暗く、月はその光を輝かさない。わたしはその悪のために世を罰し、その不義のために悪い者を罰し、高ぶる者の誇をとどめ、あらぶる者の高慢を低くする。わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする。それゆえ、万軍の主の憤りにより、その激しい怒りの日に、天は震い、地は揺り動いて、その所をはなれる。(イザヤ 13 章 9-13 節)

4) 地の収穫(ハルマゲドン: 詩篇 2 篇 1-2 節,110 篇 5-7 節; イザヤ 11 章 4 節, 29 章 5-8 節, 34 章 1-3 節, 52 章 10 節, 59 章 15-19 節, 63 章 1-6 節, 66 章 15-16 節; エゼキエル 38 章 1 節-39 章 21 節; ヨエル 3 章 9-14 節; ハガイ 2 章 21-22 節; ゼカリヤ 12 章 3 節, 14 章 1-3 節; 黙示録 14 章 17-20 節,16 章 14-16 節, 19 章 11-21 節):

かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(ヨエル 3 章 13-14 節)

5) 火の池(反キリストと偽預言者に対する裁き: ダニエル 9 章 27 節,11 章 45 節; 第二テサロニケ 2 章 8 節):

しかし、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。(黙示録 19 章 20 節)

6)　底知れぬ所（＜アビス Abyss＞サタンとその天使たちが、艱難の最中に地上に投げ落とされ、その後捕らえられて幽閉される所：イザヤ 14 章 3-23 節, 24 章 21-23 節, 27 章 1 節, 34 章 1-5 節; エレミヤ 10 章 11 節; エゼキエル 28 章 11-19 節; ダニエル 4 章 35 節; ルカ 10 章 18 節; 第一コリント 6 章 2-3 節; 黙示録 12 章 4 節）:

> またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、[悪魔が]諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。（黙示録 20 章 1-3 節）

これらの出来事からわかるように、裁きの第 II 段階はまさに「さらに多くの段階」となります。その理由は、審判のレベルと強度が増し（悪魔とその天使は、神が原初の宇宙を有罪とされた際に、苦しみを受けてはいませんでした）、またこれは永久的な結果をもたらす裁き（敗北して投獄されることであり、仮釈放ではない）だからです。したがって、第 II 段階は、サタンとその天使に対して（人類史が始まる前に）神が原則的に判決を下した第一段階の最初の成就であり[99]、十字架上のキリストの勝利とその後の教会の完成によって可能になった展開です（その内容については以下の置き換え II を参照）。地とそこに住む者たちに対する第 II 段階の裁きは、上記のように、奇跡的で超自然的な方法で実行され、強烈な体験が伴う現実でもあります。艱難時代の初めに聖霊の阻止する影響力が取り除かれると（第二テサロニケ 2 章 6-7 節）、悪魔と人類はそれまで許されなかった極端な行動に出るようになり、この激しい裁きの正当性がすべての人に証明されることになります（パロに起こった、「心を頑なにする」普通ではない特別な状況に相当します）[100]。

このように、艱難時代は、神の創造物からサタンとその影響力を完全に除去するための最終段階です。神は最初にサタンを非難し（イザヤ 14 章 3-23 節; エゼキエル 28 章 11-19 節; このシリーズの第 1 部を参照）、悪魔が最終的に敗北することを宣言し（創世記 3 章 15 節）、そのための土台を十字架で据えられ（コロサイ 2 章 15 節）、艱難期の中間点でサタンとその天使を天国から追放し（黙示録 12 章 7-9 節）、御子の千年統治期間中は彼らすべてを底知れぬ所に封じ込めます（黙示録 20 章 1-3 節）。この第 II 段階の審判が完了すると、悪魔とその手下、不信心な人類、罪に穢された宇宙に対する神の最終処分だけが残ることになります。その時まで、第 II 段階の裁きは、

[99] 特にこのシリーズの第 1 部をご覧ください。
[100] 出エジプト 14 章シリーズをご覧ください。

十字架上のイエス・キリストの勝利を礎とする回復と置き換えのための道を開いているのです:

> 今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は[この世から]追い出されるであろう。(ヨハネ 12 章 31 節)

2. 回復 II: 千年王国:

第一段階では、神は地球と天を破滅的な暗闇の状態から居住可能な状態に回復されました。しかしこの時、一つの中心的な場所のエデンの園だけが「パラダイスの状態」で存在していましたが、最初の人間とその妻は、この特別に快適な環境の場所さえも失ってしまいました。洪水後、地上の環境はさらに悪化し、現在の地球は、居住可能ではあっても、悪魔の反乱が始まる前史の姿の面影のようなものに過ぎません。しかし、千年王国(第二回復期)には、地球は元の輝きの大半を取り戻します。千年王国では、私たちはまだ「時間の中」にいるため(つまり、サタンとその天使は千年王国が終わるまで幽閉されていますが、人類はまだ罪と共存しているので)、地上の環境は「完璧」とは言えませんが、アダムとエバがエデンから追放されて以来、最高に素晴らしい状態が提供されることになります。

キリストは、何よりもまずイスラエルの王として再臨されるので、千年王国について触れている聖書の箇所の大半は、キリストの千年統治のために回復されるイスラエルに(それだけではないにしても)向けられています。しかし、より一般的な聖句と照らし合わせると、示された祝福は全世界に及ぶと推測できます(ただし、イスラエルの「地」における繁栄は、千年期の基準からしても例外的であることは確かです)。

1) 地球 : 艱難期の地上の状況は、大洪水以来の人類史上のどの時期よりも悪くなります(マタイ 24 章 21 節; マルコ 13 章 19 節)。しかし、千年王国では、艱難期の非常に過酷な状況がなくなるだけでなく、キリストの地上支配によって、エデンの園以来の祝福と繁栄の時代が到来します。これは回復の時代(使徒行伝 3 章 21 節; ローマ 8 章 19-23 節)、園の木と同様のものとして予言されている「祝福の木」が示すように、至福千年はエデンの園に近い状態に戻るのです(エゼキエル 31 章; 34 章 27 節, 36 章 8 節; イザヤ 60 章 21 節, 61 章 3 節; アモス 9 章 15 節)。実際、この時代は、千年王国エルサレムという究極のエデンを目撃することになりますが、その栄光は、それに続く永遠の新エルサレムによってのみ凌駕されるものです(下記ポイント#5 参照)[101]。

新時代の祝福は、特にイスラエルとエルサレムに集中しますが、全世界に溢れ、気候(イザヤ 30 章 23-26 節; 黙示録 7 章 16 節)、環境(イザヤ 30 章 26 節, 35 章 7 節,

[101] 「7 つのエデン」については、本シリーズの第 1 部で扱っています。

41 章 18 節, 44 章 3 節)、動植物(イザヤ 11 章 6-9 節, 35 章 1-2 節, 41 章 19 節, 55 章 12-13 節, 65 章 10 節)、農業(詩篇 72 篇 3 節; イザヤ 30 章 23-24 節; エレミヤ 31 章 12 節, ゼカリヤ 8 章 12 節)にも良い影響を与えます。この「主の恵みの年」(イザヤ 61 章 2 節)には、地上の呪いがついに取り除かれ(創世記 3 章 17-19 節, 5 章 29 節; ローマ 8 章 19-23 節を参照のこと)、前例のない繁栄の時期を味わうことになるでしょう:

> その日もろもろの山にうまい酒がしたたり、もろもろの丘は乳を流し、ユダのすべての川は水を流す。泉は主の家から出て、シッテムの谷を潤す。(ヨエル 3 章 18 節)

> 主は言われる、「見よ、このような時が来る。その時には、耕す者は刈る者に相継ぎ、ぶどうを踏む者は種まく者に相継ぐ。もろもろの山にはうまい酒がしたたり、もろもろの丘は溶けて流れる。(アモス 9 章 13 節)

2) 人類： 艱難期の状況は破滅的なもので、生きている人間が地上から全くいなくなることを防ぐのは、神がその期間を短縮する以外ないというほどのものとなります(マタイ 24 章 22 節; マルコ 13 章 20 節)。それでも、世界の支配者としての悪魔の最後の大攻勢の結果、人類の数は減少し、人は「精金よりも少ない」状態となります(イザヤ 13 章 12 節; イザヤ 4 章 1 節, 17 章 6 節, 24 章 13 節; 黙示録 6 章 8 節, 9 章 15 節を参照のこと)。千年王国は、この傾向を完全に逆転させることになります。上記の地上の祝福と、主イエス・キリストの普遍的な支配の下での世界的な平和の到来は、人口の急速な増加に理想的な条件となるでしょう(ゼカリヤ 9 章 10 節)。癒し(イザヤ 29 章 18 節, 35 章 5-6 節)、健康(イザヤ 33 章 24 節; ゼカリヤ 9 章 17 節)、長寿(イザヤ 65 章 20 節, 65 章 22 節後半; ゼカリヤ 8 章 4-5 節)はすべて奇跡的に向上すると思われるので、この千年間、人類の数が急速に回復する要素は色々とあります。こうして地球の人口は、イスラエルとエルサレム(イザヤ 49 章 19-21 節, 60 章 22 節; ゼカリヤ 8 章 4-5 節)から始まり、全世界に拡大し、千年後には、消滅寸前だった国々が再び「海辺の砂のように」(黙示録 20 章 8 節)なるのです。

> わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。泣く声と叫ぶ声は再びその中に聞えることはない。わずか数日で死ぬみどりごと、おのが命の日を満たさない老人とは、もはやその中にいない。百歳で死ぬ者も、なお若い者とせられ、百歳で死ぬ者は、のろわれた罪びととされる。(イザヤ 65 章 19-20 節)

3) イスラエル： 艱難期の悪魔の主な目的の一つは、イスラエルを地上から滅ぼすことであり、イスラエルの歴史上のどの時期よりも激しく追求されます（黙示録 12 章 1-17 節）。これとは対照的に、千年王国では、アブラハムが約束を受けて以来初めて、イスラエルが諸国民の中で最高の地位を占めるようになります（創世記 12 章 2-3 節; 15 章 5-21 節, 17 章 4-19 節, 22 章 17-18 節 ）。イスラエルの民は地球の四隅から集められます（イザヤ 43 章, 49 章 22 節, 60 章 4 節, 66 章 20 節; エレミヤ 30 章 10 節; 31 章 8 節, 33 章 10-26 節; エゼキエル 11 章 17 節, 20 章 41 節, 37 章 21-28 節, 39 章 25-29 節; アモス 9 章 11 節; ゼパニヤ 3 章 20 節; ゼカリヤ 8 章 8 節, 10 章 10 節）。イスラエルは、神がアブラハムに与えた土地を完全に所有するようになります（ゼカリヤ 9 章 10 節）。祝福が集中する時代において、イスラエルは二倍の祝福を受け（イザヤ 61 章 7 節; ヨエル 2 章 25 節; ゼカリヤ 9 章 12 節）、全世界に祝福を与える存在となります（ゼカリヤ 8 章 20-23 節; 創世記 12 章 3 節も参照）。過去の世代では、硬さと頑固さが支配的でしたが（ローマ 11 章 25 節）、神によってこの特別な民の浄化が終わった後には、不信心なユダヤ人はほとんど存在しなくなります（イザヤ 4 章 4 節, 59 章 20-21 節; エゼキエル 20 章 34-38 節, 36 章 24-38 節; ゼカリヤ 13 章 1 節, 13 章 8-9 節; マルコ 3 章 2-4 節; ローマ 11 章 12-15 節, 11 章 26-27 節, 11 章 30-31 節）そして彼女の子らはキリストの福音を国々に伝えるでしょう（イザヤ 66 章 19 節）。艱難期に始まる教会の指導的役割はイスラエルに返還し、千年王国時代に完全に完了し、異邦人の信者はイスラエルの国に加わり、その祝福の豊かさに与るようになります。（イザヤ 14 章 1 節, 56 章 3-8 節; エゼキエル 47 章 21-23 節）[102]

> ユダもまた、エルサレムに敵して戦う。その周囲のすべての国びとの財宝、すなわち金銀、衣服などが、はなはだ多く集められる。（ゼカリヤ 14 章 14 節）

> その日、彼らの神、主は、彼らを救い、その民を羊のように養われる。彼らは冠の玉のように、その地に輝く。そのさいわい、その麗しさは、いかばかりであろう。穀物は若者を栄えさせ、新しいぶどう酒は、おとめを栄えさせる。（ゼカリヤ 9 章 16-17 節）

> あなたの天幕の場所を広くし、あなたのすまいの幕を張りひろげ、惜しむことなく、あなたの綱を長くし、あなたの杭を強固にせよ。（イザヤ 54 章 2 節）

[102] 上記「艱難期の重なり」の項参照。

4) エルサレム：エルサレムは艱難時代に、特に大地震（イザヤ 29 章 6-7 節; エゼキエル 38 章 17-23 節; 黙示録 11 章 13 節）、また恐ろしい包囲攻撃を受け（イザヤ 29 章 6-7 節; エゼキエル 38 章 17-23 節; ゼカリヤ 12 章 2 節,14 章 2 節）、大きな苦しみを通ります。しかし、エルサレムは、私たちの主が戻ってくる所でもあります（ゼカリヤ 14 章 3-5 節）。キリストの千年統治の間、エルサレムは悪魔の攻撃対象の中心地ではなく（ゼカリヤ 12 章 2-3 節,12 章 9 節, 14 章 2 節,14 章 12 節）、その時代に神が地上に注ごうとしているすべての比類ない祝福の中心地となります（イザヤ 60 章 10-14 節）。エルサレムは、文字通り、地上のすべての都市に勝って卓越したものとされます（イザヤ 2 章 2-3 節, 52 章 2 節; エゼキエル 40 章 2 節； ミカ 4 章 1 節; ゼカリヤ 14 章 10 節 ）。千年王国では、エルサレムは私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの住まいとなり、そこで人類はイエス・キリストと顔を合わせることになります（ゼカリヤ 8 章 3 節, 8 章 22 節, 9 章 9 節, 14 章 16 節）。エデンの末裔（まつえい）の座である[103] エルサレムは再建され（イザヤ 44 章 24 節～, 51 章 3 節, 61 章 4 節）、祝福にあふれ（イザヤ 54 章 11-17 節）、それ自体が全地の祝福となります（[＜新しい天の都としての＞新エルサレムについては]イイザヤ 65 章 18 節参照）：

> あなたの門は常に開いて、昼も夜も閉ざすことはない。これは人々が国々の宝をあなたに携えて来、その王たちを率いて来るためである。（イザヤ 60 章 11 節）

> 主はこう言われる、「見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、みなぎる流れのように、もろもろの国の富を与える。あなたがたは乳を飲み、腰に負われ、ひざの上であやされる。（イザヤ 66 章 12 節）

> 主はシオンを慰め、またそのすべて荒れた所を慰めて、その荒野をエデンのように、そのさばくを主の園のようにされる。こうして、その中に喜びと楽しみとがあり、感謝と歌の声とがある。（イザヤ 51 章 3 節）

4) 神の支配（メシア）：艱難期は、悪魔の手先である反キリストが、サタンを崇拝するワン・ワールドの国家を統率するため、地球とそこに住む人々は、悪魔の支配を最も激しく、直接的に経験することになります。（ダニエル 2 章 40 節; 第二テサロニケ 2 章 1-12 節,黙示録 13 章 1-18 節）人類史上最悪のリーダーシップは、千年王国において、私たちの主であり救い主であるメシア、イエス・キリストの個人的な統治によって最良のリーダーシップに取って代わられるので、際立った対照となることでしょう。（イザヤ 9 章 6-7 節, 33 章 17 節, エゼキエル 48 章 35 節; ダニエル 7 章 14 節; ゼ

[103] このシリーズの第 1 部Ⅱ.6.f を参照ください。

カリヤ 14 章 9 節)。 主の支配は、平和の支配(イザヤ 9 章 6 節)、繁栄の支配(イザヤ 9 章 7 節; 25 章 6 節)、大きな慰めの支配(イザヤ 9 章 3 節; 25 章 8 節)、そしておそらく最も重要なのは、正義の支配(イザヤ 11 章 3-5 節, 16 章 5 節, 32 章 1-8 節, 51 章 4-7, エレミヤ 33 章 15 節; ゼカリヤ 9 章 9 節)です。 主の正義と堅固な御手の下で、悪は抑えられ(詩篇 2 篇 9-12 節, イザヤ 11 章 4 節)、人類はかつてない安全を経験することになります(イザヤ 11 章 6-9 節, 32 章 16-20 節, 65 章 25 節、エレミヤ 33 章 16 節, ミカ 5 章 2-5 節)。 神がイスラエルに約束したすべてのことの究極の成就と焦点として(サムエル下 7 章 14 節; エレミヤ 33 章 14-17 節; ルカ 1 章 32-33 節)、キリストはすべての敵がその足の下に置かれるまで支配されます(第一コリント 15 章 24-28 節; 詩篇 2 篇、詩篇 110 篇参照)。

> 彼はもろもろの国のあいだにさばきを行い、多くの民のために仲裁に立たれる。こうして彼らはそのつるぎを打ちかえて、すきとし、そのやりを打ちかえて、かまとし、国は国にむかって、つるぎをあげず、彼らはもはや戦いのことを学ばない。(イザヤ 2 章 4 節 (参照:ミカ 4 章 3-4 節))

キリストの正しい支配は、私たちの経験で顕著な罪の性質の影響(例えば、犯罪や戦争)を抑制し、その結果、地上の真の天国、(不完全な人間を含むという制限の下で) 可能な限り完璧な環境、エルサレムから流れ出る景色や音、繁栄、そして肉体的・精神的な完全さにおいて祝福に満ちた世界が実現します。

> そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビデの位に座して、その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもってこれを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。(イザヤ 9 章 7 節)

6)神の知識: 艱難期には、世界史上最大の背教に導く扇動を通して(ダニエル 8 章 12-13 節, 11 章 33-35 節; マタイ 24 章 4-5 節, 24 章 24-25 節; 第二テサロニケ 2 章 3 節; 第一テサロニケ 4 章 1 節)、世界史上最大の迫害(マタイ 24 章 9-12 節; 黙示録 6 章 9-11 節, 7 章 13-14 節)、また世界史上最も直接的な地上支配を通して、サタンは神の知識をこれまでになく強力に弾圧しようとするでしょう(ルカ 18 章 8 節; アモス 8 章 11 節を参照)。 しかし、神がキリストを通して統治される至福千年では、神の知識は世界史上かつてないほど豊かにもたらされます。(イザヤ 19 章 21 節, 54 章 13 節前半; エレミヤ 31 章 34 節, 32 章 38-40 節, エゼキエル 11 章 19-20 節, 36 章 25-27 節; ハバクク 2 章 14 節; ヘブル 8 章 10-11 節)。

多くの民は来て言う、「さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう」と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。（イザヤ書 2 章 3 節）

水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。（イザヤ 11 章 9 節後半）

回復の第Ⅱ段階は「拡大の段階」です。これは、それ以前の段階（すなわち、艱難期ではなく至福千年）とは対照的に、祝福の度合いが非常に大きいためであり、また、より永続的な結果がもたらされるためです：ゴグ・マゴグの反乱の短い間を除いて、至福千年は永遠の国に直接移行します（黙示録 20 章 7 節～21 章 8 節）。このように、第Ⅱ段階は、第Ⅰ段階の最初の成就であり、地球は回復の 7 日間に居住可能な状態に回復され、人類の歴史の 7 千年の期間を可能にし、7 日目の究極の祝福である至福千年に到達します。第Ⅱ段階の地球の回復もまた、神の子、私たちの主イエス・キリストの直接の支配の下に、奇跡的で超自然的な方法で行われます（詩篇 2 篇 9-12 節）。艱難期の初めに聖霊の抑制力が取り除かれましたが（第二テサロニケ 2 章 6-7 節）、至福千年ではそれに代わって世界中に聖霊が注がれるようになります（ヨエル 2 章 28 節。イザヤ 32 章 15 節，44 章 3 節，54 章 13 節；エゼキ 36 章 27 節，39 章 29 節参照）、全人類は神の子の支配の下での地の回復の実を享受するようになります（エレミヤ 31 章 23 節；エゼキエル 39 章 25 節；ホセア 6 章 11 節；ヨエル 3 章 1 節；マラキ 4 章 6 節；マタイ 17 章 11 節；マルコ 9 章 12 節）。

このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならなかった。（使徒行伝 3 章 21 節）

3. 置き換え Ⅱ: キリストの支配と神の国

第一段階では、神はサタンとその天使に完全に取って代わる究極の源として、新しい被造物の秩序である人類を創造されました。原初の人間であるアダムとその配偶者は罪を犯す余地が与えられていました。その権限を最終的に行使した結果、（即座に）彼らと彼らの子孫は（出生した時から）自然に罪の状態に陥りました。しかし、悪魔の意図と期待に反して、神はアダムとエバを救済する手段を提供し、救済を望むすべての子孫を、最後のアダムである御子イエス・キリストの恵み深い贈り物によって救い、それ以前とその後のすべての世代の信者が、神の教会における役割に参加するようになっ

たのです。キリストが真の人間になり、十字架上での犠牲を終えて昇天されたことで、次の段階である、神を信じる人間の復活への道が開かれました。その道は、「私たちの救いの君-治める方」(ヘブル 2 章 10 節)により導かれてきました:

> …(私たちの)**罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。**(ヘブル 1 章 3 節後半)

第 I 段階では、現在の世界の支配者(サタン)に代わる新しい支配者(イエス・キリスト)、現在の闇の王国に代わる新しい王国(天の御国)(コロサイ 1 章 13 節)、悪魔の天使の従者に代わって王に従う新しい臣下(キリストの血で買い取られた信者)(ピリピ 3 章 20 節)が備えられ、置き換えの基礎が造られました。第 I 段階においては、これらの置き換えは、さらに二つの段階の成就を待つため、原理的なものでしかありません: キリストは栄光を受けられましたが、まだ支配を開始するために戻られてはいません。王国は原理的には(信者とキリストの霊において:ルカ 17 章 21節)ここにあっても、実際にはまだ機能していません(マタイ 11 章 12 節参照)。第二段階では、王であるキリストが再臨し、そして王権を宣言され(黙示録 11 章 15 節)、教会(人類史の最初の 6 日間に呼び出された信者からなる主の体)は復活して、彼らとご自分の千年王国を共に治めます(1 コリント 15 章 23 節)。

1) 王: 私たちの主、メシアであるイエス・キリストは、再臨されると、悪魔に代わってこの世の支配者となります:

a. その王権は、十字架上の勝利に**基づく**ものです:

- 十字架を通して、主は悪魔の世界に対して勝利を収めておられます。そしてこれからその世界を滅ぼされます(ヨハネ 16 章 33 節)。
- 十字架を通して、天の父は原則的にすでに悪魔の力に勝利し、その力を奪っておられます(コロサイ 2 章 14-15 節)。
- 十字架を通して、父は、死の力を持つ者(すなわち、ヘブル 2 章 14 節; 第二テモテ 1 章 10 節参照)に対して原則的にすでに終止符を打たれました。
- したがって、十字架を通して、サタンが直接支配する時代に終わり(すなわち、艱難期)をもたらす権利があり、それによって、千年王国への扉を開くことができます(黙示録 5 章 5 節)。
- 十字架を通して、主は裁きに遭うことになっている人類を永遠の命の勝利へと導かれました(マタイ 12 章 20 節; コロサイ 2 章 12-14 節; ヘブル 2 章 10 節を参照)。

- したがって、十字架を通して、私たちは死に対する主の勝利を分かち合うのです(第一コリント 15 章 54-57 節)。

b. 主の王権は、宣言、復活、昇天、および神の御座の右に座られたことによって確認されます:

- ハデス(すなわち、底知れぬ所)に幽閉されていた悪霊たちに対する主の勝利の宣言は、主の使命が成功したことと主の支配が間近に迫っていることを裏付けました(第一ペテロ 3 章 19 節; ローマ 10 章 5-7 節; コロサイ 2 章 15 節; エペソ 4 章 8-10 節参照)。それはまた、天使たちに対する主の従者たちの来たるべき優越性を示すものでした(第一コリント 6 章 3 節; ヘブル 2 章 5 節)[104]。

- 復活は、主の来るべき支配の予言を裏付け(詩篇 16 章 10 節; 使徒 2 章 24-31 節, 13 章 30-38 節)、王国の相続人としての地位を裏付け(使徒行伝 5 章 30-31 節, 10 章 40-43 節, 17 章 31 節、ローマ 1 章 4 節; 第一ペテロ 1 章 21 節)、そして主の犠牲の有効性を裏付け(1 第一コリント 15 章 13-19 節, 15 章 21 節; ピリピ 3 章 10 節; 第一ペテロ 1 章 3 節, 3 章 21 節)、主に従う者達がその復活に共にあずかることになる礎を築きました(ローマ 6 章 5 節, 8 章 11 節, 8 章 34-35 節, 10 章 9 節, 1 第一コリント 6 章 14 節; 第二コリント 4 章 14 節, 5 章 15 節, コロサイ 2 章 12 節)。

- 昇天は、私たちの大祭司の犠牲が受け入れられることを裏付け((ヘブル 4 章 14 節, 6 章 19-20 節, 7 章 26 節, 9 章 11-12 節)、至聖所に入ることによって、信じる者たちが神の御前に入るための扉を開きました(ヘブル 10 章 29 節)、十字架以前に死んだ信者は、昇天の時、勝利のうちに彼によって天国に導かれました(詩篇 68 篇 18 節; エペソ 4 章 8 節; 詩篇 68 篇 24-27 節, 146 篇 7 節後半; イザヤ 14 章 17 節後半, 42 章 7 節, 49 章 9 節, 61 章 1 節; ヨハネ 14 章 2-3 節, 14 章 6 節, 17 章 24 節; コロサイ 2 章 15 節; 第一ペト 3 章 18-22 節、黙示録 1 章 18 節 参照).

-神の御座の右に座することは、王の王、主の主としての地位を立証し(使徒 2 章 32-36 節, 5 章 30-31 節; エペソ 1 章 20-23 節、第一ペテロ 3 章 22 節)、その究極の支配がはじまるのは時間の問題です(詩 110 篇; 使徒 3 章 21 節; ヘブル 1 章 13 節; 1 第一コリント 1 章 7-8 節; 第一テサロニケ 1 章 10 節, テトス 2 章 13 節, ヤコブ 5 章 8 節 参照)、そして、信者が報われるための礎を造りました(詩篇 68 篇 18 節, イザヤ 40 章 10 節, 62 章 11 節; エペソ 4 章 8 節;第一テサロニケ 2 章 19 節; ヘブル 12 章 2 節; 第一ペテロ 1 章 7 節; 黙示録 22 章 12 節 参照)。

---

[104] このテーマについては、R.B. Thieme, Victorious Proclamation (Houston, 2nd ed. 1977)を参照。

c.　主の王権は再臨の時に完成される:

- 主の支配が始まると、最初のアダムによって失われた地上に対する人間の支配が、最後のアダムによって回復されることになります(詩篇 8 篇; ローマ 5 章 12-21 節; 第一コリント 15 章 45 節, ヘブ 2 章 7-9 節)。
- 主の支配が始まると、神のすべての敵を完全に服従させる最終プロセスが始まります(1 コリント 15 章 24-26 節;ピリピ 2 章 10 節参照)。
- 神の支配が始まると、「万物」を和解させ、神の宇宙に完全性と調和を回復させる最終プロセスが始まります(コロサイ 1 章 20 節, エペソ 1 章 10 節も参照)。
- 主の支配が始まることによって、地上は完全な神の子であられる私たちの主イエス・キリストの完全な支配と御臨在を永遠に楽しむことになります。黙示録 11 章 15 節, 詩篇 2 篇, 詩篇 45 篇, 48 篇, 72 篇; イザヤ 2 章 1-5 節, エゼキエル 48 章 35 節後半; ダニエル 7 章 14 節; ゼカリヤ 14 章; ルカ 1 章 32-33 節; 第二テサロニケ 1 章 6-10 節; 黙示録 19 章 11 節-20 章 6 節を参照)。

> ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。(イザヤ書 9 章 6 節)

> その日、その時になるならば、わたしはダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に行う。(エレミヤ 33 章 15 節)

> しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。(ミカ 5 章 2 節)

> 主はこう仰せられる、『わたしはシオンに帰って、エルサレムの中に住む。エルサレムは忠信な町ととなえられ、万軍の主の山は聖なる山と、となえられる』。(ゼカリヤ書 8 章 3 節)

> シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。(ゼカリヤ 9 章 9 節)

主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。(ゼカリヤ 14 章 9 節)

2) 王国のこと：私たちの王であるキリストの支配する神の国は、再臨のときから、この世(コスモス)の悪魔の王国に取って代わります(黙示録 11 章 15 節)。その時、王国は公然と、栄光に満ちた形で確立されます(ダニエル 2 章 44 節)が、それまでは悪魔の王国の中で、よそ者でありながら今にも始まろうとしている王国であり続けます(マタイ 3 章 2 節, 4 章 17 節)。王国は、将来王となる方の内にあったように、現在、将来の国民の中にあります(マタイ 10 章 7 節, 12 章 28 節; ルカ 17 章 21 節; ヨハネ 18 章 36 節)。彼が敵対されたように、私たちも敵対されているのです：

彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力ずくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。(マタイ 11 章 12 節　新共同訳)

しかし、その驚くべき日に、主は栄光のうちに現われ(マタイ 25 章 31 節; 第一テサロニケ 3 章 13 節; 第二テサロニケ 1 章 7 節; 第一テモテ 6 章 14 節; 第二テモテ 4 章 1 節; 黙示録 1 章 1 節)、私たちは主の栄光の統治を共有することになります(ダニエル 7 章 27 節; ローマ 8 章 18-19 節; 第一ペテロ 4 章 13 節)。私たちはこの出来事に望みを託しています(マタイ 6 章 10 節, 第一テサロニケ 4 章 16 節, 第二テモテ 4 章 8 節; テトス 2 章 13 節)。

3) 王家の集会：私たちの主イエス・キリストのエクレシア(*ekklesia* 集会)である教会は、悪魔の天使らに取って代わり、キリストの千年王国の統治を共にします[105]。

今ここで、イエス・キリストに信仰を置く私たちは皆、神の子です(ヨハネ1章 12 節; ローマ 8 章 14-23 節; 第二コリント 6 章 18 節; ガラテヤ 3 章 26 節, 4 章 5-6 節; エペソ 1 章 5 節; 第一テサロニケ 5 章 5 節; ヘブル 2 章 10 節, 12 章 5-8 節; 第一ヨハネ 3 章 1-3 節)、同じ国籍を持つ者であり(エペソ 2 章 19 節; ピリピ 1 章 27 節, 3 章 20 節)、そして御国の共同相続人(ローマ 8 章 17 節; エペソ 3 章 6 節; ヤコブ 2 章 5 節; 第一ペテロ 1 章 4 節, 3 章 7 節)です。しかし、現在、王とその王国はまだ明らかにされておらず、私たち教会は、原理的には王国を所有していますが(ヘブル 12 章 28 節)、来るべき祝福の完全な現実をまだ体験していないのです。イエスの初降臨の

105 ギリシャ語のエクレシアについては、前述の「教会とキリストの奥義：a. 教会」の項を参照。花嫁の友である千年王国の信者、すなわち「王国の子ら」(マタイ 13 章 38 節)については、前述「7 日目」を参照。

時、王国は間近に迫っていると誤って考えられ(ルカ 19 章 11 節, ヨハネ 6 章 15 節参照)、今日でもその文字通りの確立は将来に起こることです(第二テモテ 4 章 1 節; 黙示録 12 章 10 節)。その一方で、上で見たように、キリストの王家の集まりである教会の残りのメンバーは召し出され、悪魔の組織とうまく置き換えるため、神はその完成に向けてご自分の計画を戦略的に推し進めておられるのです。このプロセスが完全に終了するまで、私たち王国の相続人は、この世の王国に対する証人として、その王国から移され(コロサイ 1 章 13 節)、別の王国の良い知らせに応答し(ルカ 4 章 43 節)、そのために働き(コロサイ 4 章 11 節)、そのために苦しみ(第二テサロニケ 1 章 5 節; 黙示録 1 章 9 節)、それにふさわしい者になろうと努力し(ローマ 14 章 17-19 節; 1 第一コリント 6 章 9-10 節; ガラテヤ 5 章 21 節; エペソ 5 章 5 節; 第一テサロニケ 2 章 12 節, 第二テサロニケ 1 章 5 節; 第二テモテ 4 章 1-2 節)、それを楽しみにし(第二 4 章 18 節; ヘブル 11 章 16 節; 第二ペテロ 1 章 11 節)、私たちの神の世界王国が、その支配者である私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの御姿で、ついに到来するその栄光の日を待ち望んでいるのです(黙示録 11 章 15 節)。

そして、その日は必ずやってきます。再臨の時に私たちが復活することによって、王家の集まりである教会の特権が完全に機能するようになり、私たちは主の勝利の祝いを現実に共有することになるのです。
- 主の勝利の祝いにおいて:(イザヤ 25 章 6 節; マタイ 8 章 11 節, 25 章 1-10 節, 26 章 29 節; ルカ 13 章 29 節, 14 章 15 節, 22 章 30 節; 黙示録 19 章 7-9 節)。
- 主の神権において:(出エジプト記 19 章 6 節; イザヤ 61 章 6 節, 66 章 21 節; ローマ 12 章 1 節; ヘブル 13 章 10-15 節; 第一ペテロ 2 章 5 節, 2 章 9 節; 黙示録 1 章 6 節, 5 章 10 節, 20 章 6 節)。
- 主の支配において:(ダニエル 7 章 9 節, 7 章 22 節, 7 章 27 節; マタイ 19 章 28-29 節; ルカ 22 章 29-30 節; ローマ 5 章 17 節; 第一コリント 6 章 2-3 節; 第二テモテ 2 章 12 節, 黙示録 2 章 27-28 節, 3 章 21 節, 5 章 10 節, 20 章 4 節, 20 章 6 節, 22 章 5 節)。
- 主の相続において:(イザヤ 40 章 10 節, 62 章 11 節, ローマ 8 章 17 節; エペソ 3 章 6 節, 6 章 8 節; コロサイ 3 章 24 節; ヤコブ 2 章 5 節; 第一ペテロ 1 章 4 節, 3 章 7 節; 黙示録 11 章 18 節, 22 章 12 節) です。

第Ⅱ段階の置き換えでは、メシアが悪魔に代わり、光の王国が暗闇の王国に代わり、メシアの栄光の支配に加わる教会が、現在サタンに仕えている堕天使に代わるのです。メシア、天の御国、そしてメシアの王家の集まりは、エデンの園における最初のアダムの元の統治状態に比べて明らかに飛躍しており、光の担い手であるルシファーとしてかつて知られていた堕落した生き物に代わって、比類のない、神聖で輝きのある

明けの明星と置き換えられることになります(第二ペテロ 1 章 19 節; 黙示録 2 章 28 節, 22 章 16 節; 民数記 24 章 17 節; イザヤ 9 章 1-2 節, 42 章 6 節, 49 章 6 節; マタイ 2 章 2 節, 2 章 9 節, 4 章 16 節; ルカ 2 章 30-32 節; ヨハネ 1 章 4-5 節, 8 章 12 節, 9 章 5 節)。

第 III 段階: 完結期: 勝利の栄冠を凌駕する祝福で飾る(「極限」の段階)。

4. 裁きⅢ:大いなる白い御座と火の池: 第Ⅱ段階の裁きでは、サタンとその天使たちが世界から取り除かれたのは一時的なものでした。同様に、神の敵である人間の中でも特にひどい者たちは、艱難時代の間に滅ぼされましたが(ハルマゲドンの戦いでの最終的な集中的で猛烈な殺戮:黙示録 19 章 21 節)、それまでは、(反キリストとその偽預言者を除く: 黙示録 19 章 20 節)神を信じないで死んだ人達は、黄泉の国(ルカ 16 章 19-31 節。このシリーズの第 1 部を参照)に留まって、その究極の審判の日を待つことになります。キリストの千年の統治が完了した後、神の敵に対する裁きの最終段階が始まります。サタンとその堕天使たちは、人類に対する最後の欺き(ゴグマゴグの反乱: 黙示録 20 章 7-9 節)が終わった時点で、裁かれ(ヨハネ 16 章 11 節; 参照:ヨブ記 4 章 18 節, 15 章 15 節, 21 章 22 節; マタイ 25 章 41 節; 黙示録 20 章 10 節)、火の池に投げ込まれ、永遠にそこにいることになります(マタイ 25 章 41 節; 黙示録 20 章 10 節; イザヤ 24 章 21-22 節, 27 章 1 節, 34 章 4 節; エレミヤ 10 章 11 節; エゼキエル 28 章 18-19 節; ダニエル 4 章 35 節; ヨハネ 16 章 11 節; 第一コリント 6 章 3 節参照)。その後、不信仰な人類はすべて大いなる白い御座の裁きを受け、その後永遠に火の池に移されます(黙示録 20 章 11-15 節; 黙示録 14 章 10-11 節を参照)。このように、神に逆らったすべての者が最終的に処分され、復活の最後の段階、すなわち生きている千年王国時代の信者の復活が完了すると(第一コリント 15 章 24 節参照)、あらゆる意味での(肉体的、霊的、永遠の)死は、私たちのために死に至った主の犠牲によって、最終的に完全に排除されます(第一コリント 15 章 26 節, 15 章 54-57 節; ヘブル 2 章 14 節)。

第Ⅲ段階の裁きでは、最後の敵である死を神の宇宙から永遠に取り除くことで、天使と人間の歴史を通して神に敵対したすべての者が、決定的かつ最終的に対処されます。したがって、第Ⅲ段階は、一時的なものではなく、あらゆる意味で最終的なものであり、「究極の段階」です。悪魔とその天使の場合は、悔い改めの機会を与え、彼らの罪と神に対する永遠の敵意を明白にするために、予想を超えて裁きが延期されていましたが、第Ⅲ段階では、天使と人間に対する神の究極の裁きとなります。

5. 回復 III:新しい天、新しい地、そして新エルサレム: 第二段階の回復において、地はキリストの千年王国支配のためにエデンの園のような状態に戻されます。しかし、その言葉が示すように、千年王国は永久的な状態ではなく、むしろ 1)神の民イスラエルに対する神の約束(例えば、嗣業として地を継ぐ:エゼキエル 47 章 13 節～; 創世記 15 章 18–21 節も参照)と、2)御子メシアの支配によってすべての敵が征服されるという神の宣言が成就する(詩篇 110 篇 1 節; 詩篇 2 篇; マタイ 22 章 44 節; 使徒 2 章 34 節, 第一コリント 15 章 25-26 節, ヘブル 1 章 13 節, 10 章 12-13 節)過渡的な期間です。第三段階の回復は、永遠の始まりです。新しい天と新しい地が創造されると、祝福された永遠の状態が始まります(黙示録 21 章 1 節)。この王国は、父と子が共に支配し(第一コリント 15 章 24-28 節; ヘブル 12 章 23-24 節; 黙示録 21 章 22-24 節)、決して終わることはありません(ダニエル 7 章 27 節)。その中で、選ばれた天使(ヘブル 12 章 22 節)と選ばれて救われた人たち(ヘブル 12 章 23 節)は、三位一体の神と交わることになりますが、その祝福は、地上にいる私たちの理解を超えています(黙示録 21 章 4 節; 第一コリント 15 章 28 節を参照)。千年王国が祝福され、待ち望まれているように、永遠の王国はあらゆる点でそれを凌駕し、御子の存在に父の存在が加わり(黙示録 21 章 3 節)、千年ではなく永遠に続き(黙示録 22 章 5 節)、罪のない宇宙に存在し(第二ペテロ 3 章 10-13 節; 黙示録 21 章 7-8 節, 21 章 27 節, 22 章 14-15 節; イザヤ 52 章 1 節も参照) 、神御自身が造られた新しいエルサレムを本拠とします(ヘブル 11 章 10 節, 12 章 22-24 節; 黙示録 21 章 1 節-22 章 5 節)。先にも述べたことですが、今ここで、再び述べるべき重要なことは、救われた人たちの永遠の祝福のために神が治められる場所は、回復され、造り変えられ、特別に再構築された地球であるということです。エデンよりも、千年期のエルサレムよりも、新エルサレムは、比類のない、永遠の楽園であり、これまでの楽園で例証されたすべての祝福に満たされ、罪もなく終わりもなく、神ご自身の前で永遠に生きることができる場所です。

6. 置き換え III:父の降臨: 第三段階の置き換えでは、救われた人類の二倍の数(すなわち、千年王国の信者)も復活し(先に述べた「第七日＜の人類史＞」参照)、古い宇宙の永遠の滅亡と、人間および天使のすべての神の敵は火の池に送られ(黙示録 20 章 14-15 節, 21 章 1 節)、サタンとその天使らが復活した人間と置き換えられる過程が完了します。神のすべての敵と、死さえも(イザヤ 25 章 7-8 節, ホセア 13 章 14 節; 第一コリント 15 章 26 節, 15 章 54-57 節)打ち負かし、この世から罪と不義を取り除くと(2 第二ペテロ 3 章 10-13 節; 黙示録 21 章 7-8 節, 21 章 27 節, 22 章 14-15 節)、王の帰還、つまり父が再び地上に住まわれる道が開かれることになります。神はサタンが汚した原初のエデンではなく、新しい特別な楽園である新エルサレムに来られるのです。神の設計による楽園は、今や都市の形で建設され、人間が集団で住むために特別に設計された楽園となります(ヘブル 11 章 10 節; ヘブル 2 章 16 節参

照)。その時、地上と(エゼキエル 10 章 18 節参照)、救いのために真の人間性を身にまとわれた御子を地に送られた父なる神に(ヘブル 2 章 14-15 節)栄光が本当に帰され、世界を造られた御子、こうして私達が考察している歴史を形成したキリストと共に、私達は永遠に住むことになります。その時、神は「すべてにおいてすべて」(1 第一コリント 15 章 28 節; 第一コリント 3 章 21-23 節参照)となられ、想像を絶する荘厳な創造の完成となるのです。

V. サタンに対する神の処遇の歴史的概観

このシリーズは、艱難期の究極的な原因であるサタンの反乱の観点から、艱難期を研究するための背景を提供するものであるため、この時点でサタンとその従者に対する神の処罰という観点から、これまで研究したサタンの経歴を概略的に説明するのがよいでしょう:

1. サタンに対する神の最初の処分

a. 神の最初の最良の意志は拒否された: 完璧に創造され、完璧な宇宙に住んでいたにもかかわらず、サタンとその従者たちは、神の完璧な計画を拒否し、従順ではなく反抗を選択した(サタンの反乱　第一部)。

b. 裁きと降格: 神を拒み、神に反抗したサタンとその従者たちは、その反抗のために神によって裁かれ(サタンの反乱第一部; ヨハネ 16 章 11 節;ヨブ 4 章 18 節, 15 章 15 節, 21 章 22 節; マタイ 25 章 41 節; 黙示録 20 章 10 節)、神への奉仕の務めから外された(サタンの反乱第一部 IV.3 項)。

c. 宇宙への裁き: 悪魔とその従者による罪深い行為によって汚染された元の天地は(ヨブ記 25 章 5 節参照)、神によって総括的に裁かれ、暗闇に陥った(サタンの反乱第二部 II.2 項)。

d. 処刑の遅延:宇宙を裁かれた神は、それでもなお、人間の歴史というまだ予見されていない出来事の完了を待って、サタンの刑の執行を延期された(サタンの反乱　第四部　II 項、および上記 II 項参照。創世記 6 章 3 節; ローマ 2 章 4 節, 3 章 25-26 節, 9 章 22 節; 第二ペテロ 3 章 9 節, 3 章 15 節参照)。

この遅れは、以下の事柄をもたらした:

1. すべての反対にもかかわらず、(御子イエス・キリストを中心とする)神の御計画がそのすべての点において成功裏に完了し、神が栄光を受けることになった。

2. 悪魔の完全に強情な心と悔い改めようとしない思いを、神の新しい被造物である人間に対する神の誠実さと対比して示すことによって、神の正当性を証明することになった。それによって、神はその裁きにおいて正当化され(詩篇 116 篇 11 節; ローマ 3 章 4 節)、悪魔の反対にもかかわらず人類への救いの約束をすべて守ることによって正当化される(イザヤ 49 章 9 節; ヨハネ 16 章 11 節)。

3. サタンの反乱によって失われたものを置き換え、悪魔とその従者に取って代わる人々の自由意志による選択を保証する(上記 II 項)。

e. 最初の仮釈放: サタンは、神が世界を再構築し、人類を創造して置き換えのプロセスを開始するのを観察する自由を与えられた(サタンの反乱 IV 項)。

f. 最後のオリーブの枝: サタンは、人間の創造から適切な結論(すなわち、神は無敵であり、したがって、悪魔に対する神の判決を実行することは避けられない)を導き出すのではなく、神の側のこの最後の暗黙の申し出を拒否し、代わりに行動の自由を利用して、今度は人類史の戦場で反乱を再開した(サタンの反乱第三部 IV.1.a 項; サタンの反乱第四部 II 項)。

2. サタンに対する神の暫定的な処分

a. 幽閉: イエス・キリストの再臨に伴い、悪魔とその従者たちは、メシアの王国から悪魔の影響を排除するために、千年の間、底知れぬ所に幽閉されます(上記、IV.1.6 項参照)。

b. 二度目の仮釈放: 千年王国が終わると、サタンは一時的に解放され、それまでの平和な世界をかき乱して、神に対する最後の攻撃を行う(詩篇 2 篇 1 節〜)。多くの人間がキリストの完全な支配を拒否しようとし、悪魔が神に対抗するこの最後の無益な試みに彼らを導こうとすることは、悪と神の拒否が状況に由来するものではなく、被造物の自由意志による選択に由来するものであることの最後の揺るぎない証明となります。

3. サタンに対する神の最終処分

ゴグ・マゴグの反乱が終わり、汚れのない聖なる新天地が創造される直前に、かつて人類の歴史が始まる前に悪魔とその天使らに下された判決が最終的に実行されます(イザヤ 14 章 3-23 節, 24 章 21-23 節, 27 章 1 節, 34 章 1-5 節; エゼキエル 28 章 11-19 節; エレミヤ 10 章 11 節; ダニエル 4 章 35 節; ルカ 10 章 18-20 節; 第一コ

リント 6 章 3 節; 黙示録 20 章 7-10 節)。そして、彼らはその時点から永遠に火の池に追いやられます(黙示録 20 章 10 節; 上記 IV.3.a 節参照)。火の池とその中での彼の最後の処分は(神ではなく彼に従うことを選んだすべての被造物とともに)、神とその慈悲を拒絶することの愚かさを示す永遠の記念として立つでしょう(黙示録 14 章 10 節;イザヤ 66 章 24 節; 黙示録 19 章 3 節)。なぜなら、神とその御子に仕える代わりに、神に取って代わろうとしたサタンは、彼に反論し、悪魔を打ち負かすために十字架の勝利を得られた御子に取って代わられるからです(ルカ 10 章 18 節; ヨハネ 12 章 31 節; ローマ 16 章 20 節; ヘブル 2 章 14 節; 第一ペテロ 3 章 22 節; 第一ヨハネ 3 章 8 節)。

VI. 神の Q.E.D.(証明完了)

天使と人間の歴史は、神の支配の外にあったことはありません(ヨブ 12 章 23 節; 詩篇 9 篇 4-8 節; イザヤ 40 章 15 節, 40 章 22-24 節; エレミヤ 10 章 7 節, 18 章 5-10 節; ダニエル 4 章 35 節)。むしろ、歴史は常に神の計画に従って進行してきました。罪、悪、神への反逆は、すべて被造物の自由意志による決断の結果ですが、神の計画を阻止することはできませんでした。実際、神はこのような意図的な不従順によって、羊と山羊のように、神を愛する者と憎む者を分けられたのです。なぜなら、神は完全な愛ですべての人を愛されたのですが、被造物がその返答として神を愛さないという自由意志による選択も尊重されたからです。そして、この選択の期間、歴史の流れを通して、神は最大の個人的犠牲である御子の贈り物を通して、神に応えようとする者が応え、それによって神と共に永遠に生きることができるようにされました。そうすることで、つまり、恵みと自己犠牲の普遍的な歴史全体を通して、神はすべての敵対者の口をきっぱりと塞がれたのです。もともと弱い部類の被造物である人間の口から発せられる賛美によって、悪魔を黙らせ、完全に反駁されました。

> みどりごと、ちのみごとの口によって、ほめたたえられています。あなたは敵と恨みを晴らす者とを静めるため(あなたの賛美のため: マタイ 21 章 16 節)、あだに備えて、とりでを設けられました。(詩篇 8 篇 2 節)

永遠の状態が始まった瞬間から、世界は神の賛美だけが歌われるのを聞くことになり、それは生前に神を告白した者、神を選び、永遠に神と共にいることを選んだ者の唇から発せられるものです。(ヨハネ 4 章 23 節; 第一テモ 2 章 4 節; 第二ペテロ 3 章 9 節)

しかし、まことの礼拝をする者たちが、**霊と**（すなわち、私たちの霊が神の霊に反応し）**まことと**をもって（すなわち、私たちの心が神の真理に反応し）父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことととをもって礼拝すべきである」。（ヨハネ 4 章 23-24 節）

サタンの反乱シリーズのこの最後の部分において示したかったことは、歴史は神の意図された結果を達成するために、神の御子であり私たちの主であり救い主であるイエス・キリスト（エペソ 3 章 10-11 節）を中心として回っており、天使と人間は神が多様な知恵で計画し構築した、なくてならぬものです。サタンの嘘と攻撃は、様々な手段で、様々な場所で、様々な時間に、様々な方法で、最終的には、神の意志を促進し、神がずっと言ってこられたこと、すなわち、神に応える者には慈悲深く、神を拒絶し反対する者には太刀打ちできない存在であることを示すために役立つことになりました：

あなたはいつくしみある者には、いつくしみある者となり、欠けたところのない者には、欠けたところのない者となり、清い者には、清い者となり、ひがんだ者には、ひがんだ者となられます。（詩篇 18 篇 25-26 節）

神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う。（ヤコブ 4 章 6 節）

悪は論破され、正義に軍配が上がりました。損なわれたものは回復され、失われたものは置き換えられました。普遍的な調和が再び確立され（第二コリント 5 章 19 節; コロサイ 1 章 20 節）、私たちの神の知恵と力と恵みのゆえに、すべてが以前よりも良くなっています。御子を拒絶して不完全になった天使は、御子の犠牲によって完全となった不完全な人々に取って代わられました。そして、その過程で、神の栄光は肯定され、拡大されたのです。Q.E.D.（証明完了）です。

VII. 艱難期の背景

宇宙の歴史と私たちの人生には似たものがあります。私たちは、神が私たちに啓示されたので、未来の最も重要な詳細を知っています。神が歴史の細部を支配しておられるように、私たちの人生も同様です。神様が悪魔に打ち勝ち、時代を共に良い方向へと導いてくださったように、神様を愛する人々の人生においてもそうなのです（ローマ 8 章 28 節）。イエス・キリストを実行者とする御計画によって宇宙に平和と全体性と調和を回復されたように、私たち一人一人にも、もし私たちが主の御声を聞き、主に従う

ならば、主はそうしてくださるのです。そして、万物の終わりには、初めをはるかに超える豊かさで溢れる現実がもたらされるように、私たちがイエスのために命を失うとき(マタイ 10 章 39 節)、私たちが求め、考える以上のものを得るのです(エペソ 3 章 20 節)。

このような神の御計画の永遠性と、悪魔に対する神の完全な勝利の現実という視点は、時代の終わりに直面している私たちに残された時間の短さを考えれば、なおさら重要です(第一コリント 10 章 11 節; 第一ヨハネ 2 章 18 節)。それに、＜悪魔に対する神の完全な勝利という視点は＞来たる艱難期について聖書が述べていることを研究し、理解し、理解するための不可欠な前提条件です。サタンに対する私たちの神の完全な勝利という知識は、悪魔の攻撃が最も集中する時期を通して、私たち神の子供たちの神による究極の解放を確信させ、艱難期の詳細な研究への準備となります。この出来事は、そのクライマックスに至る悪魔の反乱に照らしてのみ完全に理解できるものです。

> しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ(神の)御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれるのです。
>
> 愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。
>
> ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。
>
> 主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは(主によって調べられ)暴かれてしまいます。
>
> このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがた(クリスチャン)は聖なる信心深い生活を送らなければなりません。
>
> 神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。
>
> しかしわたしたちは、義の宿る[世界である]新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。(第二ペテロ 3 章 7-13 節　新共同訳)

＜ー以上第五部で「サタンの反乱」シリーズは終了です＞